基盤研究(C)　農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究

農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究

2020～23年度 科学研究費補助金
基盤研究(C)研究成果報告書
課題番号　20K01075

2024.3

高知大学人文社会科学系人文社会科学部門

研究代表者　宮里 修（高知大学）

2024年3月

農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究

2020～23年度 科学研究費補助金
基盤研究(C)研究成果報告書
課題番号　20K01075

2024.3

高知大学人文社会科学系人文社会科学部門

例言

本書は、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の交付を受け実施した研究の成果報告書である。研究課題の概要は以下の通りである。

《研究種目》

基盤研究(C)(一般)

《課題番号》

20K01075

《研究課題名》

農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究

《研究代表者》

宮里修(高知大学教育研究部人文社会科学系人文科学社会部門・准教授)

《補助事業機関》

令和2年度～令和5年度

《助成金額》

令和2(2020)年度:直接経費 1,600千円　間接経費 480千円

令和3(2021)年度:直接経費 500千円　間接経費 150千円

令和4(2022)年度:直接経費 700千円　間接経費 210千円

令和5(2023)年度:直接経費 500千円　間接経費 150千円

調査・研究の実施にあたり下記の方々、機関からご助力を賜りました。記してお礼申し上げます(敬称略、五十音順)。

石橋由加利、石本恵利子、石本キワ、岡田憲一、斎藤美幸、柴田昌児、田中寧音、谷若倫郎、出原恵三、中村豊、根岸洋、信里芳紀、馬場伸一郎、久田正弘、藤原ゆみ、村上恭通、山崎孝盛、山崎美希、吉成承三、米田克彦、

あいち朝日遺跡ミュージアム、愛知県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、石川県埋蔵文化財センター、一宮市博物館、愛媛県教育委員会、愛媛県埋蔵文化財センター、大阪市文化財協会、大阪府文化財センター、大町市文化財センター、岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、香川県埋蔵文化財センター、香美市教育委員会、岐阜県文化財保護センター、高知県教育委員会(高知県歴史文化財課)、高知県埋蔵文化財センター、香南市文化財センター、神戸市埋蔵文化財センター、島根県教育庁埋蔵文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館、智頭町教育委員会、尖石縄文考古館、徳島市立考古資料館、土佐市教育委員会、豊川市桜ヶ丘ミュージアム、田原市博物館、東大阪市立郷土博物館、東大阪市立埋蔵文化財センター、備前市加子浦歴史文化館、福井県教育庁埋蔵文化財センター、湯沢市教育委員会

《発掘調査参加者》

［第1次調査］青木聡志、伊藤真由、大内香、金田将成、下木千佳、竹内桃花、田村遼、長岡里咲、藤田京佑、宮地麻未、宮本春菜、［第2次調査］大内香、笠井聖音、上岡明星、小林さと、田中光輝、田中寧音、平松里緒、宮本春菜、森幸子、山崎美希、［第3次調査］赤松藍、明日陽祐、平田りく、平松里緒、［第4次調査］赤松藍、明日陽祐、大野航太朗、栗野葵、下木千佳、田部巴茉、山本嵩裕、［第5次調査］小野崎泉美、北田そら、栗野葵、佐原希海、田部巴茉、長尾哲汰、永田遥貴、廣地優、山本嵩裕、脇阪瑠介

本文目次

Ⅰ. 研究の経緯と経過……1
1. 研究の目的と課題の設定……1
2. 調査研究の経過……2
Ⅱ　居徳遺跡の発掘調査……3
1. 居徳遺跡第1次(2019年度)調査……4
2. 居徳遺跡第2次(2020年度)調査……7
3. 居徳遺跡第3次(2021年度)調査……15
4. 居徳遺跡第4次(2022年度)調査……18
5. 居徳遺跡第5次(2023年度)調査……20
6. 出土遺物の総括……25
7. 総括……26
Ⅲ. 資料報告……69
1. 居徳遺跡4D区出土資料……69
2. 倉岡遺跡出土資料……69
Ⅳ. 成果論文……77
① 南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列……77
② 南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年……99
③ 南四国出土土偶の系譜……115
④ 縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について……133

挿図目次

第1図　居徳遺跡の位置……1
第2図　居徳遺跡の位置……3
第3図　居徳遺跡調査区……5
第4図　調査区の設定と旧地形……6
第5図　T1平面図・断面図……7
第6図　予備調査箇所……8
第7図　予備調査柱状図……9
第8図　T2平面図……12
第9図　T2土層断面図……13
第10図　T3平面図・断面図……16
第11図　T4・T5平面図……21
第12図　T4・T5土層断面図……22
第13図　T6平面図・土層断面図……24
第14図　居徳遺跡出土遺物（弥生時代前期～古墳時代前期）……29
第15図　居徳遺跡出土遺物（古墳時代）……30
第16図　居徳遺跡出土遺物（弥生時代前期～古墳時代前期）……31
第17図　居徳遺跡出土遺物（古墳時代）……32
第18図　居徳遺跡4D区出土遺物1……72
第19図　居徳遺跡4D区出土遺物2……73
第20図　居徳遺跡4D区出土遺物写真1……74
第20図　居徳遺跡4D区出土遺物写真2……75
第22図　倉岡遺跡出土磨研鉢写真……76

表目次

表1-1　出土遺物観察表……27
表1-2　出土遺物観察表……28
表2-1　居徳遺跡4D区出土遺物観察表……70
表2-2　居徳遺跡4D区出土遺物観察表……71

Ⅰ．研究の経緯と経過

1．研究の目的と課題の設定

「農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究」とする本研究課題は、つぎの問題意識をもった取組みである。

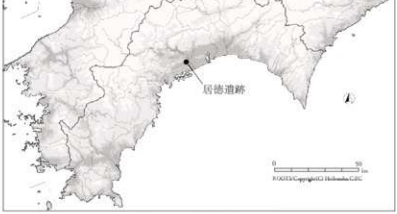
「本研究は、狩猟・採集生活から農耕生活への移行期（縄文時代から弥生時代への移行期）にあって「伝統の保持」という対応をはかった一地域の事例（土佐市居徳遺跡）のもつ「歴史性」の解明を目的とする。居徳遺跡を特徴づける考古資料は「東日本系土器」「大型土偶」「木胎彩色漆器」「木製鍬」「受傷人骨」が著名であるが、これを歴史研究の課題に変換すると「なぜ弥生文化の波及に呼応するように縄文文化伝統が及んでくるのか」「居徳遺跡はどのように経由地・居留地となったのか」「居徳遺跡にはどのような社会・文化が形成されたのか」「縄文文化伝統の保持は構成にどう影響したのか」「縄文文化伝統の保持は後世にどう影響したのか」となる。これらの問いに回答をあたえることが本研究の目的である。」（交付申請書）

研究の実施にあたっては、具体的に３つの課題を設定した。(1)集落の空間構成を解明する、(2)関連資料を充実化する、(3)東日本系資料の系譜を明らかにする、の３課題である。

(1)については、居徳遺跡の発掘調査を実施することとした。既往の発掘調査で確認されたのは埋没丘陵の先端付近とその間の谷部であり、集落域においては縁辺の廃棄場であると考えられる。居徳遺跡は遠方からの移動者が目的地に据えた集落であり、相当規模の構成をとっていたと考えられる。遺跡の理解には、発掘調査を進め遺跡の範囲と空間構成を把握する必要がある。発掘調査では現在の地表からは確認できない埋没丘陵や谷の位置関係の把握を課題とし、地勢の確認につづいては丘陵部を対象として遺構の探索をおこない、居住域の発見を目指すこととした。

(2)については、居徳遺跡のなかで特殊区域とみられる、土偶や受傷人骨が出土した4D区の出土資料に対して、未報告資料の資料化を進めることとした。2015年度以来、先行して実施してきた整理作業の継続であり、すでに抽出を終えた縄文後期土器、刻目突帯文土器について整理作業を進め、資料化をおこなうこととした。関連遺跡である倉岡遺跡出土資料についても2017年度以来継続している整理作業を進め、資料化をおこなうこととした。

(3)については、居徳遺跡から出土した土偶、東日本系土器の系譜を対象とした。土偶は東北－北陸系の大型土偶、近畿系の台式土偶、土器は大洞式の特殊壺、北陸系の浅鉢・蓋、その他不詳の土器群である。検討の対象となる地域は東北（青森・宮城・福島）、北陸（石川・福井）、近畿（滋賀・奈良）、および山陰である。まずこれらの地域の関連資料を集成し、居徳遺跡出土の関連資料についてはレプリカの作成をおこない、集成資料にもとづいて、順次資料調査を実施し、課題に取り組むこととした。



第１図　居徳遺跡の位置

2．調査研究の経過

2020年度に始まる本研究課題に先立って、発掘調査については、想定される居徳遺跡の居住地について踏査・検土杖を用いた簡易ボーリング調査・第1次発掘調査を実施し、次なる調査地について目途をつけた状況にあった。整理作業については、居徳遺跡および近隣の倉岡遺跡出土の未報告資料に対する整理作業を2015年度よりはじめており、出土遺物のカウント・分類・抽出を終え、実測等資料化の作業に着手した状況であった。

2020年度は、発掘調査については居住域の探索に必要な旧地形の詳細な把握を目的として、調査地に選定した地番についてまず検土杖を用いた簡易ボーリング調査を実施し、把握した埋没丘陵の地形変換点付近を対象に基準に幅5m、長さ10mのT2を設定した。T2の調査では埋没丘陵を示す地山と傾斜変換点を検出し、古墳時代の遺物を含む黒色の包含層と古墳時代と考えられるピット数基を確認した。整理作業はコロナ禍の影響もあり作業が滞ったが、状況が改善した12月頃から作業を再開し、継続してきた倉岡遺跡から主たる対象を居徳遺跡4D区出土縄文土器に切り替え、実測等の作業を進めた。

2021年度は、発掘調査においては埋没丘陵と包含層の延長を探索するためT2に隣接するT3を設定した。T3では予想外の方向にひろがる谷地形を把握するとともに既出の包含層が古墳時代のものであることを確認した。湧水の影響で層位の区分・遺構の検出が不十分に終わったが、埋没丘陵と包含層の延長を確認することができた。整理作業についてはコロナ禍の影響で十分な作業時間を確保することができず対象とする居徳遺跡4D区出土縄文土器の一部を図化するにとどまった。2020年度よりコロナ禍の状況をみながら進めた資料調査の成果をまとめ、深鉢と磨研鉢のそれぞれについて分類・編年を主題とする論考を発表し、今後の関連研究のための時間軸と地域間関係を考えるための基礎を整えた(成果論文①②)。

2022年度は、発掘調査においてはT3で確認した埋没丘陵延長の南側と西側に広がる斜面の地形雄および包含層の状況を詳細に把握するためT4・T5を設定した。南斜面にあたるT4ではこれまでの調査で確認してきた包含層の上部に土壌化が認め、旧地表となる不整合面として確認することができた。包含層上部にあたる土壌化層からはまとまった数の古墳時代前期および中期の土器が出土した。西斜面にあたるT5では埋没丘陵の地形変換点を把握することができ、傾斜変換点付近で複数のピットプランを検出した。整理作業では居徳遺跡4D区出土土器、倉岡遺跡出土土器について実測を中心に、資料化の作業を進め、コロナ禍で遅滞した状況を幾分取り戻すことができた。また近畿・東海・四国において資料調査を積み重ね、深鉢および磨研鉢の時間軸にもとづき、居徳遺跡を中心とする南四国出土土偶の系譜についての論考を発表し、東北・北陸・近畿との関係及び各資料の時期を明らかとした(成果論文③)。

2023年度は、発掘調査においては埋没丘陵の西斜面を対象にT6を設定し縄文・弥生移行期層および遺物の検出を目指した。傾斜変換点・包含層の土壌化・不整合面を検出し、明確な包含層の検出は果たせなかったが、弥生前期の土器が出土し、縄文系の土器は出土しなかったが目的とした時期の遺物を検出することができた。整理作業では、居徳遺跡4D区出土土器を中心に実測・製図をおこない成果報告書の作成を進めた。また東北・北信越・東海・山陰・近畿での資料調査をおこない、居徳遺跡出土異系統土器について論考を発表し、限定された時期幅のなかで各地の土器が変容を被りつつ南四国にいたった状況を明らかとした(成果論文④)。

Ⅱ　居徳遺跡の発掘調査

高知県土佐市高岡乙居徳に所在する居徳遺跡は、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査が1997～99年度にかけて高知県埋蔵文化財センターにより実施された。遺跡は北側の虚空蔵山系から派生して南東に延びる丘陵の縁辺から低地にかけて広がる。長く帯状に設定された調査区は、清滝山からおよそ東南に伸びる(埋没)丘陵先端をおよそ南北に断ち割った巨大なトレンチの様相で、4つの丘陵と4つの谷が露出した格好である。土佐市教育委員会(2015)の整理にしたがって南から順に丘陵1～4とする(第3図)。25,673㎡に及ぶ調査区は1～5区に区分され、それぞれがさらに細かく分かれる。縄文時代の遺物がとくに多く出土したのは丘陵1の南北両斜面(1A区・1C区)であり、丘陵2の周辺(3A・4C区)がそれに続く。4D区については再検討の余地があり、関連資料がさらに加わるとみられる

縄文・弥生移行期の遺構には貯蔵穴が約20基、溝(水路)数条があり、他に無数のピットが埋没丘陵の緩斜面に穿たれていた。住居跡等は発見されておらず、調査箇所は廃棄場をはじめ集落の縁辺部とみられる。また2013年度には市道建設に伴い土佐市教育委員会が丘陵2の南延長部にあたる151㎡を調査した。

貯蔵穴は丘陵1の南斜面(1F区)に16基、丘陵3の南斜面(4B区)に4基が発見されている。丘陵1の貯蔵穴は流路に近い緩斜面の下部にあり、平面は円形～楕円形、規模は30～100cm大で多くが60cm大、深さは60～90cm、掘方には筒状・鍋状・鉢状がある。覆土の中央に灰白色粘土を挟む例があり、下層からが堅果類が出土した。P223から5.0ℓの堅果類が出土しイチイガシ・シラカシ・コナラ属と鑑定された。丘陵3の貯蔵穴は緩斜面の下位に4基があり、平面は不整円形で規模は60～100cm大、深さ20～40cm、掘方には筒形は袋状がある。SK1は湧水区域にあり、上面には土坑を覆うように席(網

第2図　居徳遺跡の位置

籠ヵ)が検出された。内部には1,000点を超える堅果類がありイチイガシ、シラカシと鑑定された。土器の共伴がないため時期の比定が困難だが、検出面により弥生時代前期(縄文・弥生移行期)と判断された。

丘陵1と丘陵2の間の谷(谷2とする)からは溝(水路)が検出された。2A区では同一箇所に軸と形態を異にする3時期の溝(SD1→SD2→SR4)が確認され、古墳時代にも水路区域として継続整備された。最古のSD1は断面逆台形で、幅60～100cm、深さ30cm、一直線に南北にのび58mまでが確認され、さらに3B区のSD1に連結する。壁には打ち込まれた杭があり水路として整えられている。つづくSD2は規格性が乏しく小規模であるが、SR4は幅1～1.8mと規模が大きくなっている。出土遺物により、軸方向を違える一連の溝は縄文晩期から弥生前期とされる。

丘陵2と丘陵3の間はすり鉢状の窪地(谷3とする)であったと考えられる。中央(4C区)には流路と報告された水流があり脇で土坑2基が検出された。斜面部(4A・B・D区)には出土遺物が多く、うち4D区の窪地に堆積したⅣ層からは多数の獣骨の他、人骨(刀楡痕)や土偶があり、また流路からは木胎漆器の出土もあり、単なる廃棄場以上に場の特別さを感じさせる。

4D区から出土した多数の獣骨のうち927点が同定された。ほぼ同数のイノシシ・ニホンジカが全体の9割を占め、他にイヌ、サメ類、ニホンザル、タヌキ、オオカミ、ノウサギなどが確認された。鳥類・貝類・魚類の僅少さが逆に特徴とされた。先の貯蔵穴出土の堅果類とあわせると、山林における狩猟・採集が生業の中心であったと考えられるが、縄文晩期とされる木製鍬は農耕の存在を示唆しており、比重はともかく農耕段階に入った複合経済であったと考えられる。発掘調査に拠り遺跡の範囲と内容を詳しく追求していかねばならない。出土遺物の概要はⅢ章で述べる。

縄文時代と古墳時代を中心とした複合遺跡であるが、とりわけ縄文時代晩期においては大きな発見があった。居徳遺跡が位置する高東平野ないし仁淀川下流域には古く倉岡遺跡の存在が知られていたが、居徳遺跡と共に北高田遺跡や上ノ村遺跡など発見が相次ぎ、現在では縄文晩期遺跡の集中地帯である認識されている。居徳遺跡の発見はとりわけ重要で、東北系・北陸系などの東日本系土器、大型土偶、木胎彩色漆器、木製鍬、殺傷人骨などは、縄文・弥生移行期における伝統と変革のせめぎ合いを顕著に示しており、移民により開拓された農村である南国市田村遺跡とは顕著に対比される。南四国には全く異なる2つの弥生時代の始まりがあった。

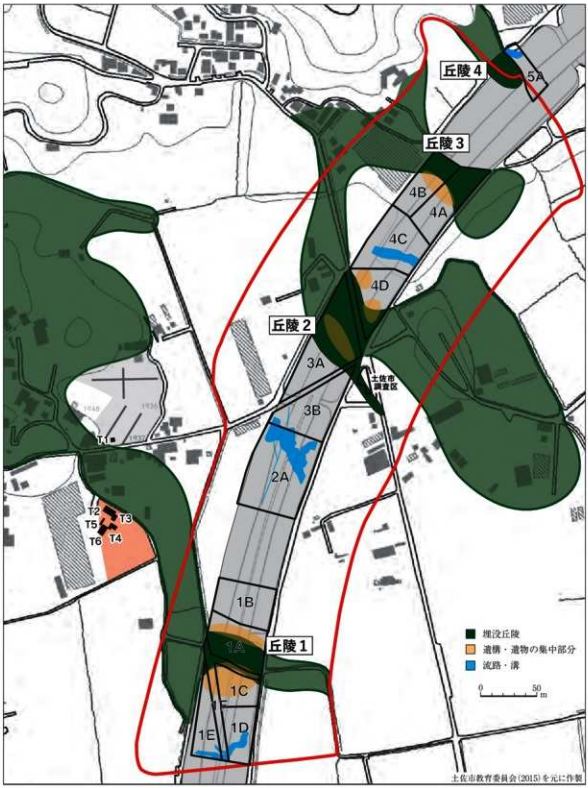
1. 居徳遺跡第1次(2019年度)調査

縄文・弥生時代移行期の重要資料が豊富に出土し、全国的に注目を集める遺跡でありながら、いまだ廃棄場が知られるに留まる居徳遺跡について、遺跡の範囲および集落の中心を確認することを目的として現地調査に着手した。

第1次調査では、90年代調査で拡散された1区丘陵の山側延長について探索した。地形図と現地踏査をもとにまず7月に検土杖を用いた土壌堆積調査(地表下90cmおよび180cm)を実施した。その成果にもとづき8月下旬に3×3mの調査坑(T1)を設置して発掘調査を行った。地表下150cm(一部180cm)までを掘削し、地表下80cmで厚さ70cmの遺物包含層(古墳時代)を確認した。さらに深部には縄文～弥生時代の遺物包含層があると考えられる。

(1) 予備調査

居徳遺跡の集落中心部を探索すべく踏査を繰り返した結果、90年代に発掘調査された居徳遺跡1区丘陵の北側延長部にあたる、土佐市高岡町字東居徳乙1936番・1937番を調査候補地に選定した。土地所有者の協力を得て、まず2019年7月4・12日に、1936番に対して、検土杖を用いた簡易ボーリング調査を実施した。7月4日にトータルステーションにより基準点を移動し、7月12日には検土杖により土壌の観察をおこなった。東西50m、南北30m範囲について、中心と東西南北端の地表下



第3図　居徳遺跡調査区

180cmまでを確認したところすべて谷埋めの泥土であった。内部でも数カ所実施したが状況は変わらず1936番は一帯すべてが谷地形であると判断された。

より丘陵に近いと思しき1937番について、7月25日に同様の調査を実施し地下土壌の観察を行った。丘陵側にあたる敷地の南部を中心に土壌を観察した結果、北方向に下がる堆積が確認された。さらに、地表下70～90cmで確認した有機質を含む土壌が、90年代調査の1A区で確認されたⅢa層に類似すると判断されたため、1937番の南縁付近を発掘調査の対象地とした。

第4図　調査区の設定と旧地形

(2) 発掘調査

2019年8月17～24日の期間に発掘調査を実施した。予備調査の成果をもとに1937番の南縁付近に、座標北を軸として、3×3mの調査坑を設定した。これをT1とした。掘削はすべて人力で実施した。地表下70cmまで掘削したところで、幅約50cmの段を設け、さらに20cmほど掘り下げたところで、掘削対象を西半分に限定した。西半分をさらに50cmほど掘り下げたところで、掘削対象をさらに北半分に限定し、さらに20cm（地表下150cm）を掘削した。地表下150cm面の北東隅に50cm四方の小区画を設け、部分的に30cm（地表下180cmまで）を掘削し堆積状況を確認した。結果、以下のような層序が確認された。基本層序を観察・記録した後はふたたび人力で埋め戻し原状回復した。

基本層序

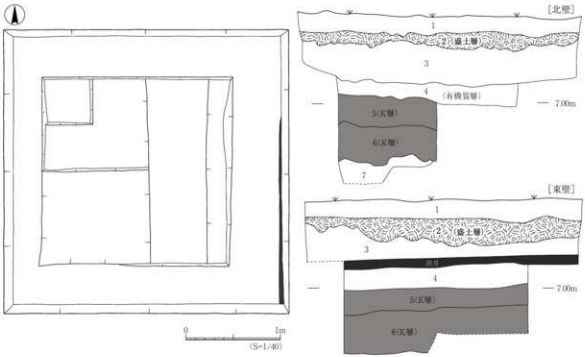
地表下180cmまでに次の7つの層を確認した。

第1層　耕作土（表土層）、厚さ20cm、上面の標高7.92m。（暗）褐色で締まりがあり、やや粘る。小礫（5～20mm大）、炭化物を含む。瓦礫を含む。

第2層　山土客土、厚さ12cm、上面の標高7.72m。橙色のチャート風化土層で締まりがあり、粘りは弱い。小礫（5～20mm大）、炭化物を含む。瓦礫を含む。水田の床土として現代に投入された。

第3層　緑灰色砂質土、厚さ37cm、上面の標高7.60m。緑灰色の砂質土層で締まりがあり、粘りは弱い。有機質がよく遺存する。炭化物を含む。

第4層　有機質層、厚さ16cm、上面の標高7.23m。灰黄褐色の泥土であり、緻密で柔らかく、粘りがある。



第5図　T1平面図・断面図

上面に縫状の繊維が集中する。木質もよく遺存する。ゴム製品など現代遺物を含む。

第5層　灰色強粘質土、厚さ33cm、上面の標高7.07m。灰色で露出後は上部が酸化して黄褐色に変色する。風化緑色岩(1cm大)を含む。少量の遺物(古墳時代、須恵器片)を含む。のちのK層にあたる。

第6層　黒褐色強粘質土、厚さ36cm、上面の標高6.74m。黒褐色で粘性が強い。風化緑色岩(5cm大)を多量に含む。古墳時代の遺物を含む。のちのK層にあたる。

第7層　有機質層、厚さ30cm異常。地表下150cmで確認し、180cmよりさらに下部につづく。上面の標高6.38m。木質の集中が著しい。

(3) 調査成果

今回の調査坑T1は全体に谷埋めの土層で埋没丘陵は確認できなかった。居徳遺跡1区からつづく埋没丘陵は想定より細く、北西の丘陵に連結したようである。今回の調査区は谷地形であり、砂質土や粘質土の堆積が確認された。地表下80cm以下には古墳時代の遺物(細片であるが中期の可能性がある)を含む包含層が厚く堆積しており、さらに下部には縄文～弥生時代の遺物包含層が依存する可能性が高い。既調査で確認された居徳遺跡の範囲が、居住地の可能性が高い北西側にさらに広がっていたことを確認できたのは調査の大きな成果である。

2. 居徳遺跡第2次(2020年度)調査

2019年度より居徳遺跡の全容解明を目指す調査に着手し、まず旧地形の把握を当面の課題とした。東日本系土器が多数出土した90年代調査の1区埋没丘陵の延長を発見すべく、検土杖を用いた予備調査と小規模な発掘調査を実施し、2019年度には北部山裾における谷地形の広がりを確認した。

2020年度には山裾と1区をつなぐ部分の埋没丘陵西縁部の把握を目的とし、所有者の協力を得て、高岡町居徳ヶ端1918番、1919番、1920番1・2を調査対象とした。

まず検土杖を用いた簡易ボーリング調査を8月3～6日の日程で実施し、層序の把握と発掘調査区の選定をおこなった。結果、地表下90～150cmで基盤土を確認し、また一部には遺物包含層の可能性がある黒色粘土層の堆積を認めた。

簡易ボーリング調査の成果をもとに、区画の北寄り部分に幅5m、長さ10mの北西－南東方向の調査坑を設定した。調査坑は2019年度のT1に続けてT2とした。T2に対する発掘調査は9月7～23日の日程で実施した。降雨の影響で調査は難航し予定の期間を延長することになったが、埋没丘陵の縁辺および縁辺を掘削し構築されたピット5基、遺物包含層の可能性がある黒色粘土層を発見した。出土遺物は僅少であり遺構や土層の時期比定は今後の課題であるが、自然地理的環境を把握する手がかりが得られた。

(1) 予備調査

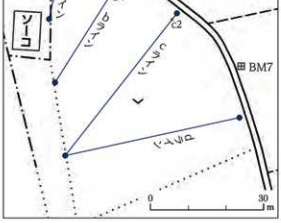
調査対象の土佐市高岡町字居徳ケ端1918・1919・1920番1・2は、清瀧寺が所在する丘陵から東南に派生する丘陵の西縁と想定された。丘陵の傾斜に該当する地形を把握するため、調査対象地内におよそ傾斜方向に沿った4本の測量ライン(北からa～d)を設定し、レベリングを実施した。

[aライン]　北杭(X:55817.064、Y=－7608.391)と南杭(X:55796.580、Y:－7608.391)間の21m(192度19分43秒)と両端の延長部分についてエレベーション図を作成した。北側の標高は7.82m、面する道路は標高8.15mである。南側がやや高く、10m付近から7.90m隣、土手状に盛られた南端が7.98mで最高所となる。南側は崖状に落ち込み、傾斜の下部は7.38mで、比高差は45cmである。

[bライン]　aラインの南東17.5mに北東－南西方向のbラインを設定した。北東杭(X:55807.697、Y=－7589.146)と南西杭(X:55779.828、Y:－7606.820)間の33m(212度22分56秒)と両端の延長部分についてエレベーション図を作成した。北東端は土手状に高く、標高7.94mである。全体の平均的な高さは7.88mで、南西側が7.82mとやや低い。南西端付近から傾斜し、36m箇所で標高7.12mとなる。平坦部との比高差は76cmである。北東側の道路は標高7.75～7.82mである。

[cライン]　bラインの南東17.5mに北東－南西方向のcラインを設定した。北東杭(X:55798.102、Y:－7574.572)と南西杭(X:55760.503、Y:－7604.122)間と両端の延長部分についてエレベーション図を作成した。地形には凹凸があり、北東と中央はおよそ7.84m、他は7.70mである。南西端は土塁状に盛られ、頂部の標高は8.00mとなる。急傾斜した南西側の低地部は石垣で区画されており、境界点となる52m箇所は標高6.98mとなる。北東端との比高差は86cmである。北東側の道路面は7.60m、さらに北東の水田面は7.32mで、水田側が調査地より約50cm低い。

[dライン]　cラインの南32mに東西に長いdラインを設定した。東杭(X:55770.545、Y:－7558.021)と西杭(X:55770.503、Y:－7604.122)間と東側の延長部分についてエレベーション図を作成した。土塁状の東端は標高7.82m、平坦部は7.75mである。西端は土塁状に高く、頂部は8.02mである。急傾斜した西の低地は石垣で区画されており、境界となる50.5位置は標高6.78mである。東側の道路中央は7.40m、水田面は6.90mで、水田面と東杭の比高差は92cmである。南側の水田面は標高6.80mである。

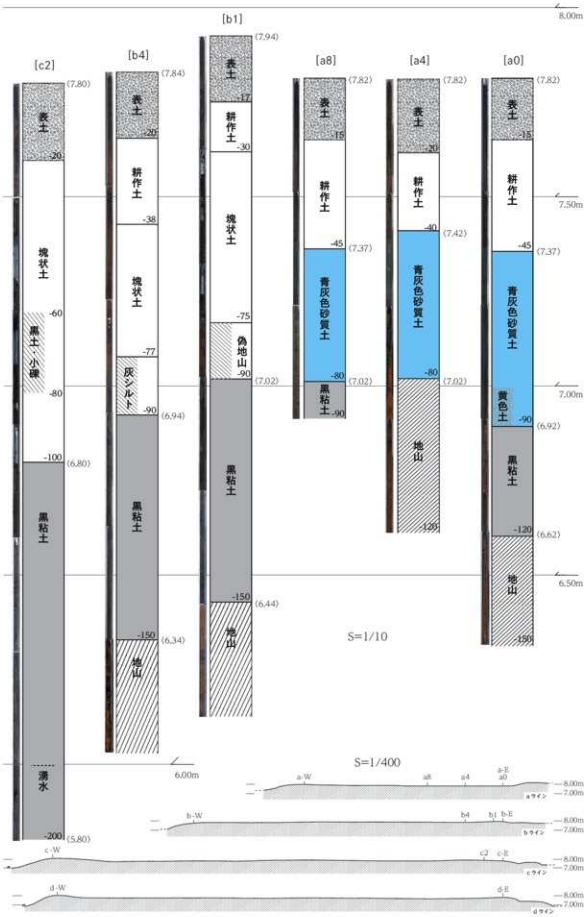


第6図　予備調査箇所

簡易ボーリング調査

aライン～cラインの道路よりの7箇所(a0、a4、a8、b1、b4、c2)について検土杖を用いた簡易ボーリング調査を実施した。

aラインの3箇所では、上部から順に、表土、耕作土、灰色水田土、黒色粘土、地山の堆積を確認した。3箇所のいずれにおいても、表土が厚さ15


8.00m
[c2]
[b4]
[b1]
[a8]
[a4]
[a0]
表土
耕作土
塊状土
黒土・小礫
灰シルト
偽地山
青灰色砂質土
黒粘土
黄色土
地山
清水
7.50m
7.00m
6.50m
6.00m
S=1/10
S=1/400
a-W
a8
a4
a-E
a0
aライン
b-W
b4
b1
b-E
bライン
c-W
c2
c-E
cライン
d-W
d-E
dライン

第7図　予備調査柱状図

～20cm、黒褐色耕作土が厚さ30cmで堆積し、地表下45cmより下部に厚さ40cm程度の青灰色砂質土層（水田）が堆積する。a0では水田土の下部、地表下90cm（標高6.9m付近）から黒色粘土層（*発掘調査で水田耕作土（第5層）と確認）が厚さ30cmで堆積し、地表下120cm（標高6.6m付近）で地山を確認した。a4では灰色水田土下部の地表下80cm（標高7.0m付近）で地山を確認した。a4はa0よりも確認した地山の高さが40cm高い。a8では探索を実施した90cm以下までに地山が検出されなかったため、地山の標高少なくとも標高7.0mよりも低い。

bライン・cラインでは、上から順に表土、耕作土、塊状土、黒色粘土層の堆積を確認した。探索したポイントのうち、b1・b4では地山を確認した。全体の堆積は、表土が厚さ約20cmで、耕作土を挟んで堆積する塊状土は30～80cmの厚さがあり、c2では砂利の混じる部分を確認した。地表下90～100cm（標高6.8～7.0m）から黒色粘土層（第5層）が堆積しており、b1・b4では粘土層下部の地表下150cm（標高6.3～6.4m）で地山を確認した。c2では地表下2mまでを探索したが地山は確認できず、地山の標高は少なくとも標高5.8m以下となる。

簡易ボーリング調査で確認した層序のうち、上部の表土・耕作土・塊状土・青灰色砂質土は、出土遺物による確認は出来なかったが、調査対象外の新しい時代の層と考えられた。簡易ボーリング調査においては、地山直上の黒色粘土層が既調査で確認した遺物包含層に該当すると予想した（発掘調査の結果、予備調査の黒色粘土層は時期の下る水田層で、斜面の下部で時期の古い黒色粘土層を確認した）。確認した地山は埋没丘陵の縁辺に該当する。a0とa4の地山上面の高低差は近距離で40cmの違いとなり不規則であるが、bラインで確認した地山はaラインより30～60cmほど低く、またc2では地表下200cmまで地山が検出されず、地形が北から南に下がる理解と適合する。

(2) 発掘調査の経過

簡易ボーリング調査の成果に基づき、埋没丘陵の延辺を探索するための調査坑T2を設定したT2は北東側の道路に沿う、幅5m、長さ10mの調査坑である。北西－南東軸の道路を長軸とし、道路から約4.5mの間をおいて、南東側の短辺をbラインに合わせ調査坑を設定した。T2の長軸方向は西に58度ふれる（記述の便宜上、以下T2を南北軸の調査坑と見立てて4壁を記述する）。

発掘調査は9月7～18日の予定で開始したが、天候不順の影響により延長を余儀なくされ、最終的には9月23日までの実働15日間で実施した。

簡易ボーリング調査で確認した、表土・耕作土・塊状土・青灰色砂質土・黒色粘土・地山の層序に基づき、黒色粘土層直上のおよそ地表下90cmまでを機械力で掘削し、黒色粘土層以下を人力で掘削する計画で発掘調査を開始した。

重機により表土・耕作土・水田耕作土を順次除去すると、地表下50cmで地山に類する堆積を確認した。想定より浅くまた違和感を感じたためさらに10cmほど掘り下げると、北寄り2～4m範囲では地山が露出し、南側の大部分では地山を利用した盛土の下部で灰色粘土層が露出した。盛土は南側の低所に盛土し水平な耕作面を作出したものと見られ、南北に高低差のある原地形が看取された。地形の変換点にあたる箇所には現代の水路が調査坑内を横断する様に延びており、西に6度ふれる水路の軸方向は想定している丘陵の形状とは食い違っており、谷状の微地形が考慮された。地山面と灰色粘土層の精査に入る前に降雨で調査坑が水没し、以降は排水が後手に回ったまま困難な作業がつづいた。

現代の水路と、上部で水路を切って直交方向に延びる浅い溝の平面図を作成した後、南側の地形が低まる部分に堆積する灰色粘土層の調査に移った。灰色粘土層は常時滞水状態にあり堆積状況の把握は困難であったが、壁際の数箇所を部分的に掘り下げたところ15～20cm下部で地山を確認することができた。低まった区域の大部分には地山上に15～20cm程度の灰色粘土層が堆積していると認識し掘削を進めた。掘削はおよそ北から南に向かって進めたが、東長壁沿いと南短壁付近が若干傾斜し

ており、一帯では灰色粘土層と地山の間に黒色粘土層の堆積を認めた。灰色粘土層では近現代の陶磁器が出土していたが、下部の黒色粘土層はこれまでに確認されてきた遺物包含層に類似するため、遺構・遺物の有無を慎重に確認しながら掘削を進めた。

黒色粘土層の中からは遺物が出土せず、調査坑内の黒色粘土層を除去した結果、下部の地山は南東隅の南北1.7m、東西3m範囲が擂鉢状にくぼんでいることを確認した。弧状の地形変換点から傾斜してすぐの部分に数基のピット状プランを確認した。精査した結果、傾斜変換点部分に3基、東壁、南壁にかかる箇所に1基ずつ計5基のピットを検出した。T2-P1～P5とし掘削を進めた。壁際の2基(T2-P1、T2-P2)は調査坑内のみを掘削し、残りの3基(T2-P3～P5)は半截ののち完掘した。ピットの覆土は水洗選別のためにすべて回収した。

掘削終了後は必要な写真、作図を終えたのち、埋め戻しをおこなった。埋め戻しに際しては、黒色粘土層を確認した南短壁沿いを別途砂で埋め、残りは排土により埋め戻し現地調査を終了した。

(3) 基本層序

T2では、上から順に表土層(第1層)、耕作土層(第2層)、水田層(第3層)、盛土層(第4層)、灰色粘土層(第5層)、黒色粘土層(第6層)が堆積していた。各層の内容は以下の通りである。

第1層　表土層である。黒褐色土層で、厚さ10～20cm、締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。

第2層　現代耕作土である。黒褐色土と灰黄褐色の混合土層で、厚さ10～30cm、締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。

第3層　水田耕作土層である。灰黄褐色土層で、厚さ20cm、締まり・粘性がある。マンガン粒を多く含む。

第4層　盛土層である。橙色土層で、やや鈍い色調の下部を区分することもできるが一連の堆積と考えられる。地山を起源とする盛土で、南側の低位部分に厚さ20cmで堆積する。軟質の第5層上を整地した盛土層であり、第4層の上面は北側の地山層上面に対応し、現代水路の構築面となる。

第5層　水田耕作土層である。灰色粘土層で、厚さ20cm、緻密で粘りが強い。マンガン粒を含む。南側の盛土層下部にのみ堆積する。染付が出土しており近世以降の土層と考えられる。

第6層　黒色粘土層である。緻密でグライ化し青灰色となった地山粒を含む。調査坑東南部の地山が擂鉢状にくぼむ箇所に堆積する。南壁では厚さ30cmにいたる。付近の地山上で検出したピット内には第6層と同様の土が堆積する。遺物の出土はなく時期は不詳であるが、既調査の堆積と対照すると古墳時代もしくは縄文時代の遺物包含層に対応すると考えられる(のちのK層に対応する)。

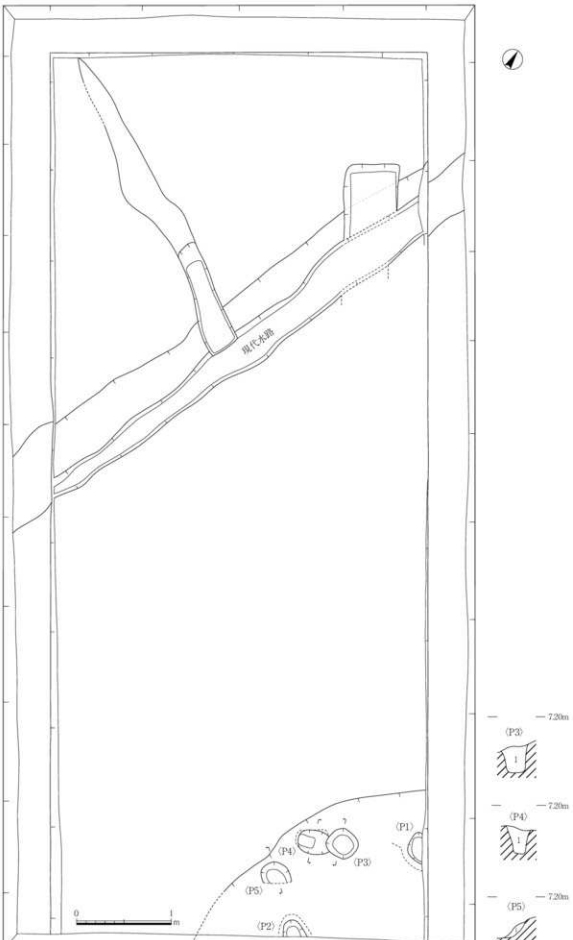
T2においては近現代相当の整地が地表下50cm以下の地山に及んでおり、包含層等はすでに削平されたとみられる。ただし、より低位の南側においては下部水田層(第5層)の下位に包含層相当の堆積がみられ、縄文時代・古墳時代の文化層が遺存すると期待される。

(4) 検出遺構

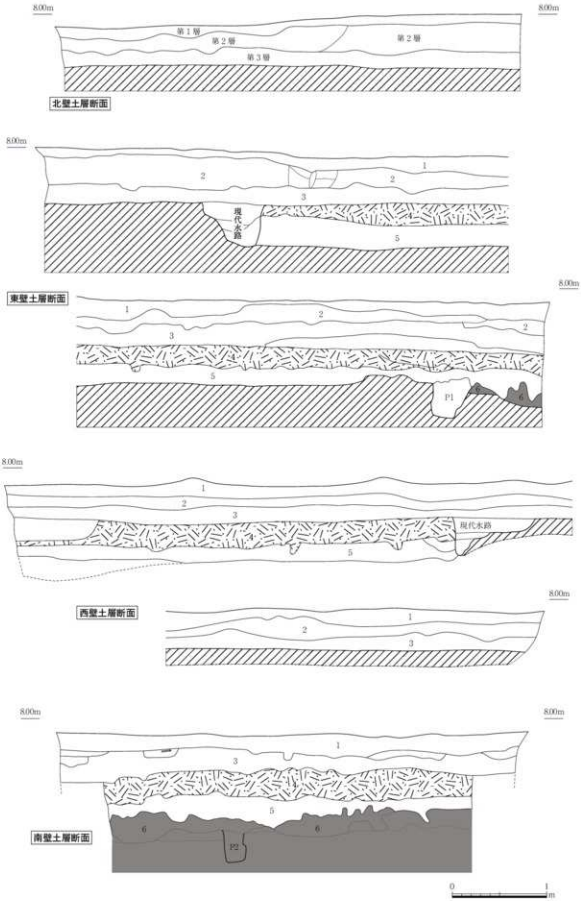
T2ではピット5基を検出した。5基のピットはいずれも、第6層(黒色粘土層)が堆積する、T2東南隅の窪地状傾斜部で確認した。地形の変換点に位置するもので、範囲は限定的だが各ピット間の距離は40～50cmで、密集傾向を窺わせる5基のピットはT2-P1、T2-P2…T2-P5と東・北から順に命名した。以下各ピットの内容を記す。

[T2-P1]

東長壁沿いに位置する。東壁断面で規模と形状を確認した。上部は第5層に覆われており、層境界の凹凸が耕作による上部の削平を示している。。掘方はおよそコップ形で、平坦な底面から外開きで上方に立ちあがる。壁には凹凸があり掘削は不規則で粗い。上部幅は40cm、深さ40cm、底部幅20cmである。調査区内の地山上で検出した34×16cm範囲の深さ20cm部分について覆土を掘削した。ピット周囲の地山は幅6cmで環状にグライ化していた。平面形状は隅丸方形に近く、軸方向はN70°Eである。



第8図　T2平面図


8.00m
8.00m
第1層
第2層
第2層
第3層
北壁土層断面
8.00m
1
2
2
3
現代水路
5
東壁土層断面
8.00m
1
2
2
3
5
P1
8.00m
1
2
2
現代水路
5
西壁土層断面
8.00m
1
2
3
8.00m
8.00m
1
3
5
6
6
P2
南壁土層断面
0
1
m

第9図　T2土層断面図

覆土は黒色粘土の単層で第6層と違いがなく、地山に掘削したピットの廃絶後に第6層によって埋没したと考えられる。地山掘削面の標高は7.0mである。遺物は出土しなかった。回収した覆土を水洗選別し2mm大の種実2点を収拾した。

［T2－P2］

南短壁沿いに位置する。南壁断面で規模と形状を確認した。上部には第6層が堆積し、ピット内にも同様の黒色粘土が堆積していた。P1と同様に地山に掘削したP2の廃絶後に第6層に覆われたと考えられる。地山掘削面の標高は6.8mである。掘方はおよそ筒形であるが、壁の掘削は粗く不規則で、西側下部はやや袋状を呈する。底は平坦である。上部幅は23cm、地山からの深さ34cm、底部幅18cmである。下位の袋状部分は幅22cm、上位幅は20cmである。調査区内の地山上で検出した24×18cm範囲の深さ22cm部分について覆土を掘削した。ピット周囲の地山は形状に沿った幅7cmがグライ化していた。平面形は楕円形ないし隅丸長方形とみられ、軸方向はほぼ東西である。遺物は出土しなかった。回収した覆土を水洗選別し1～3.5mm大の種実25点余りを収拾した。

［T2－P3］

P1の50cm西側、傾斜変換点のすぐ下方に位置する。西側に連接するP4の東縁辺を切る。検出面の標高は6.91mである。平面形は隅丸方形で、軸方向はN73°E、規模は30×30cm、深さ30cmである。底は平坦で壁はやや開き気味で上方に立ちあがる。壁には凹凸があり掘削は粗い。覆土は第6層と同様の黒色粘土の単層である。遺物は出土しなかった。回収した覆土を水洗選別し0.5～4.5mm大の種実40点を収拾した。

［T2－P4］

P3の西に連接し、P3に東縁を切られる。検出面の標高は6.98mである。平面形は楕円形で、軸方向はN42°E、規模は36×26cm、深さ30cmである。底は平坦で壁は外開きで立ちあがるが、20×12cmの底面は西側に偏る。南側と北側では下部が袋状に広がっている。壁には凹凸があり掘削は粗い。覆土は単層で第6層と同様の黒色粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。回収した覆土を水洗選別し0.5～4mm大の種実70点を収拾した。

［T2－P5］

P2とP4から30～40cmの間をおいた中間に位置する。検出面の標高は7.0mである。地山部分を掘りすぎたために南側を失っているが元の平面は楕円形とみられる。軸方向はN80°Eで、残存規模は34×28cm、深さは19cmである。底は平坦で壁は斜めに立ちあがる。壁には凹凸があり掘削は粗い。覆土は単層で第6層と同様の黒色粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。回収した覆土を水洗選別し0.5～1mm大の種実10点を収拾した。

(5) 出土遺物

出土遺物はきわめて少なく7点を収拾した。ほとんどが包含層中からでありピットからの出土はない。層別の内訳は、第1層から1点、第2層が1点、現代水路から1点、第4層から1点、第5層から3点である。種別では、土器2点、須恵器2点、染付3点である。いずれも細片であるが、土器と須恵器は古墳時代、染付は近現代の遺物とみられる。古墳時代の遺物は第1・2・5層にあり混入と考えられる。

(6) 調査成果と課題

今回の第2次調査では旧地形の把握を主要な目的としたが、T2において、およそ北から南に向かって傾斜する埋没丘陵を確認することができた。さらにT2の南縁では東南方向にくぼむ谷状の微地形をみとめ、遺物包含層の可能性が高い黒色粘土層の堆積を確認した。また傾斜部分では、時期不詳であるが密集分布するピット5基を検出した。

埋没丘陵はT2の南側、西側に向かってさらに傾斜し、該当箇所には遺物包含層が依存し、また貯

蔵穴等の遺構の存在が予想される。今後はさらに調査範囲を広げ、地形・包含層・遺構のひろがりを確認していく必要がある。

3. 居徳遺跡第3次(2021年度)調査

2020年度に実施した第2次調査において、北西丘陵と1990年代調査の1区をつなぐ埋没丘陵を確認した。埋没丘陵の展開と土地利用の有無・内容を確認するため、2021年度の第3次調査では、第2次調査のT2の南東部を拡張する位置にあらたな調査坑(T3)を設定し、発掘調査を実施した。発掘調査は2021年8月30日から9月12日にかけて実施した。第3次調査で設定したT3はT2の南短辺を長軸方向とする、幅3m、長さ5mの調査区であり、第2次調査で把握した層序にもとづき、重機・人力による掘削をおこなった。調査の結果、想定される主軸方向とは異なる向きに傾斜する埋没丘陵のひろがりが確認され、埋没丘陵が細かく開析され樹枝状に延びる可能性が考えられた。出土遺物には縄文時代および古墳時代の土器があった。縄文時代の包含層および遺構はさらに深部にあるものと考えられる。

(1) 調査の経過

2020年度に設定したBM7・BM8に基づき、トータルステーションを用いて、調査区北側の土塀隅に新たな基準点BM9を設定した。BM9の座標値は[X=55822.763m、Y=-7612.476m、Z=9.078m]である。BM9を利用して、まずT2の南隅2点(T2b・T2c)を復原し、T2南短辺をT3の長軸方向とした。長さ5mのT2南短辺の中間点をT3の北西隅として、長さ5m、幅3mの調査坑を設定した。T3の四隅は、T2南短辺中間点をT3aとして、右回りにT3b、T3c、T3dとした。座標値はT3a[X=55804.437、Y=-7591.279]、T3b[X=55802.873、Y=-7588.727]、T3c[X=55798.647、Y=-7591.387]、T3d[X=55800.207、Y=-7593.938]である。長軸は東32度ふれているが、便宜的に長壁を南北にみたて、北長壁、東短壁、南長壁、西短壁と区分し調査を進めた。

第2次調査(T2)で確認した層序に従い、まず重機で第4層(盛土層)上面にあたる地表下30cmまでを掘削し、ついで盛土層を除去し地表下60cmの第5層(近代水田層)上面を露出させた。露出面には東11度方向の盛土層帯状残存部と2本の丸太が現れたが、これらは地形の斜面方向(等高線)におよそ対応している。第5層上面以下は人力で掘削した。壁際に排水用の溝を設定しつつ、中央短軸方向に幅40cmのサブトレンチを設け堆積状況を確認した。サブトレンチでは北寄り部分で地山を確認し、南方向への傾斜を確認した。これにより北寄り部分で地山を露出させつつ第5層を除去していった。丸太は第5層にめり込む状況であり、第6層露出段階で記録をとったあと除去した。第5層を除去すると、北長壁沿いに地山が検出され、他はほぼ全面に第6層の黒色粘土層が露出する状況となった。南長壁際に排水溝を設けつつ黒色粘土層の掘削を進めたが、人員不足や湧水により掘削は捗らず、日程や天候を勘案して黒色粘土層の全掘削を断念し、埋没丘陵の傾斜を可能な限り検出することを優先した。

調査の結果、T3の6割程度の範囲について、第6層の黒色粘土層を除去して地山を露出させた。黒色粘土層を掘削する過程で平面では確認できなかった2基の土坑を確認した。検出した地山の形状は細かな起伏があるが、大きくは南北に長く東に傾斜して下がる地形であった。掘削深度は北側が地表下70～80cm、南側が地表下130～140cm、第6層の掘り残し区域は地表下110～120cmまでを掘削した。出土遺物は第5層・第6層を中心に、土器・須恵器・染付・陶器が約30点出土した。

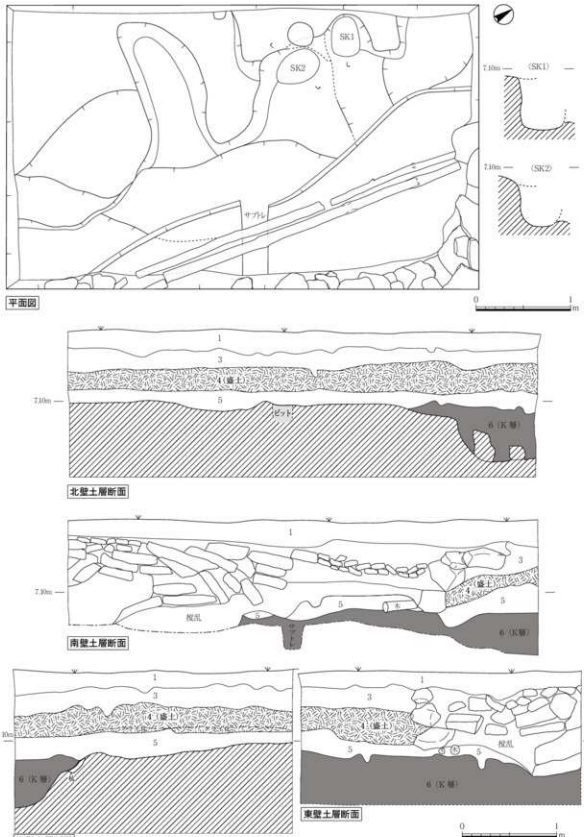
(2) 基本層序

T3の層序は、隣接するT2と同様である。上から順に表土層(第1層)、水田層(第3層)、盛土層(第4層)、灰色粘土層(第5層)、黒色粘土層(第6層)となる。各層の内容は第2次調査と同様である。

第1層　表土層である。黒褐色土層で、厚さ20～30cm、締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。

第2層　現代耕作土である。黒褐色土層で締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。北長壁で部分的に確認されるのみである。

第3層　水田耕作土層である。灰黄褐色土層で、厚さ20cm、締まり・粘性がある。マンガン粒を多く含む。



第10図　T3平面図・断面図

第4層　地山を起源とする盛土層である。北長壁から西短壁にかけては厚さ30cmで、地形が傾斜してさがる南側は厚さ40cmが堆積しており、盛土層が水平面をつくるための土木作業であったことを示す。東短壁の北寄り部分と、南長壁の西寄り部分で盛土層下部の傾斜が確認でき、地形が北東隅方向(東方位方向)に向かって傾斜すると分かる。

第5層　水田耕作土層である。厚さ20～30cmの灰色粘土層で南ほど厚い。緻密で粘りが強く、マンガン粒を含む。南側の盛土層下部にのみ堆積する。第3次調査でも能茶山焼の陶器が出土しており近世以降の土層と考えられる。埋没丘陵の縁辺に沿って打ち込まれた杭は第5層水田に関わる施設と考えられる。

第6層　黒色粘土層である。緻密でグライ化し青灰色となった地山粒を含む。地山直上の土層で、傾斜する南側では厚さ50cmに達する。少量の土師器、須恵器が出土しており、古墳時代の包含層と考えられる。T1(第1次調査)の第6層と同質で、付近一帯にひろがる土層(包含層)の可能性がある。

東短壁から南長壁にかけて大きく攪乱されていた。攪乱坑は表土直下の第3層を掘り込んで第5層上部に及び、第1層に覆われる。攪乱坑の底にあたる第5層には径6～8cmの2本の丸太が並べて敷かれていた。丸太は攪乱坑の縁辺を縁取る位置にあると考えられ、東短壁では丸太上部に20cm大の割石が規則的に3段積み上げられた様子が確認できる。丸太は胴木として石積みの基礎になったと考えられる。丸太は東に11度ふれた方向で設置されており、T2で発見された東6度の水路と主軸方向が類似する。

(3) 検出遺構

T3では土坑2基を発見した。いずれも北長壁付近の埋没丘陵傾斜部分に位置し、北側をSK1、南側をSK2とした。SK1とSK2の間の丘陵部に径24cm大のピットプランを確認した。掘削は行っていないがT2で発見したピットと同様の遺構と考えられる。遺物が伴わないため不詳であるが、T3の第6層は古墳時代の土器・須恵器をふくむ包含層であり、第6層を掘削し構築された2基の土坑もやはり古墳時代の遺構である可能性が高い。

[SK1]

SK1は滞水の影響で掘方が崩落し原形を留めないが、楕円形もしくは小判形の平面形で、残存規模は長さ45cm、幅45cmで、深さは約55cmとみられる。底は浅いボウル状に凹み、壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は第6層と区別されない。もとは丘陵縁辺の第6層を掘削し構築されたと考えられる。遺物は伴わない。

[SK2]

SK2は、SK1にほぼ接する南側に位置する。滞水の影響および掘削の過程で掘方の崩落が進行し、原形を留めていない。もとは平面楕円形とみられ、残存規模は長さ70cm、幅40cmで、深さは約50cmである。底は浅いボウル状に凹み、壁はやや外開きで上方に立ちあがる。覆土は第6層と区別されない。もとは丘陵縁辺の第6層を掘削し構築されたと考えられる。遺物は伴わない。

(4) 出土遺物

土器・須恵器・染付・陶器が30数点出土した。数点の陶磁器以外はすべて土器・須恵器である。第5層と第6層から出土したが、第5層には近世～近代の陶器・染付をふくみ、第6層からは土器・須恵器のみが出土した。土器・須恵器は特徴にとぼしく時期ははっきりしないが、既出土資料によれば古墳時代中期の可能性がある。第6層出土土器には繊維擦痕がのこる縄文土器1点が含まれており、深部に縄文時代の包含層があることを示唆する。

(5) 旧地形について

T3は長軸が東32度ふれる調査坑であるが、北西隅(T3a)と南東隅(T3c)を結ぶ対角線がほぼ南北方位となる。大きくみると、T3内で確認した埋没丘陵縁辺は、南北方位に長く東に傾斜して下がる。西短壁では40度の傾斜で南に下がっている。T3内には細かな起伏があり、SK2の付近が最も高く(「隆起部」とする)縁辺には段差が生じている。SK1のある北側では60度の傾斜をもって下がり、40㎝前後の比高差がある。隆起部の南側では北長壁際に湧水点があり、東方向に小谷が生じている。SK1・SK2が掘削された隆起部から真東方向にのびる、馬の背状の隆起部があり南北両側がなだらかに傾斜する。北方向の傾斜は隆起部縁辺部分で段差をもって落込んでいる。T2の東短壁際で検出した丘陵の縁辺は、弧をなしてT3の南北方位の丘陵縁辺に連結するが、T2でピットが集中した擂鉢状の落込みが、T3隆起部北側の落込みとつながって、ひとつの窪地を形成するようである。

(6) 調査成果と課題

第3次調査では、第2次調査で確認した埋没丘陵の想定外の延長と遺物包含層をひろがりの確認が目的であったが、調査の結果、埋没丘陵およその延長方向を把握することができ、また第6層(黒色粘土層)から古墳時代の土器・須恵器が出土したことにより、包含層の存在と時期を把握することができた。また1点ではあるが縄文土器も出土しており、既調査の成果とあわせてみると、深部に縄文時代の包含層が遺存する可能性が高まった。

今後も調査を継続して、居徳遺跡の範囲と当時の居住域・活動域を探索するが、そのためには地形の把握と深部の発掘調査が必要となる。今後はこれまでの調査成果を総括しつつ、まず年度内に簡易ボーリング調査を進めてT2・T3で把握した埋没丘陵のひろがりを確認し、把握できた地形について深部に到達する掘削方法を考案し次年度に発掘調査に取り組む。

4. 居徳遺跡第4次(2022年度)調査

高知道建設に伴う発掘調査(埋文調査)で確認された居徳遺跡について、遺跡の範囲や空間構成を探求すべく、2019年度から3次にわたる調査を実施してきた。これまでに埋文調査1区と清滝山を結ぶ埋没丘陵の存在を確認し、さらには細かな支脈が他方向に派生する微地形と遺物包含層の遺存を確認してきた。丘陵部は削平され遺構の遺存が期待できないことから谷部の利用状況を課題として調査を進めており、第4次調査においては、T2で発見した埋没丘陵主軸の西側境界、およびT3で発見した埋没丘陵支脈の延長を確認すべく、2つの調査坑(T4・T5)を設定した。

T4では支脈の延長が想定より長いことを確認し、また古墳時代包含層の上面に不整合面を発見し層上部における遺物の集中傾向を認めた。T5では埋没丘陵主軸の西側における傾斜変換点を確認し、丘陵縁辺部に当たる箇所では複数のピットプランを確認した。出土遺物は古墳時代の土器が中心であり、さらに深部での堆積が想定される縄文時代層の検出が今後の課題となる。

(1) 調査の経過

発掘調査に先立つ2022年5月19日に検土杖を用いた予備調査を実施した。T2・T3西側区域の複数箇所で簡易ボーリング調査を実施し、傾斜変換点の位置をおよそ把握した。予備調査の知見に基づき、T3の西3mの位置にT4を、T2の西5.5mの位置にT5をそれぞれ設定した。

発掘調査は8月17～30日の期間(実働12日間)に実施した。8月17日には基準点BM8・BM9によりトータルステーションを用いてT4(22㎡)・T5(6㎡)を設定した。8月18日より掘削を開始した。重機を用いて表土から既知の第5層(現代水田層)までを除去し、地山層および第6層(K層)上面を露出させた。調査坑壁面および露出面を整えたのち、T4・T5共に第6層の掘削を開始した。湧水に悩まされ、日々

の調査開始次・調査中は揚水ポンプを断続的に稼働させた。いずれの調査坑でも第6層を約60cm掘り下げたところで調査を終了した。T4では丘陵平坦部でピット状のプラン、傾斜部でピット状の窪みなどを認め、T5では傾斜変換点の上部側で複数のピットプランを検出した。ピットの掘削は実施しておらず時期は不明である。遺物はT4を中心に古墳時代の土器・須恵器が収納箱1箱分程度出土した。8月30日には台風の影響を鑑み、予定を前倒しして埋戻しを実施した。埋戻しは露出面を砂で覆ったのち重機を用いておこなった。

(2) T4の調査

T3の西端壁(調査区に沿う道路を便宜的に南北に見立てて(N58° W)方位を指示する)から西側に3m隔たった位置に、南北6m、東西5mで南西部の2×4m部分が隅入りとなるT4(22㎡)を設定した。南北方向で傾斜変換点から包含層へと続く傾斜を検出し、東西方向で埋没丘陵の支脈延長を確認することを目的に設定した。東北隅をaとして右回りにfまでを付した各隅の座標は、a[X=55796.566m、Y=-7593.776m]、b[X=55793.391m、Y=-7588.684m]、c[X=55790.852m、Y=-7590.265m]、d[X=55792.945m、Y=-7593.661m]、e[X=55791.257m、Y=-7594.715m]、f[X=55792.323m、Y=-7596.408m]となる。既調査の成果に基づき、表土から第5層までを重機で除去し、およそ地表下90～100cmで地山層および古墳時代の遺物包含層にあたるK層(従来の第6層)上面を検出した。傾斜変換点となる地山とK層の境界は南北軸のちょうど中間付近にあたり、同箇所には丸太が敷き置かれていた。丸太はT3で検出したものの延長部分であり、現代水田の境界施設であったと考えられる。丸太の軸方向はN12° Eであり、また地山部分で検出した等間隔の溝(水田の施設と考えられる)が直交方向(N78° W)に並んでいる。T5の地山面で確認した地質構造の軸線を示す層理も同方向であることから、調査区一帯の埋没丘陵はN78° Wを軸方向とする地形であったと考えられる。

南短壁沿いの60cm幅を重機で深掘りして排水溝とし、東長壁沿いを50cm幅を残した段掘りとし、丸太を上部の水留めとして維持しながらK層の掘削を進めた。K層は深いところで60cmまでの厚さを掘削した。出土遺物は古墳時代の土器・須恵器で相対的に上部からの出土が多く、最下部での出土は稀であった。当初は湧水の影響で識別できなかったが、段掘り部分の露出時間が長くなり乾燥が進むと、K層最上部に土壌化の形跡を認めることができ、出土遺物にも集中傾向が認められた。古墳時代のある時期にK層上面が地表面として露出し土壌化の作用を受け、不整合面が生じたものと判断された。これにともなって層序の整理が必要となり、従来の第6層をK層として、最上部の土壌化部分をKa層とした。またK層の上部は大規模な攪乱層がK層直上にまで及ぶが、東壁ではK層の上部に削平を免れて遺存した、新出の黒褐色～暗褐色土層を認めた。出土遺物がないため暫定的にK′層として整理した。

(3) T5の概要

T2西長壁から5.5mの間を置いた西側に東西に長い幅1m、長さ6mのT5(6㎡)を設定した。T2で発見した埋没丘陵主軸の西側縁辺を確認するために設定した調査坑である。東北隅をaとして右回りにdまでを付した四隅の座標は、a[X=55800.268m、Y=-7599.718m]、b[X=55799.726m、Y=-7598.842m]、c[X=55794.672m、Y=-7601.994m]、d[X=55795.163m、Y=-7602.820m]となる。T4と同様に重機を用いて表土から第5層までを除去し、およそ地表下60cmで地山層およびK層上面を検出した。東から4mの位置に傾斜変換点がありおよそ18度の傾斜で降っていく。層序は既知の通りであり、第1～5層の下部に露出したK層をおよそ深さ60cmまで掘削した。調査面積が狭いこともありT4のような土壌化の形跡は認められなかった。露出した地山面で5つのピットプランを確認した。上部平坦面に2基、傾斜面に3基である。上部の2基は30～40cm大で上面において柱痕跡と裏込め土を区別することができた。斜面の3基は20cm大である。いずれも未掘削で時期や形状は不明である。

地山部分ではN78°W方向で地質構造の軸方向をしめす層理が認められた。埋没丘陵の主軸方向を示すと考えられる。

(4) 基本層序

第1層～第5層の層序は第3次調査までの認識と変わりないが、第6層についてはT4の成果により整理が必要となり、従来の第6層をK層と名称変更し、上部の土壌化部分をKa層、K層上位に堆積する詳細不明の黒褐色～暗褐色土層をK'層とした。

第1層　表土層である。黒褐色土層で、締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。

第2層　現代耕作土である。黒褐色土層で締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。

第3層　水田耕作土層である。灰黄褐色土層で、締まり・粘性がある。マンガン粒を多く含む。

第4層　地山を起源とする橙色の盛土層である。

第5層　水田耕作土層である。緻密で粘りが強く、マンガン粒を含む。T4で傾斜変換点に置かれた丸太はK層上面で第5層にともなって構築されたと考えられる。

K層　従来の第6層にあたる黒色粘土層である。緻密でグライ化し青灰色となった地山粒を含む。地山直上の土層で、傾斜する南側では厚さ50cmに達する。

Ka層　K層上部が旧地表面として露出した時期に生成した土壌化層である。厚さ10cm程度である。地山粒がK層より小さく、炭化物を含む。部分的に遺物の集中箇所があり、遺構の存在が注意される。

K'層　K層の上位に堆積する黒褐色～暗褐色土層である。T4東壁の断面で確認した。厚さ20cmで黒褐色層である上層と暗褐色層である下層に区分することもできる。上層は相対的に締まり、乾燥した印象を受ける。下層は小さく細長い地山粒および炭化物を含む。

(4) 出土遺物

第4次調査では土器・須恵器・染付など108点の遺物を収拾した。土器が大部分を占める。T5には土器片1点があるのみで、他はいずれもT4でほとんどがK層出土で、Ka層への集中傾向が窺える。土器は甕が多く、高坏・鉢、壺がつづく。破片が多く時期の特定は困難であるが、古墳時代中期を中心にタタキ目が残る一部資料については古墳時代前期に遡上するとみられる。壺の底部とみられる円盤形・平底の資料は弥生時代のものとみられる。また複合口縁壺の口縁片も弥生時代末頃のものとみられる。須恵器のうち頸部に櫛描波状文が施文されたものは古墳時代中期と考えられる。縄文土器の出土はこれまでと同様認められず、構成の掘削が及ばない深部に堆積するものと予想される。

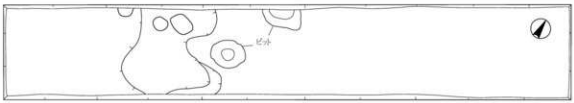
(5) 成果と課題

第4次調査により、調査区における埋没丘陵の様相をかなり具体的に把握することができた。調査方法次第では古墳時代の旧地表面を検出できることも明らかとなった。傾斜変換点付近で遺構が確認できることはさらに追認された。今後は支脈で区切られる西側の傾斜面を対象として、遺構の検出と部分的な掘削、K層上面の不整合面の検出、K層下部に想定される縄文時代層の検出が課題となる。

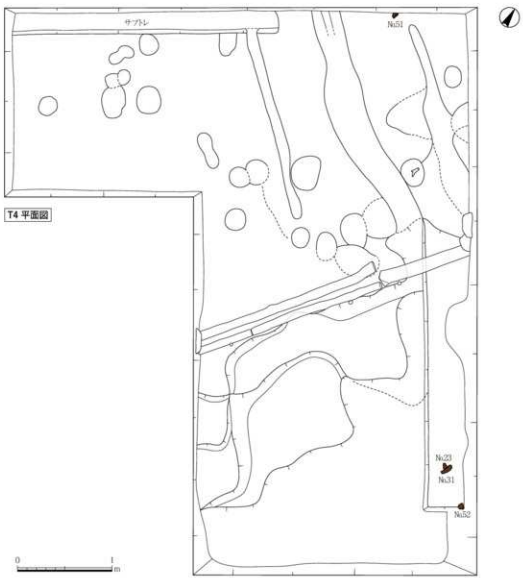
5. 居徳遺跡第5次(2023年度)調査

(1) 概要

居徳遺跡について、遺跡の範囲や空間構成を探求すべく、2019年度から4次にわたる調査を実施してきた。これまでの調査において、既調査の1区と清滝山を結ぶ地点の埋没丘陵には南西方向にのびる支脈を境に南斜面と西斜面があることを把握した。第5次となる2023年度調査では西側斜面において縄文時代の包含層を検出すべくT6を設定し調査を実施した。



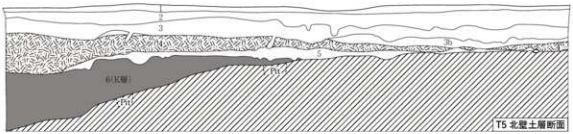
T5 平面図

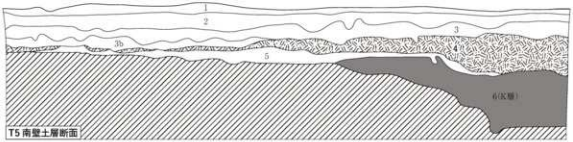


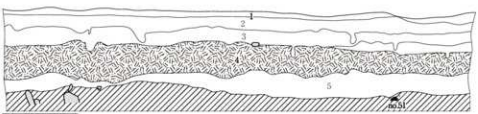
T4 平面図

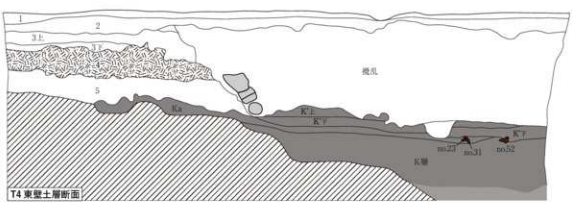
第11図　T4・T5平面図

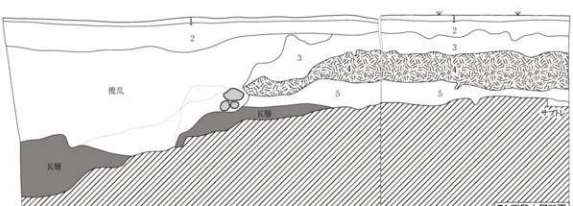
第4次調査のT4とT5の間に設定したT6ではK層とした古墳時代の包含層が良好に遺存しており、従来地下水に阻まれ調査の実施が困難であった層を厚さ80cmにわたって調査することができた。遺物包含層の上部では土壌化が認められ不整合面を確認することができた。遺構は発見されなかったが、包含層出土遺物のなかには弥生前期土器が含まれていた。弥生前期土器は遠賀川式の壺形土器が中心であり、細部の特徴によれば弥生前期前半に遡上しうる。縄文晩期系土器と弥生土器が共存した埋文調査1C区Ⅳ B層に相当する包含層の存在を示唆するものである。











第12図　T4・T5土層断面図

(2) T6 の調査

現地調査にやや先行して、2023年6月29日にT6を設定した。T6はT4・T5から各1.5mの間をおいた、幅3m、長さ6mの調査坑で、T5と同様に北東－南西方向(N32° E)を長軸とする(以下、説明の便宜によりT6の方位は北長壁、東短壁と記述する)。T6は埋没丘陵西斜面の包含層検出を意図した調査坑で、傾斜変換点が東短壁付近で検出できるようT5とは2mの重複部分を設けた。東北隅を基点にa～dとした四隅の座標は、a[X=55795.600、Y=－7599.115]、b[X=55794.011、Y=－7957.115]、c[X=55788.895、Y=－7600.248]、d[X=55790.470、Y=－7602.784]である。検土杖で中軸線上の0m、1.5m、3m地点を調査した結果、地山のレベルは0m地点では－70cm、1.5m地点では－90cm、3m地点では－130cmであった。黒色粘質土の検出とあわせてみると、東短壁付近では－70cm付近で地山が露出し、西に向かって傾斜する地形がつづき、およそ－90cmのレベルで黒色粘質土(K層)の上面が確認できるとの見通しをもった。

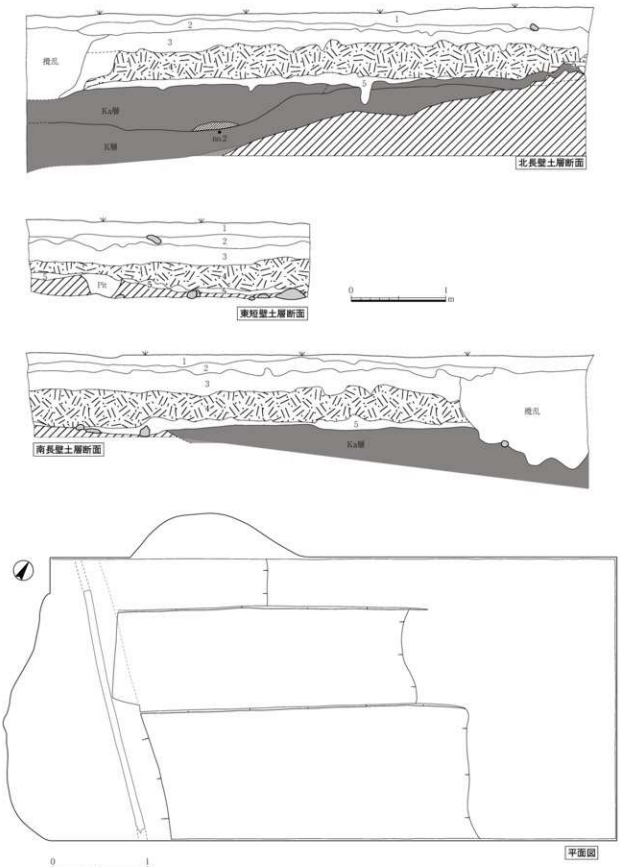
発掘調査は8月19～29日の期間(実働9日間)に実施した。期間を通じて天候が不安定で当初の予定を大幅に縮小する結果となった。8月19日に重機を用いて表土掘削をおこなった。当初の予定通り地表下80cm前後でグライ化した地山を検出した。東短壁際1m付近の地山は検出時から地下水が湧き、終始軟弱な状態であった。地山レベルを基準に既往の1～5層を除去すると、東短壁の西1.5m付近からにK層に準じる黒色粘質土(還元地山土含む)の広がりを確認した。露出したK層は西にいくほど従来とは違った調子となるため、北側半分をさらに10cmほど下げたところ、K層の上部に土壌化層であるKa層があると分かった。一部の掘削箇所を除き、Ka層上面を露出させ表土掘削を終えた。地山レベルにおいて地下水が湧出があったため、西短壁際に重機を用いて排水用の溝を掘削したが、周囲から大量の地下水が流れ込む状態となり調査は困難を極めた。排水溝を掘削する過程で横倒しに置かれた丸太を発見した。T3・T4で確認されたものと同様、現代水田に関連する施設と考えられる。T3・T4では地山の傾斜変換点に設置されていたが、T6ではKa層が地山につづく平坦面を形成した先を縁辺として掘削・設定されていた。T6では土壌化の深度が深く旧地表面がより安定した状態にあったことを伺わせ、南斜面とは土地の様相が異なっていたと考えられる。丸太の方向はN46° Wであり、T4・T5で確認した埋没丘陵の基本軸に沿っている。

表土除去後は断続的な降雨に苦慮しながら壁立て、掘削を進めた。露出したKa層およびK層については、北側半部についてKa層の掘削、北長壁際は幅50cmをサブトレンチとして深部掘削を進めた。最終的に北側半部は厚さ30～40cmのKa層を除去してK層を露出させ、サブトレンチではKa層・K層に対して深さ80cmまでを掘削した。

遺構については東短壁において、地山を掘込んで第5層に覆われる40cm大のピット状断面を確認したが面的には検出されなかった。

出土遺物はKa層、K層から一定数が出土した。酸化焔焼成の土器胴部片が多く文様など特徴を欠くため、さらなる検討が必要であるが多くは古墳時代の資料とみられる。須恵器を含まない点がこれまでの様相と異なる。特記事項に弥生時代前期の壺形土器片がある。北長壁においてK層からの出土を確認した(断面図に位置を記録)。丹塗磨研された頸胴部片で頸胴境界に沈線状の段が認められる。周囲のK層からも同一個体とみられる破片が出土した。また同類とみられる破片も数点ある。既往の調査を参照すると、埋文1C区ⅣB層に該当する時期の資料にあたる。古墳時代層への混入としてよいかは検討課題である。

荒天の予報により予定を前倒しして8月29日に現地調査を終了した。埋め戻しは天候の回復を待って9月1日に実施した(露出面には砂を敷いた)。



第13図　T6平面図・土層断面図

(3) 層序と地形

基本層序については第4次調査の認識と変わりない。ただしKa層についてはより詳細に観察することができた。内容は以下の通りである。

第1層　表土層である。黒褐色土層で、締まり・粘性がある。橙色の土粒を含む。厚さ10～15cmである。

第2層　現代耕作土である。黒褐色土層で締まり・粘性がある。橙色大粒の土粒を含む。厚さ10cmである。

第3層　水田耕作土層である。灰黄褐色土層で、締まり・粘性がある。マンガン粒を多く含む。厚さ10～20cmである。

第4層　地山を起源とする橙色の盛土層である。厚さ30～40cmである。

第5層　水田耕作土層である。緻密で粘りが強く、マンガン粒を含む。厚さ10cmである。

Ka層　K層上部が旧地表面として露出・乾燥した時期に生成した土壌化層と考えられる。厚さ10～40cmで西側ほど厚い。Ka層下面の一部に山土の集中箇所が認められた。鈍い褐色土でマンガンの集中が顕著である。酸化状態の地山粒をまばらに含む。炭化物が多く3cm大の塊状もある。

K層　緻密な黒色粘土層である。グライ化し青灰色となった地山粒を含む。地山直上の土層で厚さ50cm以上となる。

地山の傾斜をみると、西側には11度の傾斜でくだっている。また南北にも10～20cmの高低差があり、南斜面と西斜面が接する突出部分に向かって下降していることが分かる。

(4) 出土遺物

第5次調査では土器など53点が出土した。すべてK層・Ka層からの出土品である。弥生時代前期にあたる遠賀川式壺形土器の破片が一定数出土した。壺形土器は、素口縁が1点ある他は、頸部・胴部の破片であった。頸胴部境界に沈線状の段をもつものがあり、弥生前期のうちでも比較的早い時期と考えられる。甕形土器は1点のみが確認された。壺形土器の胎土には灰白色のものが含まれており、同時期の田村遺跡との関係が考慮される。調査では遺物包含層となるK層に上下の別を認めたが、多くは下層にあたるK層からの出土であり、上部のKa層からの出土は少ない。

(5) まとめ

第5次調査では、これまで地下水の影響で調査に困難を極めた、Ka層の検出およびK層の掘削をおこなうことができた。遺構は検出できなかったが、既調査とあわせてみると傾斜変換点付近では土坑・ピットの存在が認められるため、排水の問題が解決できれば面的な調査が可能でKa層上面でも遺構を検出できる可能性がある。また出土遺物には弥生前期土器があり、縄文土器は認められなかったが、埋文1C区Ⅳ B層に相当する縄文晩期系統と遠賀川系統が共存する時期の資料であり、本調査区域にも該期の活動域が及んでいた可能性がある。確認のためにはさらに深部の調査が必要となるが多くの困難をともなうものとなろう。

6. 出土遺物の総括

第1～5次調査において234点の遺物が出土した。このうち近代資料をのぞいた、弥生時代～古墳時代の土器・須恵器が約190点ある。大きく3つの時期からなり、弥生時代前期、弥生時代後期後葉～古墳時代前期(ヒビノキ2・3式)、古墳時代中期に区分される。本報告では64点を図示した。

弥生時代前期に比定した土器は大部分が壺形土器の破片(1～18)であり、甕形土器(19)も1点を確認した。口縁は1点のみがあり、№1は夜臼系の素口縁である。胴部片のうち№2と№3では頸胴部境界に段と沈線の中間的な施文が認められる。相対的に古く前期前半(第8段階)に遡上すると考えられ

る。胴部片には丹彩が多く認められる。弥生前期土器のうち甕としたのは1点のみである(№19)。壺には胎土が灰白色のものがあり特徴的である。搬入品の可能性が考慮される。

弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭のヒビノキ2式・3式は甕が中心である。小片が多く不確かであるがハケ調整の及ぶ範囲が限定的でヒビノキ3式により近いといえる。他に詳細不明の片口状の破片が2点(№31・32)ある。類例に乏しい器種であり、時期を限定しにくいが、器面の凹凸や調整・焼成によりヒビノキ式期と考えた。

古墳時代は中期が中心であり、埦・甕・壺・高坏などがあるが全形を窺えるものはない。高坏の脚部は内面に充填部の突出がない中空の形態(№50・52)で中期中葉を中心とする時期と考えられる。須恵器は甕ないし壺の破片が多いが、鼎とみられる破片(№55)があり外面に櫛描波状文が施文される。

7. 総括

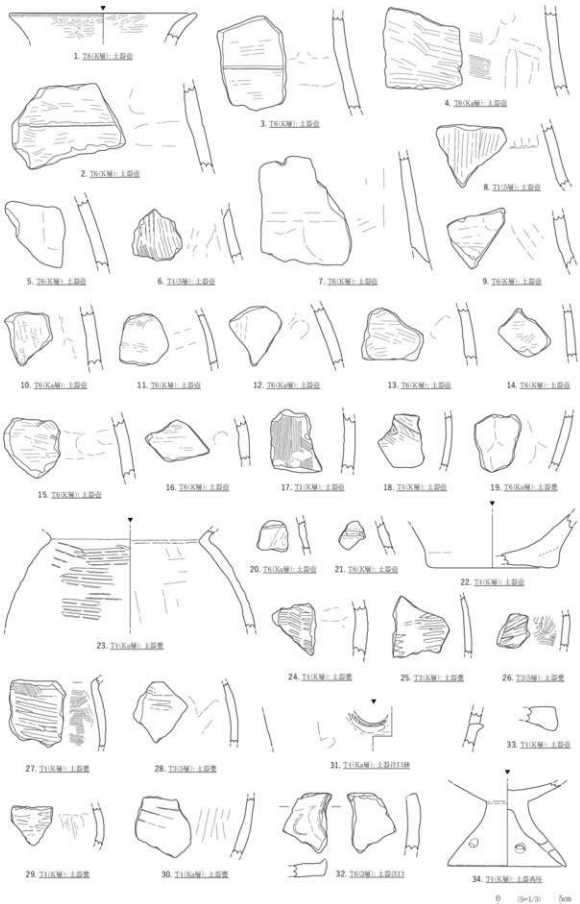
当初は縄文・弥生移行期の遺物が集中して出土した既調査の1区に対応する居住域の探索を意図したが、複雑に延びる埋没丘陵の位置を正確に把握することと包含層の検出へと目的をシフトさせた。目的の変更には丘陵上面の削平が推測されることや他区域の調査にかかる交渉が難航したことなども背景にある。第1次から第5次にかけての調査により、丘陵1の北側延長となる埋没丘陵の付け根には擂鉢状にくぼむ既調査の4区にも似た深い谷があること(第3図)、丘陵1につながる埋没丘陵はおよそ道路の東縁辺に沿うように延びると考えられるが(第3図)、樹枝状に分岐する部分があり小さな谷が生じていること(第4図)などを確認した。T1付近の谷は深さ2mを遠かに越えると予想され、T3・T4の斜面部、T5・T6の斜面は分厚い瓦礫層と湧水によって掘削が困難であるなど、調査範囲は限定的なものとなった。T2～T6では埋没丘陵の斜面から底部にかけて黒色粘質土層のK層を確認し、古墳時代を中心とする包含層であることを確認した。T2・T3・T5では古墳時代と考えられるピットを検出しており、何らかの土地利用にかかる痕跡が認められた。T4・T6ではK層上面において、旧地表面に該当する不整合面を検出し、土器が集中的に出土する箇所も認められた。今後、調査の条件が整えばヒビノキ式期や古墳時代中期の遺構を検出することも可能であろう。調査の主目的であった縄文・弥生移行期については、掘削深度が十分でなかったため明確な包含層を検出するに至らなかった。ただしT6を中心に弥生時代前期・遠賀川式とみられる壺形土器の破片が一定数出土しており、既調査の1区層序と同様に、縄文・弥生移行期層の上端の一部が検出されたのではないかと考えられる。調査範囲をさらに拡げ、深く掘削できれば既調査1F区のように低地型貯蔵穴が検出される可能性がある。出土した遠賀川式の壺は、頸胴境界が段と沈線の中間のような様相で、異系統土器が多くもたられた第8段階(成果論文①②)に遡上すると考えられる。田村遺跡との関係を示唆する資料はこれまでにも発見されているが、このたびの調査においても白色胎土の土器は田村遺跡との関係が考慮されるものである。居徳遺跡の本体である縄文系統の同時期資料を発見することができれば、居徳遺跡をめぐる様々な歴史的状況が一層明らかとなるであろう。しかし肝心の居住域は依然として手掛かりが乏しい。丘陵1側では現在の住宅地が候補となるであろうが調査は困難である。丘陵2では道路際の平坦部に可能性を感じるが、付近一帯は低地部の埋め立てに丘陵の土を切り崩したようであり、広い範囲に削平が及んだものとみられる。居徳遺跡は包含層の深度も深く、偶然の発見がなかなか期待できないため、高知県の歴史を知るための重要遺跡として今後さらなる組織的な調査を期すべき遺跡である。

表1-1　出土遺物観察表

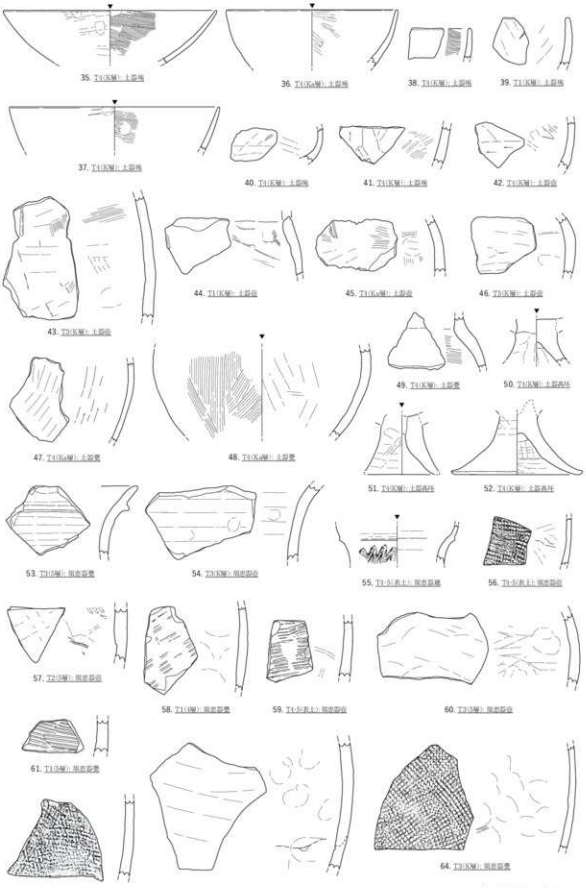
No.	出土位置	素材区分 器種:部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬　②素材　③装飾　④造形　⑤使用痕　⑥その他	産地 時期
1	T6 K層	弥生土器 壺:口縁	21*	14.8▼	—	①純黄褐色, ②石英, ｼｬﾓｯﾄ, 雲母, ④外ミガキ, 内ミガキ.	搬入ヵ 弥生前期
2	T6 K層	弥生土器 壺:頸胴	6.8*	—	—	①灰白色, 外丹彩, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ③頸胴界に施ミガキ段, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
3	T6 K層	弥生土器 壺:頸胴	7.5*	—	—	①灰白色, 外丹彩, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, 石英微, 黒輝石, ③頸胴界に施沈線, ④外ミガキ, 内ナデ.	搬入 弥生前期
4	T6 Ka層	弥生土器 壺:頸	6.4*	—	—	①内は灰白色, 外丹彩, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ミガキ, 内ハケ・ナデ, ⑥外に黒斑.	在地 弥生前期
5	T6 K層	弥生土器 壺:胴	5.3*	—	—	①灰白色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, 石英, 黒雲母, ④外精ナデ, 内ナデ.	在地, 田村ヵ 弥生前期
6	T4 5層	弥生土器 壺:頸	4.1*	—	—	①褐灰色, ②ｻﾅｰﾄ粒, ④外ハケ, 内ナデ, 擬口縁.	在地 弥生前期
7	T6 K層	弥生土器 壺:頸	8.5*	—	—	①浅黄橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ハケ後ナデ, 内ハケ後ナデ, 下縁逆擬口縁, ⑤焼成後穿孔.	在地 弥生前期
8	T1 5層	弥生土器 壺:頸	5.0*	—	—	①純黄褐色, ②ｻﾅｰﾄ, 石英 ④外ハケ, 内ナデ.	在地 弥生前期
9	T6 K層	弥生土器 壺:頸	5.0*	—	—	①灰黄褐色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ナデ, 内ナデ.	在地 弥生前期
10	T6 Ka層	弥生土器 壺:頸	4.1*	—	—	①純褐色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
11	T6 K層	弥生土器 壺:胴	4.1*	—	—	①灰黄褐色, ②ｻﾅｰﾄ, ④外ミガキ・板ナデ, 内ナデ, 薄手.	在地 弥生前期
12	T6 Ka層	弥生土器 壺:胴	4.7*	—	—	①純褐色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
13	T6 K層	弥生土器 壺:胴	4.2*	—	—	①灰白色, 外丹彩, ②石英, ｻﾅｰﾄ, 黒輝石, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
14	T6 K層	弥生土器 壺:胴	3.8*	—	—	①純橙色, ②ｻﾅｰﾄ, 雲母, ③外丹彩, ④外ミガキ, 内ナデ, ⑤外斑状ススス.	在地 弥生前期
15	T6 K層	弥生土器 壺:胴	4.8*	—	—	①灰白色, 外丹彩, ②石英, ｻﾅｰﾄ, 黒輝石, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
16	T6 K層	弥生土器 壺:胴	3.3*	—	—	①灰白色, 外丹彩, ②ｻﾅｰﾄ, 石英, 黒雲母, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ミガキ, 内ナデ.	在地 弥生前期
17	T1 K層	弥生土器 壺:胴	5.0*	—	—	①暗褐色, ②ｻﾅｰﾄ粒, ④外ハケ, 内ナデ.	在地 弥生前期
18	T4 K層	弥生土器 壺:胴	4.2*	—	—	①褐灰色, ②ｻﾅｰﾄ, ③施沈線文, ④外ハケ, 内ナデ, ⑤外ススス.	在地 弥生時代
19	T6 Ka層	弥生土器 甕:胴	4.5*	—	—	①純黄橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ナデ, 内ナデ.	在地 弥生前期ヵ
20	T6 Ka層	土器 壺ヵ:胴	2.5*	—	—	①純橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ③外施沈線, ④外ハケヵ, 内ナデ.	在地 弥生時代ヵ
21	T6 K層	土器 壺ヵ:胴	2.8*	—	—	①純橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外ナデ, 内ナデ.	在地 弥生時代
22	T4 K層	弥生土器 壺:底部	4.2*	—	10.5▼	①褐灰色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④内外ナデ	在地 弥生前期
23	T4 Ka層	土器 甕:頸胴	7.7*	20+▼	—	①内は灰褐色, ②ｻﾅｰﾄ粒, ④外タタキ, 内ナデ, 厚手, ⑤外ススス濃い, 内コゲ斑.	在地 ヒビノキ3式
24	T4 K層	土器 甕:胴	4.1*	—	—	①純黄橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ④外タタキ, 内ナデ, ⑤外ススス.	在地 ヒビノキ式
25	T3 K層	土器 甕:胴	4.9*	—	—	①褐灰色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外タタキ, 内ナデ, ⑤外ススス.	在地 ヒビノキ式
26	T3 K層	土器 甕:胴	2.2*	—	—	①純橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ④外タタキ, 内ハケ上板ナデ.	在地 ヒビノキ式
27	T4 K層	土器 甕:胴	5.4*	17.1▼	—	①内は明褐灰色, ②ｻﾅｰﾄ粒, ④外タタキ, ハケ, 内板ナデ後ナデ, ⑤外ススス濃い.	在地 ヒビノキ3式
28	T3 5層	土器 甕:胴	4.8*	—	—	①純橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④外タタキ, 内ナデ.	在地 ヒビノキ式
29	T4 K層	土器 甕:胴	3.1*	—	—	①灰褐色, ②ｻﾅｰﾄ粒, ④外タタキ後ナデ, 内板ナデ.	在地 ヒビノキ式
30	T4 Ka層	土器 甕:胴	4.8*	—	—	①黒色, ②ｻﾅｰﾄ, 金雲母, ④外タタキ, 内板ナデ, ⑤外ススス濃い.	在地 ヒビノキ式
31	T4 Ka層	土器 注口鉢ヵ:胴	2.5*	—	—	①橙色, ②ｻﾅｰﾄ, ｼｬﾓｯﾄ, ④注ぎ口が付く, 外は面をなす, 外精ナデ, 内精ナデ.	在地 弥生-古墳時代
32	T6 3層	土器 注口ヵ:口縁	4.6*	—	—	①橙色, ②黒輝石, ｻﾅｰﾄ微, ④注口側縁遺存, 外ナデ, 内ナデ.	在地ヵ 弥生-古墳時代

表1-2　出土遺物観察表

No.	出土位置	素材区分 器種・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬　②素材　③装飾　④造形　⑤使用痕　④その他	産地 時期
33	T4 K層	土器 壺：口縁	2.0′	—	—	①鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，ｼﾔﾓﾄｶｶ，⑥口縁端部．	在地 ヒビノキ3式ヵ
34	T4 K層	土器 高坏：脚部	6.5″	—	9.5▼	①橙色，②砂岩粗粒，④精ナデ，焼前円孔3方向ヵ．	在地ヵ 弥生末
35	T4 K層	土器 埦：口胴	4.1″	17.0▼	—	①鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④外精ナデ稍荒れ，内板ナデ．	在地 古墳時代
36	T4 Ka層	土器 埦：口胴	4.5″	13.6▼	—	①橙色，②ｻﾅｰﾄ，④外ミガキ，内ミガキ．	在地 古墳時代
37	T4 K層	土器 埦：口縁	3.3″	16.7▼	—	①鈍橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，石英粒，④外ナデ，内板ナデ後ナデ，薄手精巧，⑥圧痕ヵ．	在地 古墳時代
38	T4 K層	土器 埦ヵ：口縁	2.4″	—	—	①灰色，内鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④外ナデ，内細ハケ，薄手精巧．	在地 古墳時代
39	T1 K層	土器 埦：口縁	3.7″	—	—	①鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ，ｼﾔﾓﾄ，④外ナデ，内ナデ．	在地 古墳時代
40	T4 K層	土器 埦：胴	2.6″	—	—	①灰白色，②ｻﾅｰﾄ粒，砂岩粒ヵ，④内外精ナデ．	在地 古墳時代
41	T4 K層	土器 埦ヵ：胴	3.1″	—	—	①鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ，④外ケズリ・ナデ，内ハケ後ナデ・ミガキ．	在地 古墳時代
42	T4 K層	土器 壺ヵ：胴	3.6″	—	—	①鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④外上ナデドケズリ後ナデ，内板ナデ後ナデ．	在地 古墳時代ヵ
43	T3 K層	土器 壺：胴	9.7″	—	—	①浅黄橙色，②ｻﾅｰﾄ，ｼﾔﾓﾄ，④外板ナデ後ナデ，内板ナデ・ナデ．	在地 古墳時代
44	T1 K層	土器 壺：胴	4.4″	—	—	①内は鈍黄橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④内ヘラナデ，掘口縁，⑤外スス．	在地 古墳時代
45	T4 Ka層	土器 壺：胴	4.1″	17.3▼	—	①明褐灰色，②ｻﾅｰﾄ粒，石英粒，長石粒，ｼﾔﾓﾄ，④外ナデ後ハケ，部分ヘラ痕，内板ナデ後オサエ．	搬入 古墳時代
46	T5 K層	土器 壺：胴	4.4″	24.0▼	—	①褐灰色，②透明火山ｶﾞﾗｽ多，ｼﾔﾓﾄ，火成岩粒，④板ナデ後ナデ．	搬入 古墳時代
47	T4 Ka層	土器 甕：胴	6.7″	—	—	①灰黄褐色，②ｻﾅｰﾄ，④外板ナデ，内ケズリ後板ナデ，薄手，⑤外スス．	在地 古墳時代
48	T4 Ka層	土器 甕：胴	6.8″	17.3▼	—	①鈍橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④外細ハケ，内板ナデ，⑤内にコゲ．	在地 ヒビノキ2式
49	T4 K層	土器 甕：口縁	4.5″	—	—	①橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④外ナデ，内ハケ，厚手粗質．	在地 古墳時代
50	T4 K層	土器 高坏：脚部	3.4″	—	—	①鈍橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④内外ナデ，脚内奥搗き押え，⑥坏底遺存．	在地 古墳時代
51	T4 K層	土器 高坏：脚部	4.7″	—	6.1▼	①橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，④内外ナデ．	在地 古墳中期
52	T4 K層	土器 高坏：脚部	5.9′	—	10.5	①橙色，②ｻﾅｰﾄ粒，③火襷状④外ナデ，内絞り後板ナデ，下半ナデ．	在地 古墳中期
53	T3 5層	須恵器 甕：口縁	5.3′	—	—	①青灰色，②火山ｶﾞﾗｽ微，③外口に素凸帯，④外回転ナデ．	搬入 古墳中期
54	T3 K層	須恵器 広口壺：頸	5.8″	—	—	①灰色，②石英粒，長石粒，④内外回転ナデ，部分オサエ．	搬入 古墳時代
55	T4·5 表土	須恵器 蓋ヵ：頸	3.0′	—	—	①明灰色，②長石，雲母微，③外：櫛描波状文．	搬入 古墳時代
56	T4·5 表土	須恵器 壺ヵ：胴	3.7″	—	—	①明灰色，②長石，ｻﾅｰﾄ，④外格子目タタキ，内当て具後ミガキ．	搬入 古墳時代
57	T2 5層	須恵器 壺ヵ：胴	4.5″	—	—	①灰色，②ｼﾔﾓﾄ，石英微，④外ナデ，内当具痕ヵ．	搬入 古墳時代
58	T1 4層	須恵器 甕ヵ：胴	7.0′	—	—	①灰白色，②黒粒，④外タタキ→擦滅，内ナデ．	搬入 古墳時代
59	T4·5 表土	須恵器 壺ヵ：胴	4.9′	—	—	①明灰色，②長石，石英，④外平行タタキ，内ナデ．	搬入 古墳時代
60	T3 5層	須恵器 壺ヵ：胴	5.7″	—	—	①橙灰黄色，②ｼﾔﾓﾄ微，④外タタキ後ナデ，内オサエ後ナデ．	搬入 古墳時代
61	T1 5層	須恵器 甕ヵ：胴	2.6″	—	—	①灰白色，②長石，石英，④外平行タタキ，内荒れ．	搬入 古墳時代
62	T2 2層	須恵器 甕：胴	6.5″	—	—	①青灰色，②長石，黒粒，④外格子目タタキ，内格子目タタキ，部分ハケ．	搬入 古墳時代
63	T3 5層	須恵器 甕：胴	10.2″	—	—	①灰色，②長石，石英，ｻﾅｰﾄ，④外ナデ，内ナデ，オサエ．	搬入 古墳時代
64	T3 K層	須恵器 甕：胴	8.2″	—	—	①青灰色，②長石，石英，④外格子目タタキ，内オサエ．	搬入 古墳時代



第14図　居徳遺跡出土遺物（弥生時代前期～古墳時代前期）



第15図　居徳遺跡出土遺物（古墳時代）

第16図　居徳遺跡出土遺物(弥生時代前期～古墳時代前期)

第17図　居徳遺跡出土遺物(古墳時代)

写真1　予備調査作業風景

写真2　予備調査作業風景

写真3　予備調査作業風景

写真4　予備調査作業風景

写真5　予備調査検出土壌

写真6　予備調査検出土壌

写真7　発掘調査作業前風景

写真8　作業風景

写真9　調査坑設置前状況

写真10　T1設置状況

写真11　T1完掘状況

写真12　T1北壁土層堆積状況

写真13　作業風景

写真14　作業風景

写真15　作業風景

写真16　作業風景

写真17　作業風景

写真18　作業風景

写真19　調査区遠景（南東から）

写真20　調査区上空写真（北西から）

写真21　調査前状況（北から）

写真22　予備調査風景

写真23　予備調査風景

写真24　予備調査aライン（北から）

写真25　予備調査bライン（北東から）

写真26　予備調査cライン（北東から）

写真27　予備調査dライン（東から）

写真28　検土杖調査風景

写真29　検土杖調査風景

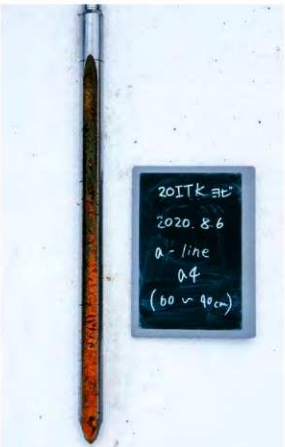


写真30　検土杖検出土壌

写真31　調査前状況（南東から）

写真32　T2設置状況（北西から）

写真33　表土掘削状況（北西から）

写真34　表土・耕作土除去状況（南西から）

写真35　調査区状況(9月10日)

写真36　調査区状況(9月12日)

写真37　調査区状況(9月13日)

写真38　調査区状況(9月16日)

写真39　調査区状況(9月17日)

写真40　調査区状況(9月18日)

写真41　調査区状況(9月21日)

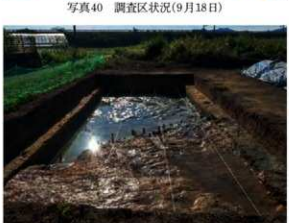


写真42　調査区状況(9月22日)

写真43　現代水路検出状況（南西から）

写真44　現代水路完掘状況（南西から）

写真45　現代水路東端部土層断面（西から）

写真46　現代水路西端部土層断面（東から）

写真47　清掃作業

写真48　清掃作業

写真49　T2完掘状況（何西から）

写真50　T2完掘状況（北西から）

写真51　T2完掘状況（北から）

写真52　T2北壁土層断面（南東から）

写真53　T2西壁土層断面（北東から）

写真54　T2東壁土層断面（南西から）

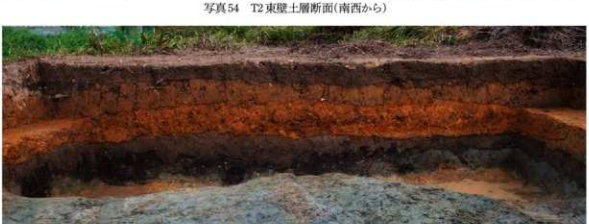


写真55　T2南壁土層断面（北西から）

写真56　ピット群検出状況（北西から）

写真57　ピット群検出状況（南東から）

写真58　T2-P1検出状況（南西から）

写真59　T2-P1土層断面（南西から）

写真60　T2-P1半截状況（南西から）

写真61　T2-P2検出検出状況（北西から）

写真62　T2-P2土層断面（北西から）

写真63　T2-P2完掘状況（北西から）

写真64　T2-P3・T2-P4検出状況（南東から）

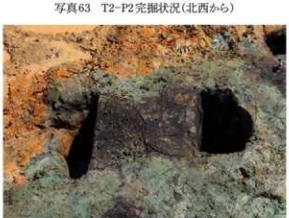


写真65　T2-P3・T2-P4半截状況（北西から）

写真66　T2-P3土層断面（北東から）

写真67　T2-P4土層断面（南西から）

写真68　T2-P3完掘状況（北東から）

写真69　T2-P4完掘状況（北東から）

写真70　T2-P3・T2-P4完掘状況（南東から）

写真71　T2-P5検出状況（南東から）

写真72　T2-P5土層断面（北東から）

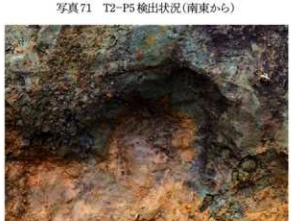


写真73　T2-P5完掘状況（南東から）

写真74　調査風景

写真75　調査風景

写真76　調査風景

写真77　調査風景

写真78　調査風景

写真79　調査風景

写真80　埋め戻し状況（北から）

写真81　埋め戻し完了状況（北から）

写真82　調査前風景（北から）

写真83　除草実施状況（北から）

写真84　調査風景

写真85　T3設置状況（西から）

写真86　T3設置状況（北から）

写真87　重機掘削状況（北から）

写真88　重機掘削状況（北から）

写真89　調査風景

写真90　4層除去状況（南から）

写真91　調査風景

写真92　5層掘削過程（北から）

写真93　調査風景

写真94　6層露出状況

写真95　完掘状況遠景（上が北）

写真96　完掘状況（上が北）

写真97　完掘状況（南西から）

写真98　北壁土層断面（南から）

写真99　南壁土層断面（北から）

写真100　東壁土層断面（西から）

写真101　西壁土層断面（東から）

写真102　完掘状況（南から）

写真103　SK1（右）、SK2（左）（南東から）

写真104　SK1（北から）

写真105　SK2（北から）

写真106　調査風景

写真107　調査風景

写真108　BM9設置状況（南から）

写真109　調査風景

写真110　調査風景

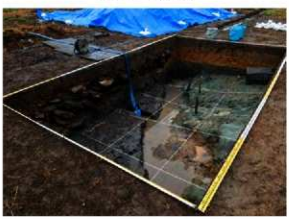


写真111　調査風景

写真112　調査風景

写真113　調査風景

写真114　出土遺物一覧

写真115　埋め戻し状況

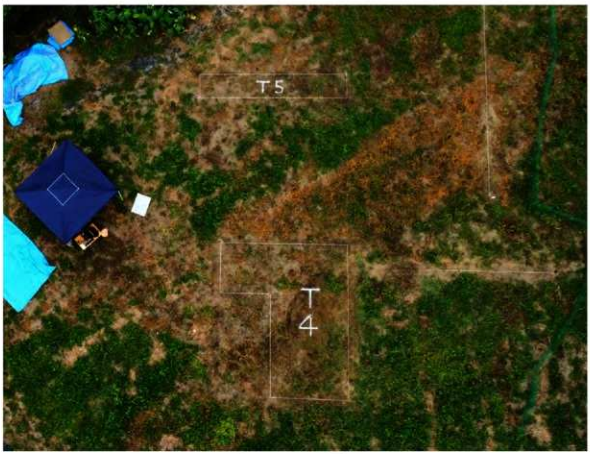


写真116　T4・T5設置状況

写真117　T4・T5完掘状況遠景

写真118　T5完掘状況

写真119　T4完掘状況

写真120　調査前状況

写真121　調査坑設置作業

写真122　T4調査坑設置作業

写真123　T5表土掘削状況

写真124　T4表土掘削状況

写真125　T4表土掘削状況

写真126　T4作業風景

写真127　T4作業風景

写真128　T5完掘状況

写真129　T5南壁土層断面

写真130　T5北壁土層断面

写真131　T5東壁土層断面

写真132　T5西壁土層断面

写真133　T5南壁土層断面

写真134　T5北壁土層断面

写真135　T5ピット検出状況

写真136　T4完掘状況（北東から）

写真137　T4北壁土層断面

写真138　T4西壁土層断面

写真139　T4東壁土層断面

写真140　T4東壁土層断面

写真141　T4南壁土層断面

写真142　T4丸太検出状況

写真143　T4傾斜変換点状況

写真144　T4完掘状況

写真145　T4土器(№50)出土状況

写真146　T4土器(№23・32・48)出土状況

写真147　T4排水作業

写真148　T4排水作業

写真149　T5掘削作業

写真150　T5掘削作業

写真151　T4掘削作業

写真152　T4掘削作業

写真153　T4掘削作業

写真154　T4撮影準備

写真155　T5作図作業

写真156　T5作図作業

写真157　T4作図作業

写真158　T4作図作業

写真159　調査参加者

写真160　T4埋め戻し状況

写真161　T4埋め戻し状況

写真162　埋め戻し完了状況

写真163　T6完掘遠景

写真164　T6完掘状況

写真165　調査前状況（北からv）

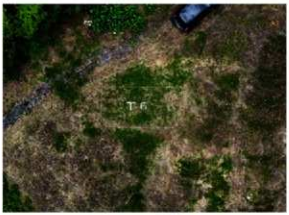


写真166　T6設置状況

写真167　検土杖作業風景

写真168　検土杖作業風景

写真169　表土掘削状況（東から）

写真170　表土掘削状況（東南から）

写真171　作業風景

写真172　表土除去状況（東から）

写真173　T6東壁土層断面

写真174　T6北壁土層断面

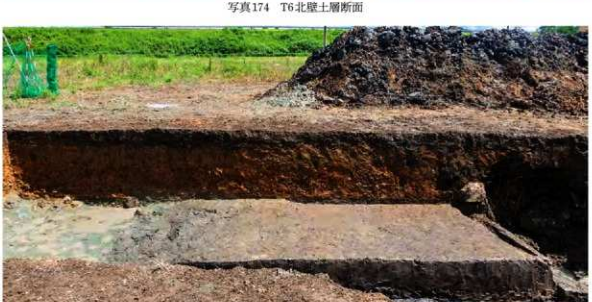


写真175　T6南壁土層断面

写真176　作業風景（西から）

写真177　土留め杭検出状況（西から）

写真178　作業風景（南から）

写真179　作業風景（南から）

写真180　完掘状況（北から）

写真181　Ka層表面

写真182　Ka層・K層（南から）

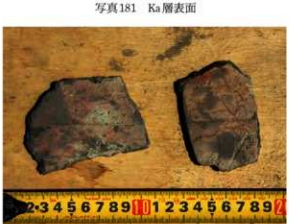


写真183　弥生前期土器（№2・3）

写真184　作業風景（東から）

写真185　作業風景（北から）

写真186　作業風景（東から）

写真187　作業風景（東から）

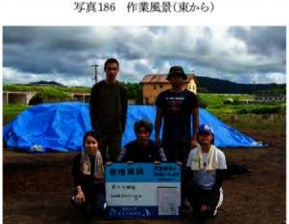


写真188　調査参加者

写真189　埋め戻し状況

写真190　埋め戻し完了状況

写真191　出土遺物

Ⅲ. 資料報告

居徳遺跡4D区の調査成果は高知県埋蔵文化財センターにより『居徳遺跡群Ⅵ』(2004年)として報告されている。縄文・弥生移行期の資料が多く出土した1区に対して、4区は縄文後期土器や倉岡型や古段階の刻目突帯文土器など第4・5段階(第Ⅳ章成果論文を参照)の資料が多い。擂鉢状の窪地である4区のなかでもテラス状の窪地をなす4D区には黒色粘質土の包含層中に多量の土器をはじめ、シカ・イノシシを中心とする動物骨、受傷人骨、土偶など特徴的な遺物を含まれており、さらの古墳時代層からは多量の須恵器の他に、碧玉製の勾玉や子持勾玉、鏡形土製品や土製勾玉など祭祀関連遺物が出土している。4D区が、時代を超えて、特別な廃棄場と位置づけられていたことを窺わせる状況であり、居徳遺跡への理解を深める上で特に重要な箇所であると認められる。居徳遺跡の出土資料を再検討するなかで、4D区には報告書に掲載されたもの以外にもさらなる資料化を必要とする出土品が数多くあることを知った。また居徳遺跡出土資料の検討を進めるなかで、居徳遺跡にほど近い、縄文晩期中葉の標式遺跡である倉岡遺跡出土資料が未報告のまま保管されていることを併せて知り得た。居徳遺跡4D区および倉岡遺跡出土品を資料化し検討しうる材料とすることが高知県における縄文時代研究および縄文・弥生移行期研究において極めて重要な課題であるとの認識をもった。

1. 居徳遺跡4D区出土資料

居徳遺跡4D区出土品に対する具体的な取組みは、本研究課題に先立つ2015年度より着手している。2015年度には整理作業を必要とする土器を中心とする資料が整理箱611個分あることを把握し、まず収納箱のラベリングと内容確認をおこなった。2016年度には資料化を必要とする土器の選別をおこない、899点の土器を抽出した。抽出遺物に対しては時期・器種の分類をおこなった。時期別の内訳は縄文時代460点、弥生時代15点、古墳時代424点であった。主たる整理作業の対象とした縄文土器の内容を詳細に記すと、縄文後期267点、後晩期4点、晩期189点で、器種別では後期が深鉢244・鉢18・浅鉢2・注口3、後晩期は浅鉢4、晩期は深鉢67・鉢10で、その他多数の器種不明品がある。2017・2018年度には接合・注記を実施した。注記は新たに設定した、整理用の通し番号を記した。抽出した縄文土器のうち後期土器をまず図化作業の対象とし、237点を実測対象遺物とした。

本課題の開始となる2019年度には、実測対象の縄文後期土器を分類し、暫定的に口嗣縄文系55点、松ノ木式21点、平城式27点、縁帯文土器口縁30点、鐘崎式18点、片粕式32点、平行磨消縄文54点と把握した。またⅣ層の収納箱のなかから刻目突帯文土器および磨研土器の抽出作業を進めた。2020年度はコロナ禍の影響で室内整理作業は著しく遅延し、一部の資料について実測及び拓本を進めた。2021年度もコロナ禍の影響で作業が停滞し一部資料について実測を進めた。2022・23年度はコロナ禍の状況がやや改善したこともあり、集中的に実測作業を進めたが、製図にまで至り本書で報告できたのは僅か43点にとどまった。

2. 倉岡遺跡出土資料

倉岡遺跡出土資料に対する取組は2017年度より開始した。2017年度にはまず保管状況の記録をおこない台帳を作成した。土器の点数が4650点にのぼることを確認した。2018～2019年度にかけて新たに設定した整理番号にもとづき注記を進めた。

本課題の開始となる2019年度には注記をおえた資料について、接合を進めつつ分類をおこなった。結果、倉岡遺跡出土土器は、縄文晩期浅鉢が収納箱1箱分、縄文晩期深鉢が収納箱2箱分、弥生時代南四国型土器が収納箱1箱分、ヒビノキ式土器が収納箱4箱分と把握できた。縄文晩期土器については

さらに細かな分類をおこない、倉岡1式深鉢（倉岡型）1,290点、磨研浅鉢（1～4段階）215点、刻目突帯文土器15点、磨研浅鉢（5段階）25点と把握した。コロナ禍の遅滞を経て、2022年度から口縁資料を中心に実測を進め、70点近くを図化したが、期間中にトレースにいたらず実測図の掲載はわずか1点にとどまった。

倉岡遺跡出土土器のうち型式分類に適した口縁部資料は120点余りとなるが、内訳は倉岡型98点、先倉岡型1点、刻目凸帯文12点、谷尻式4点、前池式1点、その他7点となる。縄文晩期中葉の標準型式を倉岡1式から倉岡型と改めたが（成果論文①）、倉岡型の特徴とされる口唇部の形態とみると、無刻みは44点、刻目をもつものは54点であった。刻目の種類はD形14点、V形11点、O形6点、貝殻腹縁4点、棒状9点で他に細い刻み、指頭、竹管などがみられた。器面調整には二枚貝条痕20、ナデ16、繊維状擦痕17が認められた。

第19図に示した1点は倉岡遺跡出土の深鉢である。残高26.0cm、口径32.1cm、胴径31.0cm、器壁厚は5㎜程度である。色調は灰褐色～褐灰色で使用に伴う被熱痕は認められない。口頸部が緩やかに湾曲する屈曲タイプ（成果論文①）で、丸く調整された口唇部には大振りなD字形の刻目が密に加えられる。外面は板ナデ調整で口頸部が横方向、胴部は縦方向に施される。内面はナデ調整である。胎土にはチャートの微砕を含み在地産と判断できる。

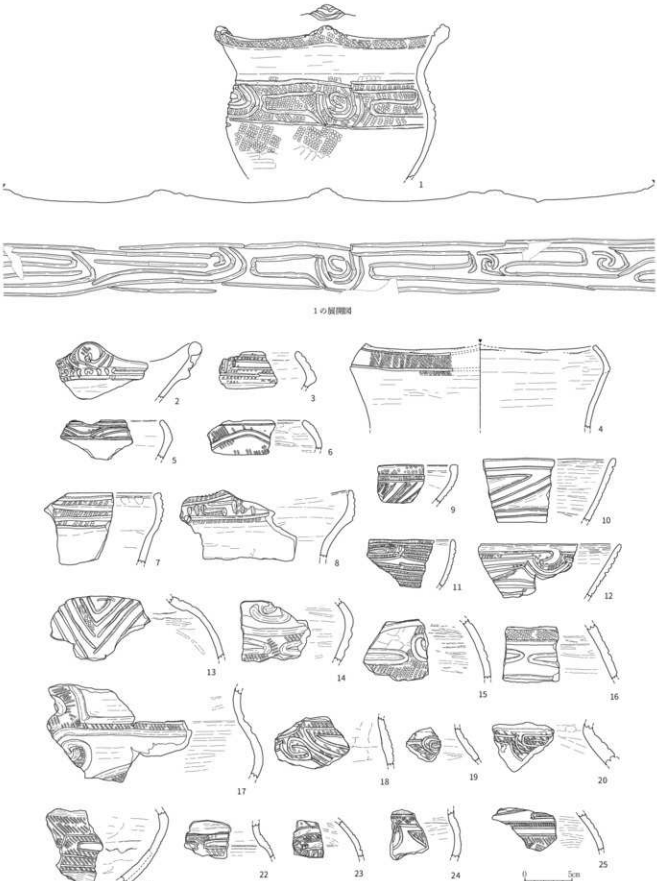
第22図に示した4点の写真は倉岡遺跡出土磨研鉢である。ⓐは胴張り形の磨研鉢（成果論文②）で残高11.7cm、復原胴径は38.2cmである。口縁はf類だが外面に沈線1条が加わる。胴部は張りのある丸胴である。内外面とも丁寧なミガキ調整で、内面の肩部のみ板ナデがでやや粗い。内外の対応する位置に黒斑があり、底部は広い範囲に円状、口縁はひろく帯状、胴部は縦長の筋状に認められる。胎土は精良で微量の火山ガラスを含む。ⓑは喇叭形の磨研鉢で残高8.0cm、復原口径は31.8cmである。口縁はg類、胴は面胴である。器面調整は口頸部外面が板ナデ、胴部外面はナデでやや凹凸がある。内面はおよそナデである。器壁が厚く全体に粗製である。胎土には大粒のチャートを含む。ⓒは喇叭形の磨研鉢で残高10.8cm、復元口径は31.0cmである。口縁は台形状のf類、胴は面胴である。肩部下端には段があり、丹彩の痕跡がある。外面は二枚貝条痕を下地とするミガキ仕上げで、底部付近は条痕が残る。胴外面にはナスビ文状の黒斑が認められる。胎土には黒色火山ガラスを含む。ⓓは喇叭形の磨研鉢で残高9.3cm、復原口径は33.0cmである。口縁は丸みのあるg類で胴は面胴である。内外面とも丁寧なミガキ仕上げである。胎土には微量の黒色火山硝子を含む。ⓐが4段階、ⓑⓒⓓが5段階にあたる。

表2-1　居徳遺跡4D区出土遺物観察表

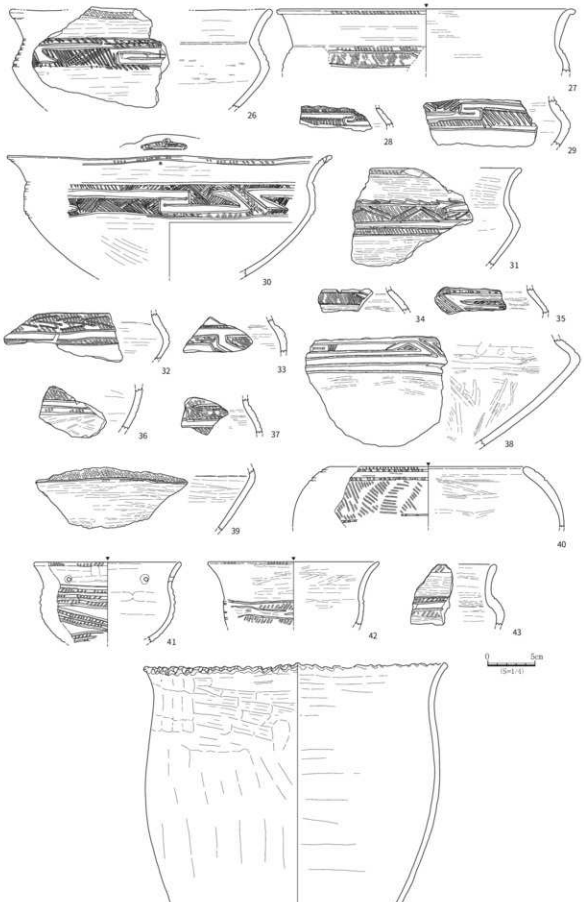
No.	素材区分 器種・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬　②素材　③装飾　④造形　⑤使用痕　⑥その他	産地 時期
1	**縄文土器 深鉢：口胴**	**15.8″**	**26.0**	**—**	**①明黄褐色、②チャート、雲母、③波口4頂、内重弧文、RL縄文、胴RL縄文消消、入組-渦巻文5単位、④外ナデ、内ナデ、⑤外スス帯、内コゲ帯。**	**在地 縄文後期前葉**
2	縄文土器 深鉢：口縁	6.0″	—	—	①黒褐色、②チャート、③口縁RL縄文、渦文を重弧挟み、下界沈線端間にC字刺突列、④波口、外横ミガキ、内横ミガキ、⑤内コゲ。	在地 縄文後期前葉
3	**縄文土器 深鉢：口縁**	**3.9″**	**—**	**—**	**①橙色、丹彩、②長石、石英、雲母、角閃石、③LR縄文磨消、沈線、平行線端縦短線、④内外ミガキ、⑤外スス斑。**	**搬入 縄文後期中葉**
4	縄文土器 深鉢：口胴	8.6″	—	—	①褐橙色、②チャート、③口縁沈線間にLR縄文、④袋状口縁、外ミガキ、内ナデ、⑤外スス、内コゲ。	在地 縄文後期中葉
5	**縄文土器 深鉢：口縁**	**4.2″**	**—**	**—**	**①橙色、②チャート、石英、③口縁対向重弧文、④縄文ナデ消し、内ナデ、⑤外スス。**	**在地 縄文後期中葉**
6	縄文土器 深鉢：口縁	3.6″	—	—	①橙色、②チャート、赤粒、③RL縄文、上界線、重弧文、④袋状口縁、外ミガキ、内ミガキ。	在地 縄文後期前葉
7	**縄文土器 深鉢：口頸**	**7.6″**	**—**	**—**	**①橙色、②石英、チャート、雲母微、③LR縄文、4条沈線、④袋状口縁、外ナデ、内横ナデ、⑤外スス、内コゲ帯。**	**在地 縄文後期前葉**
8	縄文土器 深鉢：口頸	7.4″	—	—	①黒褐色、②石英、長石、赤粒、雲母、③LR縄文磨消、口縁太沈線間に鉤文連子文挟み、④外ミガキ、内ミガキ、⑤焼成後穿孔、内下部コゲ。	搬入ヵ 縄文中期前葉
9	**縄文土器 鉢：口縁**	**4.1″**	**—**	**—**	**①灰褐色、丹彩、②チャート、石英、③RL縄文磨消、沈線、重三角文ヵ、④外ミガキ、内ナデ、⑤内下半コゲ。**	**在地 縄文後期前葉**
10	縄文土器 浅鉢：口縁	6.7″	—	—	①褐灰色、②長石、石英、雲母微、③RL縄文磨消、沈線、上下界線、平行鋸線、④外ミガキ、内ミガキ。	搬入 縄文後期前葉

表2-2　居徳遺跡4D区出土遺物観察表

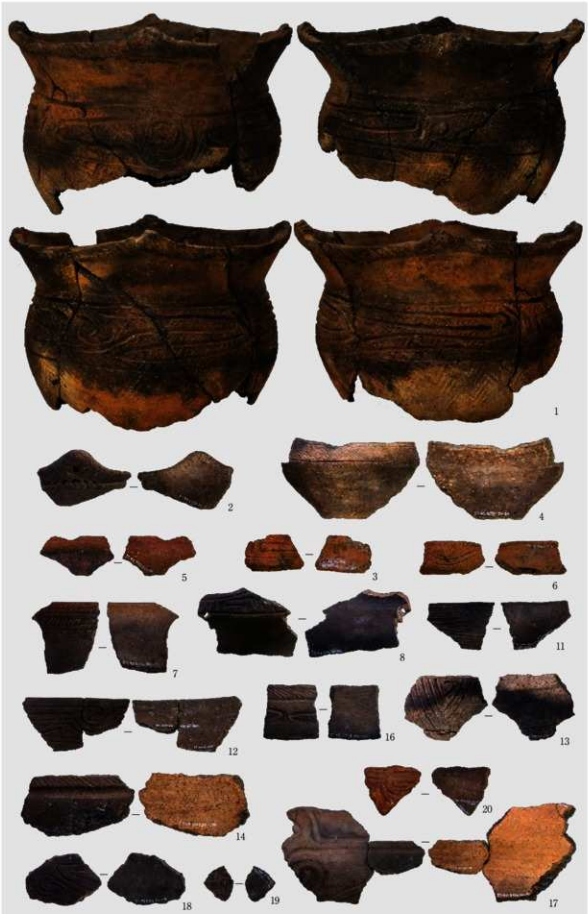
No.	素材区分 器種・部位等	器高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	①色調・釉薬　②素材　③装飾　④造形　⑤使用痕　⑥その他	産地 時期
11	縄文土器 鉢：口縁	5.1*	—	—	①灰黄褐色，②長石，石英，雲母，③LR縄文磨消，平行線，縦短線連結，④外ｽﾐｶｷ，内ｽﾐｶｷ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
12	縄文土器 浅鉢：口縁	5.7*	—	—	①黒褐色，②長石，石英，③LR縄文磨消，沈線，入組文，④外ｽﾐｶｷ，内条痕→ｽﾐｶｷ．	搬入 縄文後期前葉
13	縄文土器 深鉢：胴	6.9*	—	—	①浅黄橙色，②ﾁｬｰﾄ，ｼｬﾓﾄﾌ，雲母，③RL縄文，胴重三角文，④内ｽﾐｶｷ，⑤外ｽｽ，内ｺｹﾞ濃淡．	在地 縄文後期前葉
14	縄文土器 深鉢：胴	6.5*	—	—	①鈍黄橙色，②ﾁｬｰﾄ，石英，雲母，③RL縄文，太沈線，入組文，⑤外ｽｽ，内コケ帯．	在地 縄文後期前葉
15	縄文土器 深鉢：胴	6.5*	—	—	①鈍黄橙色，②石英，黒輝石，③LR縄文磨消，太沈線，渦・楕円文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
16	縄文土器 深鉢：胴	5.9*	—	—	①灰黄褐色，②石英，長石，黒輝石，③RL縄文磨消，太沈線，楕円文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ，⑤外ｽｽ，内下部コゲ．	搬入ヵ 縄文後期前葉
17	縄文土器 深鉢：胴	10.3*	—	—	①鈍黄橙色，②雲母，ｼｬﾓﾄﾌ，③RL縄文磨消，太沈線，入組文，④外ｽﾐｶｷ，内精ﾅﾃﾞ，⑤内淡コゲ，⑥Jo196と接合．	在地 縄文後期中葉
18	縄文土器 深鉢：胴	5.5*	—	—	①黒褐色，②石英，雲母微，③RL縄文，③入組文，斜行複条沈線，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ．	搬入ヵ 縄文後期前葉
19	縄文土器 深鉢：胴	3.6*	—	—	①赤灰色，丹彩，②石英，ﾁｬｰﾄ，雲母，③LR縄文，沈線，入組文，④内ﾅﾃﾞ．	在地 縄文後期前葉
20	縄文土器 鉢：胴	5.3*	—	—	①褐色，丹彩，②雲母，③RL縄文，沈線，入組文，④内ﾅﾃｽ，ﾅﾃﾞ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
21	縄文土器 深鉢：胴	8.5*	—	—	①丹彩，②ﾁｬｰﾄ，雲母，③RL縄文磨消，沈線，方形入組文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ，接合痕．	在地 縄文後期中葉
22	縄文土器 深鉢：胴	4.0*	—	—	①褐灰色，丹彩，②ﾁｬｰﾄ，雲母，③RL縄文磨消，沈線，楕円文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾐｶｷ．	在地 縄文後期前葉
23	縄文土器 鉢ヵ：胴	3.9*	—	—	①褐灰色，丹彩，②石英，雲母，③RL縄文磨消，楕円区画縦間に短斜線充填，④内外ｽﾐｶｷ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
24	縄文土器 鉢ヵ：胴	5.3*	—	—	①灰褐色，丹彩，②ﾁｬｰﾄ，③LR縄文，入組渦巻文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾐｶｷ，⑤外ｽｽ部分．	在地 縄文後期前葉
25	縄文土器 深鉢：胴	4.5*	—	—	①暗褐色，丹彩，②石英，長石，雲母，③RL縄文磨消，沈線，平行線，交叉文，④外ｽﾐｶｷ，内ｽﾐｶｷ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
26	縄文土器 深鉢：口胴	10.5*	—	—	①褐灰色，②雲母，ﾁｬｰﾄ，③口縁RL縄文，頸根縦間短斜線帯，肩ﾌﾗﾝｼﾞ区画内斜格子・短斜線帯，④外粗ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞリ，⑤外部ｶﾞｰﾙ，内コケ帯．	在地ヵ． 縄文後期中葉
27	縄文土器 鉢ヵ：口胴	6.7*	31.6▼	—	①灰褐色，丹彩，②黒輝石多，ﾁｬｰﾄ，③RL縄文，横沈線2条，④外ｽﾐｶｷ，内ｽﾐｶｷ，⑤内～外コゲ，外淡ススス．	搬入ヵ 縄文後期中葉
28	縄文土器 鉢ヵ：胴	2.7*	—	—	①灰黄褐色，②長石，石英，雲母，③RL縄文磨消，入組文に縦短線列沿う，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ，⑤外下半ススス，内下半コゲ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
29	縄文土器 深鉢：胴	5.0*	—	—	①橙～褐色，②石英，雲母，③方形入組文，連続縦沿う，RL縄文，④屈曲胴，外文様帯ｽﾐｶｷ，他ﾅﾃﾞ，内ﾅﾃﾞ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
30	縄文土器 鉢：口胴	12.7*	34.4▼	—	①鈍黄褐色，②石英，雲母，③口縁RL縄文，胴方形入組文に短斜線・鋸歯文・弧RL縄文充填，頸縦に刺突部分・隆線文ヵ，内口に隆起丸周ヵ珠文・楕円周ヵ・刺突付沈線・RL縄文，④内外ｽﾐｶｷ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
31	縄文土器 鉢：口胴	10.4*	—	—	①黒褐色，丹彩，②石英，雲母，黒鉱，③口縁RL縄文，胴RL縄文磨消，沈線，上下界線間複線山形文，平行線，④外ｽﾐｶｷ，内ｽﾐｶｷ・ﾅﾃﾞ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
32	縄文土器 鉢：胴	5.2*	—	—	①鈍黄橙色，丹彩，②ﾁｬｰﾄ，雲母，③RL縄文磨消，沈線間不規則斜線，斜線端刺突文，下位2条線，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ，⑤外ススス，内コケ斑．	在地 縄文後期中葉
33	縄文土器 深鉢：胴	3.7*	—	—	①灰褐色，丹彩，②石英，雲母，③RL縄文磨消，沈線，ﾌﾗﾝｼﾞ文，④内外ｽﾐｶｷ，⑤スタール状．	搬入ヵ 縄文後期中葉
34	縄文土器 鉢ヵ：胴	2.4*	—	—	①黒褐色，②ｼｬﾓﾄﾌ，雲母，③RL縄文磨消，沈線間斜面文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾐｶｷ．	搬入ヵ 縄文後期中葉
35	縄文土器 鉢：胴	2.9*	—	—	①褐灰色，②ﾁｬｰﾄ，雲母，③RL縄文磨消，沈線，平行線・斜線，④外ｽﾐｶｷ，内ﾅﾃﾞ，接合部に列点，⑤外ススス．	在地 縄文後期中葉
36	縄文土器 鉢ヵ：胴	5.4*	—	—	①灰黄褐色，②石英，長石，③RL縄文磨消，④外ｽﾐｶｷ，内ﾐｶｷ，⑤外淡ススス．	搬入ヵ 縄文後期中葉
37	縄文土器 鉢：胴	4.0*	—	—	①暗褐色，②ﾁｬｰﾄ，雲母，③RL縄文磨消，沈線，渦文・平行線・連弧文，④外ｽﾐｶｷ，内ﾐｶｷ．	在地 縄文後期中葉
38	縄文土器 鉢：胴	11.6*	—	—	①暗褐色，②石英，長石，雲母，③RL縄文磨消，5条沈線，斜線分割，線端三角満文，線間縦4短線・横線充填，④外黒色磨研，内ﾐｶｷ．	搬入 縄文後期中葉
39	縄文土器 深鉢：口頸	6.4*	—	—	①鈍黄橙色，②ｼｬﾓﾄﾌ，黒輝石，③RL縄文，界沈線，④内外ｽﾐｶｷ．	在地 縄文後期前葉ヵ．
40	縄文土器 鉢：口胴	6.5*	—	—	①褐灰～鈍黄橙色，②石英，角閃石，③RL縄文，口縁2条沈線，線底列点文，④内ｽﾐｶｷ，⑤内淡ススス．	搬入ヵ 縄文後期中葉
41	縄文土器 鉢：口胴	8.5*	15.6▼	—	①鈍黄橙色，②ﾁｬｰﾄ，金雲母，③LR縄文，4沈線・3斜線・2沈線，④内ﾅﾃﾞ，⑤焼成後穿孔，外ススス，内下半コゲ．	在地 縄文後期前葉
42	縄文土器 深鉢：口胴	6.8*	18.1▼	—	①灰褐色，②ﾁｬｰﾄ，③口縁RL縄文，胴LR縄文磨消，3条沈線，④内外ｽﾐｶｷ，⑤外下半ススス，内上半ススス．	在地 縄文後期前葉
43	縄文土器 鉢：口胴	6.5*	—	—	①黒褐色，丹彩，②石英，雲母，ﾁｬｰﾄ，③口縁LR縄文，胴LR縄文磨消，平行線，交互縄文帯，④外ミガキ，内ミガキ．	在地 縄文後期中葉



第18図　居徳遺跡4D区出土遺物1



第19図　居徳遺跡4D区出土遺物2



第20図　居徳遺跡4D区出土遺物写真1

第20図　居徳遺跡4D区出土遺物写真2

第22図　倉岡遺跡出土磨研鉢写真

Ⅳ. 成果論文

① 宮里修、2022年3月、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
② 宮里修、2022年8月、「南四国縄文晩期磨研浅鉢の分類と編年」『海南史学』第60号、高知海南史学会、1～22頁
③ 宮里修、2023年3月、「南四国出土土偶の系譜」『高知考古学研究』第7号、高知考古学研究会、1～21頁
④ 宮里修、2024年3月、「縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について」『高知考古学研究』第8号、高知考古学研究会、13～31頁

① 南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列

はじめに

居徳遺跡が提起する縄文・弥生移行期にまつわる諸問題に関心を持ち(宮里 2016・17・18・19・20)、現在は「農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究」(JSPS 科学研究費補助金20K01075)として調査・研究に取り組んでいる。課題は多岐に亘るが、年代軸の再検討、とりわけ刻目突帯文土器とその後継についての整理は、基礎的でありながら未だ再検討の余地を多分に残している。磨研鉢については1度検討を加え基本枠を整えたが(宮里 2016)、最後段階についてはより詳細な検討を必要とする。縄文晩期土器の基本器種である深鉢と磨研鉢についてそれぞれに応じた再検討が必要な中で、本稿は深鉢の問題に取り組む[1]。深鉢についての主要な関心事は刻目突帯文土器であるが、先行する晩期深鉢もあわせて検討し一連の型式組列を整える。なお本稿では縄文文化伝統の保持という研究の脈絡に沿って、縄文土器の伝統をひく刻目突帯文土器を晩期深鉢の問題系に含めて考える。

1　研究史

南四国の縄文晩期深鉢は岡山を中心とした備讃瀬戸北岸域との関係が深く、さらに視野を広げると近畿との関係において年代的位置が定まる。以下に、近畿・備讃瀬戸・南四国における研究の流れ及び現状を整理する。

(1) 編年の現在

縄文時代晩期は山内清男(1937)により設定された大洞式土器を基準とする年代軸であり、大洞式土器との併行関係をもとに各地の晩期土器が検討された。西日本では近畿地方についての検討が先行して進み、近畿地方の成果を参照しながら各地域の年代的位置を探るという構図が生じた。近畿地方では宮滝遺跡(末永 1944)、橿原遺跡(末永 1961)、滋賀里遺跡(坪井 1951)の調査成果によって宮滝→滋賀里→橿原という編年観がまず整えられ、吉胡貝塚の調査成果(山内 1952)により晩期土器の新相が刻目突帯文土器であることが示された。船橋遺跡の報告(佐原 1962)により晩期末の型式として船橋式が示された後、広域編年の試みとして外山和夫(1967)による刻目突帯文土器(隆起帯土器)研究が行われ、地域ごとの変遷や併行関係が整理されるとともに、弥生土器への連絡までを視野に収めた突帯文土器の年代的位置が示された。1971年の滋賀里遺跡の発掘調査により滋賀里Ⅰ式～Ⅴ式が設定され晩期を通観する基準となった後、家根祥多(1981)により滋賀里Ⅰ式、滋賀里Ⅱ式、滋賀里Ⅲa

式、滋賀里Ⅲb式、滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式とつづく型式組列が詳細に整備され、現在に継承される編年の枠組みができあがった。その後、篠原中町遺跡の調査成果により滋賀里Ⅲb式が細分をふくむ篠原式として再編成され(家根 1994)、滋賀里Ⅳ式と船橋式の間に口酒井遺跡の資料が挿入され(泉 1986)、さらには磨研鉢を手掛かりとした西日本晩期土器の広域編年が整備されていった(泉 1989・90)。

南四国と関係が深い備讃瀬戸地域の晩期土器研究は、1942年に発掘された高島黒土遺跡(岡山縣高島遺蹟調査委員會編 1955)の評価に始まる。鎌木義昌・木村幹夫(1956)が山内清男の1951年の口頭発表の内容をもとに、中国地方の晩期土器を黒土BⅠ式・福田B式と黒土BⅡ式に区分し、前者をアルカ属腹縁による貝殻条痕を基調とするもの、後者を口縁部下に凸帯文を伴う1群とした。鎌木義昌・高橋護(1965)は黒土BⅠ式と黒土BⅡ式の間に、原遺跡下層資料を晩期中葉として加え、晩期を3分期した。春成秀爾(1969)はひろく中国・四国の土器編年を整理するなかで岩田式、津雲下層式、福田B式、中山B式、黒土BⅠ式、原式、前池式、黒土BⅡ式、入田B式の各型式を示し、備讃瀬戸北岸域については岡山西部の黒土BⅠ式→黒土BⅡ式に対して、岡山東部の前池式を、原式に後続する、有文で突帯が普遍化した地域型式として黒土BⅡ式に併行させた。その後、平井勝(1988)が北房町谷尻遺跡、山陽町南方前池遺跡、倉敷市広江・浜遺跡、岡山市百間川沢田遺跡の資料を詳しく検討して、谷尻式、前池式、沢田式を設定し、刻目突帯文土器である前池式・沢田式と先行型式である谷尻式との関係を整理したことで、備讃瀬戸北岸域における年代軸ができあがった。平井は黒土BⅡ式を前池式と沢田式の中間に当てたが、近畿の口酒井式に相当する前池式と沢田式の間は、津島岡大遺跡3次調査の成果により津島岡大式としてより詳細な検討が加えられた(山本 1992、平井勝 1992)。津島岡大式段階は明確な型式学的特徴を見出しがたく、該当資料を挿入して間を埋める方法が試みられてきたが(平井泰男 2000、中村大 2006、濱田 2008)、小南裕一(2012)が前池式と沢田式の間に津島岡大Ⅰ段階、窪木河道1段階、津島岡大Ⅱ段階とした各資料をあて突帯文土器をⅠ～Ⅲ期に整理した研究が、最も詳細に各時期の様相を把握できる成果となっている。

南四国の晩期土器研究は、岡本健児による『高知県の考古学』(1966)や『高知県史』(1968)に始まる。近隣地域の土器型式に対応する資料を把握することから始まり、黒土BⅠ式、黒土BⅡ式に併行する土器型式として、まず八反坪遺跡、中村貝塚(中村Ⅰ・Ⅱ式)など県北部、県西部の資料が示された。その後、県中央で倉岡遺跡が調査され(岡本 1980)、西部の中村Ⅰ・Ⅱ式とも異なる、口唇刻目に特徴がある刻目突帯文土器とその先行型式の存在が知られた。これらに姫野々上町遺跡などの資料を加え、岡本健児(1983)は南四国晩期土器を晩期前半・後半に区分し最初の体系化をおこなった。晩期前半のうち初頭に位置づけられた姫野々上町資料は巻貝条痕と巻貝施文による2条凹線文を特徴とし、条痕深鉢と精製浅鉢の組合せに特徴がある八反坪資料が晩期前半としてつづく。晩期後半は県中央の倉岡式と県西部の中村式に区分された。倉岡Ⅰ式は口唇に刻目をもつ(波状口縁を含む)深鉢と口縁が長く延びる器形や胴部がつよく張る器形の浅鉢から構成され、倉岡Ⅱ式は口唇刻目とやや下位の刻目突帯をもち屈曲のない単純な器形をもつ条痕調整の深鉢と口頸がく字形に屈折する浅鉢から構成されるとした。倉岡Ⅱ式には刻目のない突帯(以下「素凸帯」と表記する)をもつ半精製器種があるため、素凸帯を特徴とする中村Ⅰ式と関連づけて、県西部と県中央部の土器型式が倉岡Ⅰ式→倉岡Ⅱ式・中村Ⅰ式→中村Ⅱ式という併行関係をもって推移するとした。その後は新出資料に応じた調整がつづき、北高田遺跡の資料を検討した出原恵三(2000)が北高田資料と八反坪資料・倉岡Ⅰ式をあわせて晩期中葉というひとつの時期区分を設けた。松本安紀彦(2006・08)は鴨部遺跡、栄エ田遺跡、美良布遺跡の資料を加え、近畿の編年と対照しながら編年の単位資料を配列した。上ノ村遺跡の調査成果をもとに出原(2014)は晩期前葉の土器型式を上ノ村式(1・2式)として編成した。後述の居徳遺跡をあわせて、南四国縄文晩期の各小期の指標となる資料についての認識が深まる一方で、雑多な共伴資料を編

年単位として配列する方法が型式組列の理解を阻害する側面があり、方法の見直しが必要と感じる。

本稿の重要な課題は、居徳遺跡の資料を主要な対象とする刻目突帯文土器の終焉にある。刻目突帯文土器研究における最後段階についての論点を整理しておく。刻目突帯文土器の終焉は、遠賀川式土器の登場と関わる「住み分け論」として問題化されてきた。「住み分け論」は中西靖人(1984)の議論を契機として起こり、現在もなお検討の余地を残す課題として取り組まれている。住み分け論の議論は最終段階の突帯文土器を追求する大きな動機付けとなり、近畿の年代軸が整備された 1980 年代以降、長原式にまつわる問題として研究が進められた(家根 1982・84、松尾 1983、中村健 1990・2008a・b、大野 1995、豆谷 2000、若林 2002、立岡 2007、中村豊 2008・16、岡田 2014・16、妹尾 2014 など)。派生する議論で重要な論点となるのは水走式と播磨系の評価である。水走式は、水走(鬼虎川)遺跡 8 次調査Cピット貝塚(東大阪市教育委員会他編 1998)の特徴ある刻目突帯文土器で、一括性や遠賀川式土器との共存について様々な議論があるが(若林 2002、秋山 2007、豆谷 2008、岡田 2016)、長原に後続する年代的位置が認められている。一見して長原式の深鉢とは器形をはじめとする特徴が異なり、水走式の出現には今宿型、丁・柳ヶ瀬型として示された播磨系深鉢(丹治 2000、中村健 2000・08)の影響が指摘される。播磨地域で形成された特徴ある深鉢は、三谷遺跡など四国東部にも類例があり(勝浦 2000、中村豊 2008・16)、また鹿久居千軒町タイプ(平井 2000)など備讃瀬戸北岸域の刻目突帯文土器最終段階(岩見 1992、濱田 2008、小南 2012)にも認められる。これら播磨系を中心とした最後段階にまつわる問題は、南四国の刻目突帯文土器を考えるための重要な論点であり以下で詳しく取り上げる。

(2) 用語について

次章でおこなう型式分類では分類単位を「～型」と呼ぶが、背景と考え方を整理しておく。筆者は以前「考古年代学の単位が型式であることについて」(宮里 2017)において、分類と編年についての問題点を指摘した。主旨は、時期差の把握や年代単位の細分を可能とするのは「型式」として表現される、他とは違った特徴でまとまる資料群と資料群相互の関連づけであり、「一括」遺物の配列で完結する方法は型式を頼りとしながらも変化の基準である型式を覆い隠している、といったものである。では弥生土器の「様式」を縄文土器の「型式」と対比させ縄文土器型式に準拠すればよいかといえばそうではない。西日本の縄文晩期土器では粗製煮炊土器と精製盛付土器の器種分化が一般化しており、分化した器種に共通する特徴を見出して分類単位を見出す縄文土器型式の方法には馴染まない。むしろ弥生土器の「壺の形式に属するA型式」(小林 1959)のような捉え方が適する。しかしこのような断りを入れても、分類単位を「～式」と表現すれば、既往の縄文土器型式に期待される内容を備えたものと認識され、読み手の関心が齟齬と不備に向かう恐れがある。ゆえに本稿では、晩期土器を構成するある器種のうちの、他とは異なる特徴でまとまる 1 群とした分類単位に対し「～型」の語を用いる。この語法はすでに岡田憲一(2014・16)が実践している。岡田は「～型」の表現についての理念を説明していないが、型式学的検討における「一括性」に対し資料批判の不十分さを指摘しており(岡田 2008a)、筆者と同様の観点にたったものと推察する。筆者が別途研究にとりくんだ青銅短剣などでは(宮里 2010)「式」のなかの特殊な 1 群に「型」を設定しており、今回の語法を一般化することもまた困難であると考えるが、土器編年の問題点を改善するひとつの案として、本稿では「～型」の語を用いて分類単位を表現する。

2　深鉢の型式分類

既往の研究で把握された土器群を批判的に継承し、資料の観察と検討を重ねた結果、上ノ村型、先倉岡型、倉岡型、刻目突帯文の3型式、居徳型を設定するにいたった。以下に詳細を記述する。

(1) 上ノ村型

上ノ村型(第Ⅳ①-1図1～12)は土佐市上ノ村遺跡出土資料を中心とする土器型式である。晩期初頭とされた姫野々上町資料(岡本 1983)や出原(2014)による上ノ村1式に関わる土器群である。出原は上ノ村遺跡3-1-4区テラス2の資料を一括性の高い資料と評価し、無刻目突帯深鉢を重視しながら上ノ村1式を設定した。出原は口縁など細部の分類において素凸帯の形成と変化を示唆するが、本来雑多な型式を含むテラス2をひとまとまりの分類単位としている。一括遺物は器種や型式をもって分析されるべき対象であり、分析により時期幅や組合せの意味が吟味されなければならない。出原が上ノ村2式とした包含層資料は、後述の上ノ村T型の退化型と倉岡型を含んでおり、一括遺物を分析するための分類単位に見直しが必要であることを示している。

上ノ村型の深鉢は器形・胎土・調整・装飾の特徴によってまとまる1群の土器である。280点余りの事例があり、居徳遺跡、姫野々上町遺跡に少数ある他はすべて上ノ村遺跡出土資料である。器形は、底部から胴部へと直線的に開き、胴屈曲部からは器体が上方にのび、口縁が大きく外反する。最大径は口縁にあり、口径は30数cm、胴径は30cm程度である。胴屈曲部は界線により区画される。界線は巻貝を用いた凹線やヘラ描き沈線であり、複線と単線の違いがある。前後型式と比較すると複線から単線に変化したと考えられる。外反する口縁は、板状で受口を形成するものと、外面に素凸帯をめぐらすものの違いがある。板状の受口外面には2本の凹線がめぐるが、素凸帯では同箇所に沈線がなくナデ凹帯となっている。口縁内面には口縁の屈曲に応じた折込みや沈線がみられる。前後型式との関係をみると受口が素凸帯に変化したのであり、口縁内外面の線文もこれに応じて変化した。口縁には4分位置が小さく突出するものがあり、突出部の口縁外面には凹線文系の名残りとみられる凹珠文がみられる。器面調整は巻貝条痕を特徴とする。南四国には類例が乏しいが、凹線文系を継承した技法を考えられる。胴界線を境界として上下で調整が異なる場合があり、上部は下地の巻貝条痕をナデ消して仕上げるものが多い。色調は暗褐色、胎土は泥質であり、片柏式など後期土器と類似する。後続する倉岡型の灰白色・砂質とは違いが大きい。

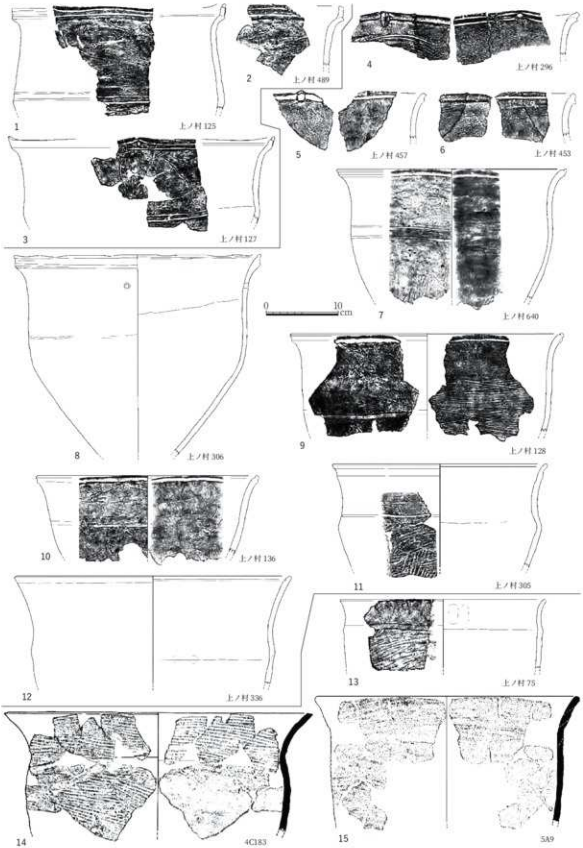
上ノ村型は後期後葉の凹線文系土器を継承し、(先)倉岡型に変化するが、口縁を中心とした特徴の違いにより先後関係となる2型式に区分できる。口縁が板状受口形のものを上ノ村U(受口)型、口縁外面に素凸帯をめぐらすものを上ノ村T(突帯)型として、以下にそれぞれの特徴を示す。

上ノ村U型

上ノ村型のうち、外反した口縁の端部に板状の粘土帯が加えられた受口状口縁のものを上ノ村U型(第Ⅳ①-1図1～3)とする。上ノ村U型は30例余りがあり、姫野々上町遺跡に1例ある他はすべて上ノ村遺跡の資料である。板状口縁部の外面には巻貝で施文された2条の凹線がめぐる。凹線にはヘラで施文された片切彫り状のものもある(第Ⅳ①-1図2)。波状口縁の資料では波頂部外面に珠文が加わる。珠文には巴状に端部がのびるものもある(第Ⅳ①-1図3)。受口部の下端が鋭く突出するもの(第Ⅳ①-1図2)があり、素凸帯の成因となる。口縁内面の受口屈折部には接合時の調整で生じた微弱な凹線がめぐる。胴屈曲部には巻貝で施文された2条の凹線が界線としてめぐる。外面は巻貝条痕で調整され、胴界線より上部は下地の条痕をナデ消して仕上げられる。

上ノ村T型

上ノ村型のうち、外反する口縁外面に素凸帯がめぐるものを上ノ村T型(第Ⅳ①-1図4～12)とする。上ノ村T型には130点余りがあり、上ノ村遺跡が多数を占めるほか、居徳遺跡、姫野々上町遺跡にも類例がある。上ノ村T型の素凸帯は上ノ村U型の受口状口縁下端の稜が転化したものである。上ノ村U型の口縁外面2条線は省略され、素凸帯上端のナデつけにともなう1条の凹帯となる。口縁内面には上ノ村U型の口縁屈折部凹線の痕跡として、片切彫り状の凹線もしくは段がめぐる。上ノ村T型



第Ⅳ①－1図　上ノ村型
（上ノ村U型：1～3、上ノ村T型：4～12、先倉圓型）

にみられる口縁外面の珠文(第Ⅳ①-1図4・5)や口縁内面に転写された2条線と珠文(第Ⅳ①-1図4)も上ノ村U型から略化継承したものである。胴屈曲部の巻貝施文による界線には2条(第Ⅳ①-1図7)と1条(第Ⅳ①-1図8~11)があり、上ノ村U型の2条を継承しつつ上ノ村T型で1条凹線が定型化したとみられる。また上ノ村T型には特徴的な退化形態もみられ、素凸帯が痕跡化しナデ凹帯(第Ⅳ①-1図11・12)となったものや、胴界線が痕跡化しミガキ段(第Ⅳ①-1図11)やナデ凹帯(第Ⅳ①-1図12)となったものがある。器形にも連動した変化があり、胴屈曲部からやや窄まったあと口頸部が外反して開くものに変わる。胴界線より下部を2枚貝条痕で仕上げるものもみられ、(先)倉岡型への移行が窺える。退化型の資料は上ノ村遺跡の8例ほどであるが、まとまった資料が得られれば一分類単位とすべき対象である。

(2) 先倉岡型・倉岡型

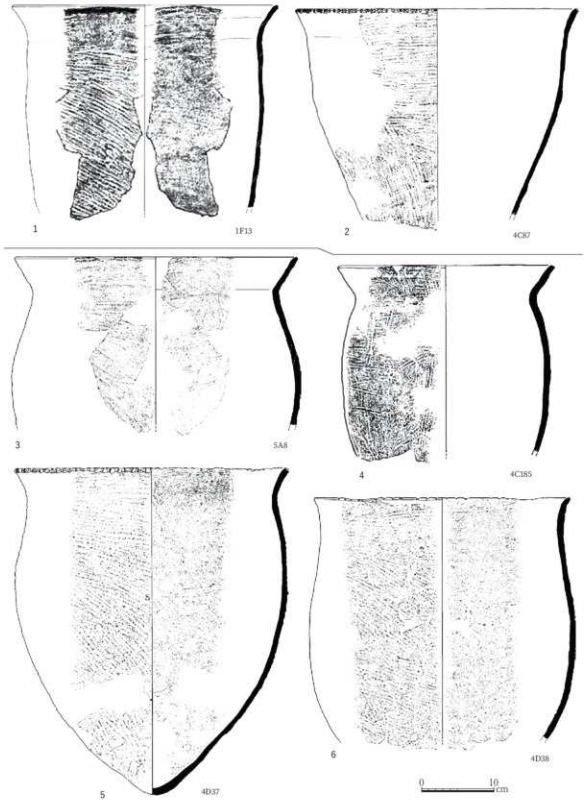
倉岡型は岡本(1983)の倉岡Ⅰ式に相当するもので、刻目突帯文土器の再編にともない倉岡Ⅱ式を廃することから倉岡Ⅰ式を倉岡型深鉢として再定義する。倉岡型は、張りのある胴部から頸がすぼまり口縁が外反する器形と、全体を2枚貝条痕で仕上げる器面調整に特徴がある。倉岡Ⅰ式では口唇刻目も特徴とされたが、1,060点ほどある倉岡型のうち[12]600点以上が口唇に刻目を持たない。胴部最大径は30cm台後半のものが多く、前後型式と比べ大型である。倉岡型に準じる土器のうちには、倉岡型一般の特徴からやや外れ上ノ村T型との関係が考慮される1群がある。資料数は50点ほどであるが特徴的な1群として析出できるため、倉岡型の原型式となる先倉岡型として分類単位を設定する。類例の増加にあわせて改めて型式名を付したい。

先倉岡型

先倉岡型(第Ⅳ①-1図13~15、第Ⅳ①-2図1・2)は上ノ村T型の口頸部が短くなった器形をもつ。胴部の張りは小さく、口縁部は屈折気味に折れ外傾する。胴と口縁部の境界にナデ凹帯(第Ⅳ①-1図13~15)をめぐらし部位を区分する。ナデ凹帯を欠く場合も口縁部の2枚貝条痕をナデ消すことで部位を区分する(第Ⅳ①-2図1)。口縁部は胴部よりもやや厚めにつくる傾向があり、ナデ凹帯や肥厚による口縁部の区分は滋賀里Ⅲa式に通じる特徴といえる(家根 1981、岡田 2011)。居徳遺跡や上ノ村遺跡を中心に52点が確認され八田奈呂遺跡にも類例がある。

倉岡型

倉岡型(第Ⅳ①-2図3~6)は前述のように、張りのある胴部から頸が窄まり口縁が外反する器形と全面2枚貝条痕を特徴とする。先倉岡型と比べると、ナデ凹帯や調整区分がなくなり胴部と口縁の区別が曖昧になっている。また口縁部に最大径があった先倉岡型に対し、胴部の張りが強くなった倉岡型は口径と胴最大径が同程度となる。器形の変化に、上ノ村T型から先倉岡型を経て倉岡型にいたる連続性を読み取ることができる。倉岡型の口縁部の折れには特徴的な2種類があり、屈折タイプ(第Ⅳ①-2図3・4)と屈曲タイプ(第Ⅳ①-2図5・6)に区分される。口縁の折れ形状が確認できた127点のうち、屈折タイプは21点、屈曲タイプは106点であった。先行する先倉岡型が屈折形で、後続する刻目突帯文土器が屈曲形であるから、倉岡型においては屈折タイプが先行し、屈曲タイプが後行すると考えられる。前述のように倉岡型全体としては口唇刻目の割合が低いが、口唇刻目と折れ形状の相関をみると、屈折タイプは14%、屈曲タイプは40%に口唇刻目があり、施文率は増加傾向を示す。倉岡型で底部が遺存する資料をみると、尖り気味の丸底と上げ底気味の平底の2種類がある。先行型式の底部形状は不明であるが、後続する刻目突帯文土器にかけて平底に統一化されていくとみられる。倉岡型には1,060点余りの資料があり、居徳遺跡や上ノ村遺跡(さらに倉岡遺跡)を中心に、栄工田遺跡、北高田遺跡、新改小山田遺跡、柳田遺跡、林田シタノヂ遺跡ほか、多くの遺跡から出土している。南四国の縄文晩期深鉢では数量および出土遺跡数がもっとも多い型式である(宮里 2020)。



第Ⅳ①－2図　先倉岡型・倉岡型深鉢
（先倉岡型：1・2、倉岡型：3～6）

(3) 刻目突帯文土器

県中央部の刻目突帯文土器は倉岡Ⅱ式とされ、口唇に刻目をもつ突帯文土器として西部の中村Ⅱ式と対置されたが（岡本 1983）、その後の出土資料により明らかとなった刻目突帯文土器の多様性を倉岡Ⅱ式によって包括するのは困難であるため、刻目突帯文土器という大別を維持しながら新たな細別型式を設定する。

刻目突帯文土器には器形を主な違いとする３種類があり、細部も器形に応じて異なった特徴を示す。器形の違いは口頸部において顕著であり、各特徴に応じて短頸型、喇叭型、長頸型と区分することができる。いずれも備讃瀬戸北岸域と関係の深い器形である。出土遺跡は高知平野に集中し、胴が屈折する器形において九州と結びつく西部の中村Ⅱ式と顕著な地域差を示す。該当資料は 14 遺跡から 720 点ほどが出土している。出土遺跡には上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、栄エ田遺跡、松ノ木遺跡、柳田遺跡、北高田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡、西鴨地遺跡、天崎遺跡、林口遺跡、林田シタノヂ遺跡などがあるが、出土遺物の 87 %を占める居徳遺跡への集中が顕著である。居徳遺跡への集中傾向は型式変化の進行とともにさらに顕著となっていく。

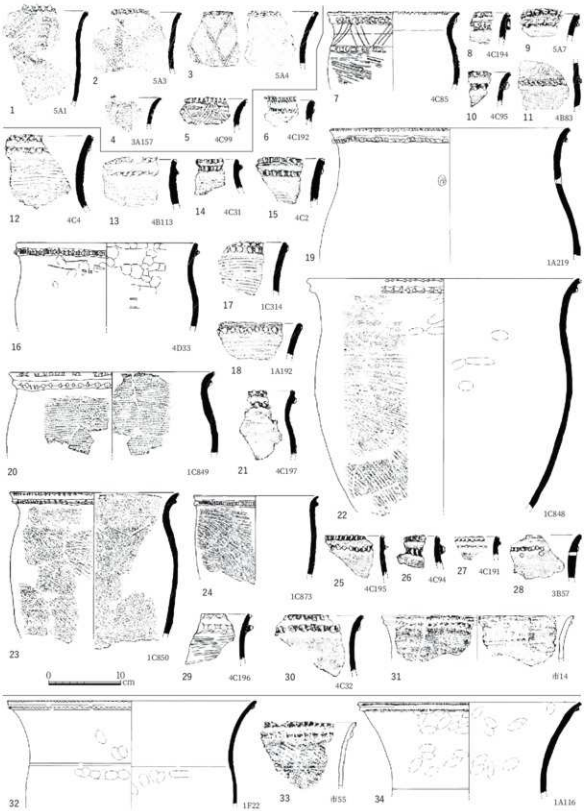
器形によって区分される３型式は時期差の関係にあり、短頸型、喇叭型、長頸型の順に推移する。資料の大部分を居徳遺跡が占めるため標式遺跡に基づく命名が困難であり、また将来的には短頸型と喇叭型の間に１型式が見出される可能性が高いため記号化も避けたい。よって暫定的ではあるが、形態差の表現である「短頸型」「喇叭型」「長頸型」を型式名とし、今後良好な資料の発見があれば適宜型式名を付与することとする。細別３型式の名称は「刻目突帯文短頸型(以下、表記は「刻凸短頸型」とする)」「刻目突帯文喇叭型(「刻凸喇叭型」と表記する)」「刻目突帯文長頸型(「刻凸長頸型」と表記する)」となる。3型式は次の特徴で端的に区分される。「刻凸短頸型」は口頸部が短く、また開きも小さく、厚手で、突帯・刻目ともに大振りである。「刻凸喇叭型」は口頸が大きく開き、薄手で、突帯・刻目ともに小振りである。「刻凸長頸型」は長い口頸部が肩から外反するが開きが小さく、下がった位置につく口縁突帯は幅狭で薄く、刻目も小さい。以下に、各型式の内容を詳述する。

刻凸短頸型

刻凸短頸型(第Ⅳ①-３図8～10･12～31)は、胴最大径から短い口頸部がゆるく開く器形を特徴とする。口縁の外反は小さく、口径と胴最大径は同程度か胴最大径がやや大きい、倉岡型屈曲タイプと類似した器形である。器壁に厚みがあることも倉岡型に似る。刻凸短頸型の 236 点について口唇部の調整をみると、丸く収めたものが114点であるのに対し、何らかの面取りを施したものが91点、他に尖り気味のものが26点である。また口唇に刻目をもつ 133 点に対し、無刻みは 94 点で、倉岡型屈曲タイプよりさらに口唇刻みの施文率が上がっている。また口唇刻目には、外反した口唇刻目が見かけ上は刻目突帯にみえる擬２連突帯(後述)もある。器面調整は２枚具条痕を基調とし倉岡型の技法を継承するが、口頸部は条痕をナデ消して仕上げており、部位の仕上げを違えて区分する手法をとる。刻凸短頸型の突帯は幅がひろく厚みのあるものが多く、刻みも大きく深いものが目立つ。刻目には半裁竹管状の、先端が２叉に分かれた刻込みの浅い工具を押し引いて施文したC形のものがあり、備讃瀬戸北岸域の前池式に通じる。刻凸短頸型は、居徳遺跡をはじめ上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、栄エ田遺跡、松ノ木遺跡、柳田遺跡、北高田遺跡、八田神母谷遺跡、西鴨地遺跡、天崎遺跡、林口遺跡、林田シタノヂ遺跡の 13 遺跡から 236 点が出土しており、各遺跡で倉岡型の延長線上に刻凸短頸型が成立したことを示している。

刻凸喇叭型

刻凸喇叭型(第Ⅳ①-３図32～34、第Ⅳ①-４図１～９･11･12･29～32他)は、胴最大径からやや頸を窄めつつ口縁部が大きく外反して開く器形を特徴とする。最大径は口縁部にある。口頸部と胴部の境に界線を施すことを重要な特徴とする。界線は１条で、ヘラ描き沈線やナデ・ミガキによる凹線があるが全体に沈線が多い。胴部突帯をもつものが17点あるが、全体に占める割合は僅少であり、界線に準じる区画文様として加えられたと考えられる。界線を境界に上下で仕上げの調整が異なり、刻凸短頸型の調整方法を継承している。界線上の口頸部はナデで丁寧に仕上げ、界線下はケズリや繊維状擦痕などで粗く仕上げたものが多い。器壁が薄く、雲母を含む精選された胎土を用いたものが目立つ。口縁および胴部をめぐる突帯は細く低平なものが多く、刻目は小さく、あるいは細く浅い傾向にある。一



第Ⅳ①－3図　刻凸短頸型・刻凸喇叭型深鉢と関連資料

（刻凸短頸型：8～10・12～31、刻凸喇叭型：32～34、谷尻式：1～5、前池式：6・7・11）

［C刻：1～4・6～12・15・18・20・28・29・30、擬2連凸：19・20・22・23・29・32～34］

部には厚手で造形が粗略なもの（第Ⅳ①-4図31・32）もあり刻凸喇叭型における時期差を示す可能性がある。口唇が遺存する317点のうち刻目をもつものは169点である。刻目突帯の諸形態のうち端接突帯、垂下突帯、擬2連突帯があり、擬2連突帯には2連突帯の効果をつよく意図したものがある（後

述)。器形や刻目突帯の特徴は備讃瀬戸北岸域の沢田式に類似し、両型式の接点を示す。刻凸喇叭型には341例があり松ノ木遺跡、上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡に17例あるほかはすべて居徳遺跡から出土した。

刻凸長頸型

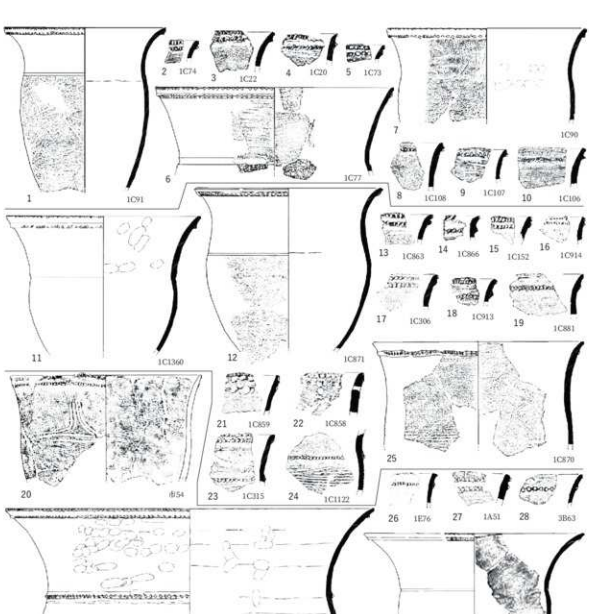
刻凸長頸型(第Ⅳ①-4図10・15～28、第Ⅳ①-5図1～14)は、胴最大径から長い口頸部が緩やかに外反する器形を特徴とする。最大径は口縁部にあるが喇叭型にくらべ開きは小さい。口唇から下がった位置に加えられた下位突帯を特徴とする。刻目は細く浅い。口唇が確認できた103点のうち刻目をもつものは10点で施文率の低下が著しい。器面調整は胴部が2枚貝条痕、口頸部がナデで、部位により仕上げが異なる。多くは喇叭型の特徴であった界線を欠くが、口頸部に文様をもつものには胴部突帯が加えられる。

刻凸長頸型は「服部型」の影響を受け成立したと考えられる。本稿で設定する「服部型」は岡山県総社市服部遺跡(岡山県古代吉備文化財センター編 2002)の河道1出土土器(第Ⅳ①-6図5)や岡山県備前市鹿久居千軒町遺跡(日生町教育委員会編 1965)出土土器(第Ⅳ①-6図6)を標式とする、備讃瀬戸地域の深鉢型式である。外反程度の弱い長い口頸部、下位に位置する口縁部突帯、口頸部の沈線文、胴部突帯を特徴とする[3]。森下(2000)が讃岐地域で設定した深鉢⑤類も同類であろう。

刻凸長頸型には造形に精粗の2種類がある。服部型との類似度が高い、口縁と胴部の突帯間に文様をもつもの(第Ⅳ①-5図1～7・9～12)は、器壁が薄く、口唇の細い面取りや突帯の丁寧な接合など細部の造形が入念であり、口縁・胴部突帯への刻みも細く浅いがバラツキが小さく規格的である。文様は2本1組の縦線が一定間隔をおいて施文されるが、縦線にはヘラ描き沈線のほか幅3～6mmの板小口を用いたものがある。備讃瀬戸地域の服部型は造形が粗略で、文様も乱雑なヘラ描き沈線を継ぎ足すように施文しており、刻凸長頸型の服部型に類するものとは製作の意識に大きな違いがある。一方で、刻凸長頸型には相対的に厚手で細部の造形が粗略なもの(第Ⅳ①-4図20・25)もあり、刻凸喇叭型以来の製作伝統が服部型の影響を受けるなかで製作意識に精粗2つの方向性が現れたといえる。また刻目突帯のうち擬2連突帯から生じた2連突帯(後述)は、器形の全体が分かる資料を欠くが本来刻凸長頸型にともなうものと考えられる。刻凸長頸型においては、下位突帯で胴界線・胴突帯をもたないもの、口頸部に文様をもつもの、2連突帯をもつものがそれぞれ分類単位として独立する可能性が高く、資料の増加を待ってのさらなる検討が必要である。刻凸長頸型には141例があり、上ノ村遺跡、八田神母谷遺跡、仁井田遺跡の3点以外はすべて居徳遺跡から出土した。

(4) 居徳型

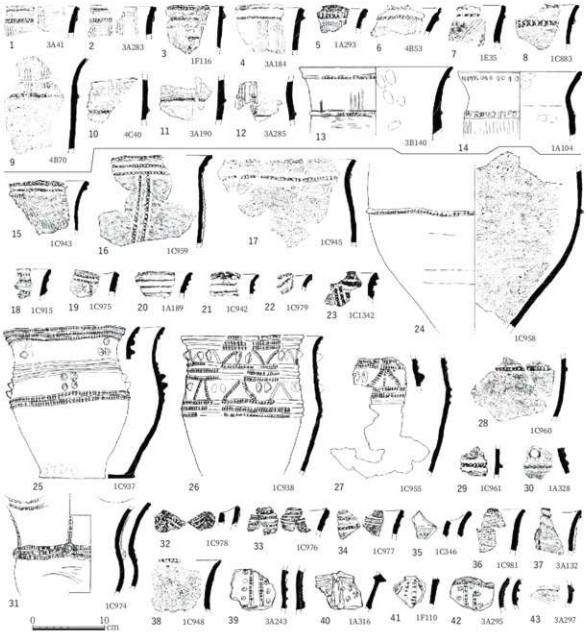
居徳型については設定済みであるが(宮里 2017・18)、刻目突帯文土器からの連続性を踏まえ、あらためて内容を整理する。居徳型(第Ⅳ①-5図15～43)に該当する資料は、現時点で居徳遺跡出土の100点余りに限られる。居徳遺跡における居徳型はまず胎土に特徴があり、特殊胎土と報告された5mm大の細長い砂岩を一定量ふくむ1群の土器として他と区別される。特徴的な胎土により弁別された土器はいずれも深鉢で、細い突帯による装飾を特徴とする。突帯には細く浅い刻みが加えられ、大きくは刻目突帯文土器の一種といえる。居徳型は個体差が大きいが、大別すると、縦横の突帯のみのものと、突帯に浮文を加えるものに分かれる。刻凸長頸型からの系譜と、南四国型土器への連続を考えれば、突帯のみが古く(古相)、浮文の添加が新しい(新相)といえる。古相は2連突帯(第Ⅳ①-5図15)を刻凸長頸型から継承するが、2連突帯が口縁から離れたり縦の突帯が加わるなど新しい表現が現れる(第Ⅳ①-5図16)。口唇は丸く収めるものが多く、口縁には刻凸長頸型にはない屈折・屈曲傾向もみられる(第Ⅳ①-5図16・17)。居徳型の新相では、刻凸長頸型に似た器形の口縁部・口頸部中位・胴部に2条ないし3条の突帯がめぐる(第Ⅳ①-5図25～27)。細い突帯の断面は鋭い三角形で、刻みのないものもある。突帯列間には縦・斜めの刻目突帯や指で摘まみ先端を尖らせた浮文が加えられる。突帯に



第Ⅳ①－4図　刻凸喇叭型・刻凸長頸型深鉢と関連資料

（ⅣD層：1～10、ⅣB層：11～19・21～25・33～35）（刻凸喇叭型：1・6・7・11・12・29～32、刻凸長頸型：20・23～25）
〔擬2連凸帯：2～5・13・14・29～31、端凸：8・9、2連突帯：15～18・21・22・26・27、垂下突帯：1・7・32、下位凸帯：10・19・20・25・28、脚部型：20・23・24〕

は山形の配列（第Ⅳ①－5図26・27）や2条の縦配列（第Ⅳ①－5図39～42）があり、合間に浮文が添加される。浮文のみの場合もある（第Ⅳ①－5図25）。新相の器形には屈曲傾向（第Ⅳ①－5図25・31）と屈折傾向

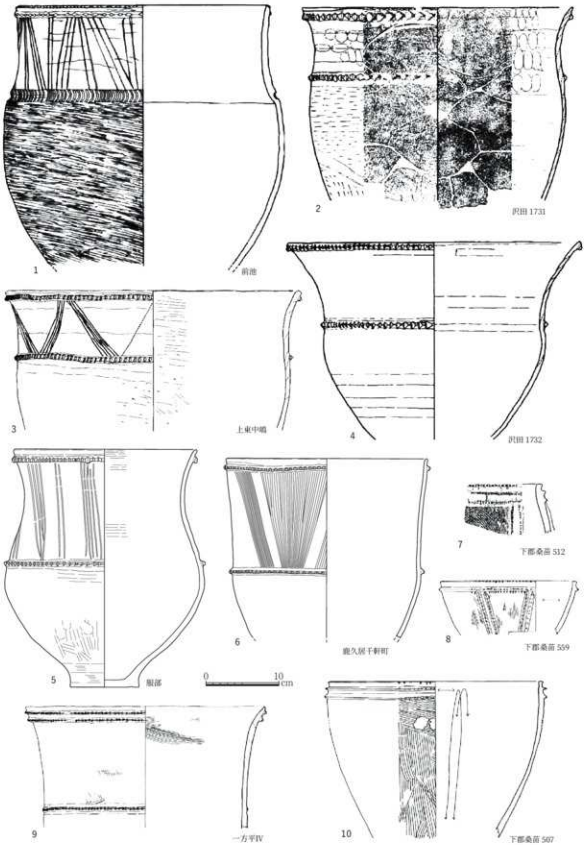


第Ⅳ①－5図　刻凸長頸型・居徳型深鉢
〔刻凸長頸型(服部型)：1～14、居徳型：15～43〕

(第Ⅳ①-5図26・27)があり、また波状口縁・平口縁の別など、古相もふくめて器形は定型化していない。突帯や集線が弧状に配されるもの(第Ⅳ①-5図32～34)や木葉文(第Ⅳ①-5図38)もあり、細部の表現も定型化していない。

(5) 刻目突帯の種類と変遷について

刻目突帯文土器の3つの型式と居徳型の刻目突帯は多系統で多様に展開する。各地の刻目突帯文土器は地域性を持ちながらも突帯の変化には共通性があり、太く厚い突帯に大きく深い刻みを加えるものから、細く薄い突帯に小さく浅い刻みを加えるものに変化し、あわせて突帯の位置も下位から口唇に接する位置に移動する。南四国の突帯もこれに準じた変化をみせるが、刻凸喇叭型以降の突帯は多様化が顕著であり、また居徳型をへて弥生中期の地域甕につながることから、特別の注意をもって突帯の変化を整理する必要がある。擬2連突帯、2連突帯、端接突帯、垂下突帯、下位突帯など各種の刻目突帯の内容を整理し、前述の型式分類と対照しながら系統と変遷を示す。



第Ⅳ①－6図　刻目突帯文土器関連資料

出現期にあたる刻凸短頸型の突帯は、幅広く厚みがあって断面が隅丸台形に近く、大きく深い刻みが加えられる。刻目の形態はD・V・O形など様々であるが、特徴的なのはC形で、半裁竹管状の、先端が2叉に分かれた刎込みの浅い工具を押し引きして施文される。倉岡型の刺突によるC形とは施

文方法が異なる。備讃瀬戸北岸域の前池式に通じる刻目である。刻凸短頸型から変化した刻凸喇叭型では、細く面取りした薄手の口唇部に小さな刻みを加え、口唇部からやや下がった位置に細く低い突帯をめぐらし、浅く小さな刻みを加える口縁形態が通有のものとなる。これら一般的な突帯とは別に、各型式に跨がって変化するものに「端接突帯」「垂下突帯」「擬2連突帯・2連突帯」「下位突帯」がある。

端接突帯(第Ⅳ①-4図8・9)は、突帯が口縁端部に接し口唇部と突帯上面が一体となって整形されるものである。時期とともに突帯の位置が上がる刻目突帯文土器一般の傾向に応じたものといえる。刻凸喇叭型にみられ、備讃瀬戸北岸域の沢田式に同調したとみられるが、刻凸喇叭型341点のうちの41点にとどまり主体とはならない。

垂下突帯(第Ⅳ①-4図1・7・12)は、端接突帯と同様に口縁端部に接した突帯が口唇部と一体となって整形されたものであるが、口唇部から突帯先端までが長く、突帯の断面が長三角形となる。丹治康明(2000)や中村健二(2000)が播磨地域の刻目突帯新相と位置づけた特徴に準じるもので、下位突帯の形成要因と評価された。刻凸喇叭型の6例にとどまり全体に占める割合は低い。

擬2連突帯は、刻目突帯ではありふれたものであるが、南四国においては2連突帯に変化し居徳型に取り込まれ、南四国型弥生土器につながる一連の変化の基点となる点で重要である。擬2連突帯は、土器に正対したとき外反する口唇刻目が刻目突帯と同様の装飾効果をもち、口縁突帯とともに見かけの上で2連突帯となるものを指す。刻目突帯文土器のうち口唇に刻目をもち口縁が外反するものの多くが擬2連突帯に該当する。擬2連突帯には刻目突帯文土器721点の内の182点があり、型式別では短頸型が48点、喇叭型が132点、長頸型が2点となる。口縁の外反度がつよい喇叭型に類例が多い。擬2連突帯の特徴を詳しくみると、口縁の外反によって結果的に口唇の刻目が突帯にみえるものと、口縁端部を外方に曲げたり(第Ⅳ①-4図4・13・14)、刻みを口唇部の外端に加えたりして(第Ⅳ①-4図2・3・5)、意図的に2連突帯の効果を作出したものがある。前者を擬2連突帯a(114点)、後者を擬2連突帯b(68点)とすると、擬2連突帯aは短頸型43・喇叭型69、擬2連突帯bは短頸型5・喇叭型63となり、短頸型から喇叭型にいたって2連の意識が高まったと分かる。

2連突帯(第Ⅳ①-4図15~18・21・22・26・27)は口縁端部に貼付けによる2条の刻目突帯をめぐらしたものである。擬2連突帯の口唇刻目を貼付け突帯に置き換えることで成立した。造形上は端接突帯に口縁突帯が加わったものでもあり、端接突帯が2連突帯の形成要因になったともいえる。2連突帯は器形全体を窺える資料に乏しいが、口縁の外反程度が相対的に小さいため2連突帯の41点は刻凸長頸型にともなうものと推定する。

擬2連突帯から2連突帯にいたる過程は、まず刻凸短頸型にともなって擬2連突帯aが発生し、刻凸喇叭型になって2連の意識が高まった擬2連突帯bが現れ、刻凸長頸型にいたって擬2連突帯と端接突帯が合わさり2連突帯として編成された、と整理できる。

下位突帯(第Ⅳ①-4図10・19・20・25・28、第Ⅳ①-5図1~8・13)は最後段階に現れる突帯であり、刻凸長頸型を定義づける特徴でもある。下位突帯は水走型(岡田 2016)、播磨系C類(中村健 2000)、三谷1~3類(勝浦 2000)に同調した突帯形態であり、口縁の下方に位置する細く薄い突帯に浅く小さな刻みが加えられたものである。播磨地域においては垂下突帯(A類)が下位突帯(C類)に変化したと説明された(中村健 2000)。刻凸長頸型の下位突帯は、播磨に同調した備讃瀬戸北岸域の服部型(第Ⅳ①-6図5・6)の影響を受け現れたと考えられる。

2連ないし3連の突帯をめぐらす居徳型は、刻凸長頸型の2連突帯と下位突帯の特徴を再構成して口縁端部から下がった位置に2連突帯を加えたものであり、段階的に繁縟さを増していった。

3　型式組列と系統

(1) 型式組列

上に設定した深鉢諸型式は、上ノ村U型に始まって、上ノ村T型、先倉岡型、倉岡型、刻凸短頸型、刻凸喇叭型、刻凸長頸型、居徳型へと推移した。以下に型式変化の過程を示す(第Ⅳ①-7図)。

上ノ村U型から上ノ村T型へ

南四国の凹線文系土器は有岡K式(岡本 1968)として示されたことがあるが、類例に乏しく内容が不詳であり、筆者が列挙した遺跡についても再検討の余地がある(宮里 2020)。在地での継承性は不明であるが、上ノ村U型の2条線をもつ受口状口縁は岩田第3類(潮見 1960)や御領式(水ノ江 1997、宮地 2008)、滋賀里Ⅰ式(岡田 2008b)などの時期相を継いで現れたものと考えられる。上ノ村U型は、受口状口縁の2条線がナデ凹帯となり、板状口縁下端の顎が素凸帯に転化し、内面の折れは痕跡化して凹線もしくは段となり、また胴部界線が2条から1条となって上ノ村T型へ変化した。

上ノ村T型から先倉岡型へ

上ノ村T型を特徴づける口縁素凸帯や胴部界線などの要素が次第に痕跡化し、器面調整は巻貝条痕から2枚貝条痕へと移行して、上ノ村T型は細部の特徴が弱化した退化型に変化する。上ノ村T型の略化した長い口頸部が縮約され口縁部となり、口縁部が外折する器形へ転化すると先倉岡型が成立する。上ノ村T型ですでに痕跡化していた頸胴の区分は、口縁・胴境界の微弱なナデ凹帯や胴部(2枚貝条痕)と口縁部(ナデ)で仕上げの調整を違えることで継持・継承された。

先倉岡型から倉岡型へ

先倉岡型からナデ凹帯や仕上げ調整による口縁・胴部の区分が失われ、外面全体を2枚貝条痕で調整する仕上げとなり、胴部最大径が膨らんだ器形へと変化することで倉岡型が成立した。倉岡型の口縁部の折れは、先倉岡型を継承する屈折タイプに始まり、弛緩した屈曲タイプに変化する。口縁折れの変化にともなって口唇刻目の割合も増加する。倉岡型の底部には尖り気味の丸底と平底があり、時とともに平底へ統一されたと考えられる。

刻目突帯文土器の成立と展開

口縁屈曲タイプの倉岡型の器形を継承する刻凸短頸型は、倉岡型に突帯が加わることで成立した。

第Ⅳ①-7図　型式組列と接点

刻凸短頸型では口頸部と胴部を区分する意識が再び現れ、形態上明確な境界のない胴部と口頸部を、調整の違いにより2枚目条痕の胴部とナデ仕上げの口頸部として区分した。

刻凸短頸型の口頸部がのび、外反の程度が増し、胴境界に界線を加えることで刻凸喇叭型が成立した。刻凸喇叭型は、倉岡型を継承し厚手傾向にあった刻凸短頸型に対し、薄手傾向が顕著で、添加される刻目突帯も細かく丁寧に作出される。短頸型と喇叭型の特徴にはやや開きがあり、いずれ中間的な型式が見出される可能性がある。

刻凸長頸型は、口頸部の開きが小さく胴界線を欠く型式として刻凸喇叭型を継ぐ。器形・下位突帯・文様・胴部突帯の特徴により備讃瀬戸地域の服部型の影響下で編成された型式である。精粗の違いや文様の有無、2連突帯の添加など在来要素、外来要素の発現差異によるさらなる細分が予見される。

居徳型の成立

居徳型は2連突帯など刻凸長頸型を継ぐが大きく変容を遂げ成立した。砂岩粒を特徴とする胎土と焼成雰囲気が土器生産の大きな変化を窺わせる。古相では器形の統一感が弱く、新相では装飾の多様化が顕著であり、定型化せぬまま構成を変転させた。居徳型につづく南四国型土器も、祖型として示されたものは多様で統一されておらず(出原 1990・2003、柴田 2000)、居徳型の延長で弥生中期の地域甕である南四国型が成立したとみられる。

なお居徳遺跡出土土器に対して実施された放射性炭素年代測定のうち、本稿の型式との対照できるものは以下の通りである(高知県文化財団埋蔵文化財センター編 2004)。

倉岡型(4C417、上半部を欠く):2990 ± 30 BP[1310-1180 cal BC(67%)]

刻凸短頸型(4D336、第Ⅳ①-3図16):2810 ± 40 BP[1050-880 cal BC(86%)]

刻凸喇叭型(1C26、擬2連突帯b、ⅣD層):2630 ± 60 BP[910-750 cal BC(78%)]

居徳型(1C958、古相、ⅣB層、第Ⅳ①-5図24):2530 ± 30 BP[720-530 cal BC(70%)]

(2) 他地域との接点

上の型式と組列を他地域と比較し、系統など位置づけを検討する(第Ⅳ①-7図)。

上ノ村U型は、受口状口縁と巻貝施文の2条線に凹線文系土器との繋がりがみられるが、滋賀里Ⅰ式・岩田第3類などの長く反り返る口縁と比べると直線的で幅も狭くなっており、型式変化が進んだものと評価できる。滋賀里Ⅱ式・岩田第4類・天城式などに対比される型式といえるが、現状では直接的な系譜関係を求めるのが困難である。

上ノ村T型は素凸帯の共通性により大分の上菅生B式(高橋 1980・83)との関連が考慮され、出原(2014)は上ノ村遺跡から及んだ影響を指摘した。近畿の編年に照らせば、滋賀里Ⅱ式に後続する滋賀里Ⅲa式との併行関係が想定され、上ノ村T型と口縁形態が類似する磨研鉢の口縁b・c類(宮里 2016)を併せてみると滋賀里Ⅲa式と上ノ村T型に時期的な接点を見出すことができる。

先倉岡型の、口縁部を胴部よりもやや厚めにつくる特徴や、口縁部と胴部をナデ凹帯や肥厚により区分する特徴は滋賀里Ⅲa式(家根 1981、岡田 2011)に通じる。すると上ノ村T型と先倉岡型の双方が滋賀里Ⅲa式と接点をもつことになり、磨研鉢を併せたさらなる検討が必要となる。

倉岡型は、滋賀里Ⅲa式につづく篠原式(家根 1994、岡田 2011)とこれに併行する谷尻式(平井 1988)、黒川式(宮地 2008)との併行関係が想定されるが、これら型式の時期は深鉢の地域性が顕著となるため直接的な形態の比較が困難となる。倉岡型のうち口縁屈曲タイプには、口頸部にC形刺突文を加えたものがあり谷尻式との接点を示す。また居徳遺跡4C区SK1では倉岡型の口縁屈曲タイプと口縁e1類・g類の磨研鉢(宮里 2016)が共伴しており、篠原式・黒川式の新しい段階と倉岡型の口縁屈曲タイプに接点があることを示す。

刻目突帯文土器は、刻凸短頸型と前池式に器形やC形刻みの共通点があり、刻凸喇叭型と沢田式に

器形の共通性が指摘できる。前池式、沢田式は近畿の鬼塚型、船橋型(岡田 2016)に併行するため(平井 1992)、口酒井型、津島岡大式に相当する型式が不在であると分かる。刻凸長頸型は備讃瀬戸地域の服部型と深い繋がりをもつ。小南(2012)は服部型にあたる土器を沢田式につづくⅢ期刻目突帯文土器と位置づけ、板付Ⅰa式につづく時期に置いている。服部型は播磨の今宿型、丁・柳ヶ瀬型(丹治 2000)の垂下突帯が下位突帯に変化する過程で成立したと考えることができ(中村健 2000)、近畿の長原型・水走型にも連絡する(岡田 2016)。刻凸長頸型は近畿や瀬戸内で遠賀川式土器が登場する前後の時期となる[4]。

居徳型のやや下がった位置にめぐる2連突帯や胴部に斜めの突帯を加える装飾は東九州の下城式(高橋 2000、坪根 2000)と接点をもつ(第Ⅳ①-6図7～10)。下城式甕は弥生前期後半に位置づけられるため居徳型の年代的位置も同様となる。

(3) 層位にみる時期相—居徳遺跡1C区Ⅳ D 層・Ⅳ B 層—

本稿が対象とした資料では時期差を考えるための層位的知見がきわめて乏しく、居徳遺跡1C区におけるⅣ D 層とⅣ B 層の区分が唯一の手掛かりとなる(高知県文化財団埋蔵文化財センター編 2002)。1C区は遺跡南部の埋没丘陵の南斜面にあたる調査区であり、土層観察用の畦を残しながら刻目突帯文土器の包含層を掘削する過程で旧地表面と考えられる不整合面が検出された。不整合面より下部の植物遺体と炭化物を含む層をⅣ D 層、その上層をⅣ B 層とし、土層観察用畦においてはⅢ層の影響を受けた上部層がⅣ A 層として区分された。Ⅳ D 層検出以前の出土資料はほぼⅣ B 層にあたるため、Ⅳ A 層下のⅣ D 層とⅣ B 層の出土遺物を時期差として区分することが可能となった。報告書ではNo.1～148がⅣ D 層出土遺物、No.149～434・472～1310がⅣ B 層出土遺物、No.435～471がⅣ A 層出土遺物として掲載される。

Ⅳ D 層には84点の深鉢(第Ⅳ①-4図1～10)があり、倉岡型22点、刻凸短頸型13点、刻凸喇叭型41点、刻凸長頸型7点で、刻凸喇叭型が多くを占める時間幅となっている。口縁部の特徴をみると擬2連突帯bが12点、垂下突帯2点、端接突帯10点、2連突帯4点、下位突帯3点と、刻凸喇叭型のうちで次型式に繋がる要素が多く、一部に刻凸長頸型の新しい特徴が出始めた時期と分かる。

Ⅳ B 層には276点の深鉢(第Ⅳ①-4図11～19・21～25)があり、内訳は先倉岡型4点、倉岡型54点、刻凸短頸型24点、刻凸喇叭型74点、刻凸長頸型39点、居徳型75点で、刻凸長頸型では服部型に近い有文が20点、2連突帯が10点ある。服部型に近い有文、2連突帯、居徳型は新しい要素である。刻凸喇叭型でも擬2連突帯8点、垂下突帯1点、端接突帯11点、胴部突帯5点と相対的に新しい要素が目立つ。

Ⅳ D 層、Ⅳ B 層出土遺物の対比により、新出の刻凸長頸型が刻凸喇叭型と共存しつつ交代すること、居徳型が後出型式であることが分かる。刻凸喇叭型と刻凸長頸型の共存・交代のより詳細な実態はさらなる検討課題である(cf. 出原 2010)。

またⅣ B 層からは遠賀川式土器262点も出土している。器種には壺105点、甕137点、鉢19点、高坏1点があり、甕の型式には西見当1式が5点、西見当2式が10点ある。また甕には刻目段、直線紋刻目段、直線紋間刻目がそれぞれ確認される(第Ⅳ①-4図33～35)。居徳型と接点をもつ下城式が弥生前期後半の土器型式であり、およそ西見当2式に併行するとすれば、居徳型と西見当2式にも併行関係を認めることができる。居徳遺跡全体では弥生前期後葉の西見当2式が多数を占め、3A区からは東松木式2点(うち1点は最古形態)もあり、1C区Ⅳ B 層の時間幅はほぼ弥生時代前期に相当するものとなる。刻凸長頸型から居徳型にかけての期間に、東松木式、西見当1式、西見当2式が居徳遺跡において共存したのであり、居徳型と西見当2式から遡上すれば、刻凸長頸型と東松木式に接点があった可能性も考慮される。関連する問題については磨研鉢の分析とあわせて再度検討したい。

結び

南四国の縄文晩期深鉢を再検討し、縄文晩期初頭から弥生前期後半にいたる深鉢の型式組列を示した。これにより該期の南四国における年代と系統を整理するための基本枠が整ったと考える。別途用意している磨研鉢の検討を加えることで、一層詳細な時期相の把握が可能となるであろう。時間軸に沿った遺跡分布の変遷が浮かび上がったことも本稿の成果のひとつであり、倉岡型の時期に広範囲に所在した遺跡が刻凸短頸型の時期を経て、刻凸喇叭型の時期には居徳遺跡に一極集中する様相となり、刻凸長頸型の時期にも同様の状況が継続した。また居徳遺跡 1C区Ⅳ B 層にあたる弥生前期に、遠賀川式土器をもつ集団との関わりが次第に深まっていく様相も窺えた。さらに居徳型と東九州の下城式との関わりを示したことで、縄文文化の伝統を長く保持する居徳遺跡の背景がより具体的となり、今後の調査・研究のさらなり指針が得られたと考える。継続して取り組んでいきたい。

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

岡田憲一、柴田昌児、谷若倫郎、出原恵三、中村豊、山崎孝盛、米田克彦

岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、備前市加子浦歴史文化館、

香美市教育委員会、高知県立埋蔵文化財センター、香南市文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館

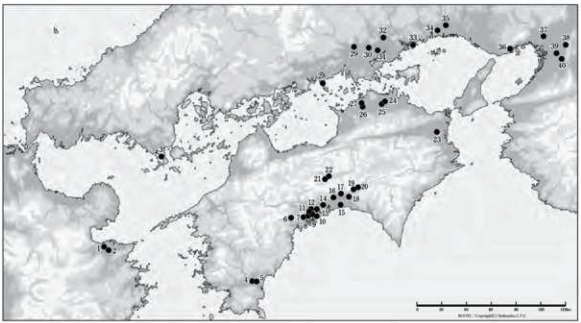
註

(1) 磨研鉢については既に論じているが(宮里 2016)、本稿を前提とした別稿を用意している。

(2) 1,300 点近くの倉岡型が出土している倉岡遺跡がさらに加わる(宮里 2020)。

(3) 鹿久居千軒町の資料は、春成秀爾(1969)が未命名型式として取り上げたものであり、岩見和泰(1992)や平井泰男(2000)は、口縁部と(屈曲部のほとんどみられない)体部に刻目突帯を施して浅く軽い刻目を加え、間延びした頸部を多数の沈線で装飾することを新相の特徴と評価した。小南裕一(2012)は沢田式につづく備讃瀬戸地域のⅢ期刻目突帯文土器として、岡山平野では津島岡大Ⅲ段階、讃岐平野では川津下樋段階・多肥宮尻段階と整理した。また服部型の資料について先行する深鉢との型式学的差異が大きいと評価した。服部遺跡出土の深鉢は、底部を欠く鹿久居千軒町資料よりも遺存状況がよく、該当型式の特徴をより詳しく知ることができる。服部遺跡河道 1 の深鉢は器高 32.6cm、復元口径 25.2cm、復元胴径 27.3cm、平底の底径 9.4cmである。最大径のある胴から長い口頸部がいったん窄まったあとゆるく外反して開く。突帯は丸く収められた口唇部から 1cm下がった位置と胴最大径から 3cm上がった位置にめぐり、D 形ないしⅤ形の刻みが加えられる。口頸部の文様は、2 ～ 8 本が束となった縦方向の集線文が3cmほどの間をおいて等間隔で施文される。口頸部はナデ、胴突帯の下部～最大径付近と内面の上半は横方向のヘラミガキ、胴下部は2枚貝条痕をナデ消して、底部付近はケズリ痕をナデ消して仕上げる。鹿久居千軒町資料は、口頸部の括れが弱く、突帯に加わる刻みは浅いⅤ形やO形で、口頸部の文様は由形に連なる帯状無文部のあいだの縦長台形区画内を多数の沈線でやや乱雑に充填する。他に沢田遺跡や服部遺跡、津島岡大遺跡などの資料をみると口頸部文様はやや粗雑な集線を基調としつつ多様であると分かる。全体に突帯の接合や口唇部調整など造形の細部が雑で沢田式から略化が進んだ印象をあたえる。

(4) 森下(2000)による讃岐地域の編年では服部型に類する刻凸長頸型のあとに擬 2 連突帯に相当する資料がつづく。B2 系譜とされた深鉢は土佐の遠賀川式土器である東松木式との関係が考慮される。今後、南四国と備讃瀬戸南岸域との関係についても検討を進めたい。



第Ⅳ①～8図　遺跡の位置

（1. 下郡桑苗、2. 一方平、3. 岩田、4. 入田、5. 中村貝塚、6. 姫野々上町、7. 西鴨地、8. 北高田、9. 倉岡・林口、10. 上ノ村、11. 居徳、12. 天崎、13. 八田神母谷・奈呂、14. 柳田、15. 田村、16. 栄エ田、17. 新改小山田、18. 林田シタノヂ、19. 美良布、20. 仁井田、21. 八反坪、22. 松ノ木、23. 三谷、24. 林・坊城、25. 多肥宮尻、26. 川津下樋、27. 下川津、28. 高島黒土、29. 服部、30. 津島岡大、31. 百間川沢田、32. 南方前池、33. 鹿久居千軒町、34. 丁・柳ヶ瀬、35. 今宿丁田、36. 大間、37. 口酒井、38. 水走、39. 長原、40. 船橋）

文献

秋山浩三、2007、『弥生大形農耕集落の研究』、青木書店

泉拓良、1986、「縄文と弥生の間に―稲作の起源と時代の画期―」『月刊歴史手帖』第14巻4号、名著出版、45～52頁

泉拓良、1989、「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』、小学館、311～314頁

泉拓良、1990、「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集、奈良大学文学部文化財学科、55～79頁

岩見和泰、1992、「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会、51～94頁

大野薫、1995、「紀泉の突帯文土器」『泉佐野市史研究』1号、泉佐野市史編さん委員会、3～26頁

岡田憲一、2008a、「韓日先史土器編年のための序論―所謂有文・無文土器の転換期を中心に―」『2008 년 第1回招請講演会資料』、蔚山文化財研究院、1～15頁

岡田憲一、2008b、「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション、650～657頁

岡田憲一、2011、「近畿地方縄文晩期土器編年と奈良県下基準資料」『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第11冊、奈良県立橿原考古学研究所、310～335頁

岡田憲一、2014、「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』、第25回中四国縄文研究会徳島大会事務局、149～164頁

岡田憲一、2016、「「凸帯文」と「遠賀川」の連接―奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文集―』、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁

岡本健児、1966、『高知県の考古学』、吉川弘文館

岡本健児、1968、「縄文時代」『高知県史』、高知県、13～166頁

岡本健児、1980、「土佐市倉岡遺跡出土の土器群―『土佐市史』補遺―」『土佐史談』152号、土佐史談会、1～6頁

岡本健児、1983、「土佐考古学の諸問題」『高知の研究第1巻 地質・考古篇』、清文堂、95～125頁

勝浦康守、2000、「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器―三谷遺跡・名東遺跡資料の検討―」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、453～470頁

鎌木義昌・木村幹夫、1956、「各地域の縄文式土器 中国」『日本考古学講座第3巻 縄文文化』、河出書房、188～201頁

鎌木義昌・高橋護、1965、「瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』、河出書房新社、230～249頁

小林行雄、1959、「けいしき　形式・型式」『図解考古学辞典』、東京創元社、296～297頁

小南裕一、2012、「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集』、中村友博先生退任記念事業会、45～76頁
佐原真、1962、「縄文式土器」『船橋Ⅱ』、平安学園考古学クラブ、69～70頁
潮見浩、1960、「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号、広島大学文学部、90～148頁
柴田昌児、2000、「四国西南部における弥生文化の成立過程：西南四国型甕の成立と背景」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、381～399頁
末永雅雄、1944、『宮瀧の遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査方向第15冊、桑名文星社
末永雅雄、1961、『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊、奈良県教育委員会
妹尾裕介、2014、「瀬戸内海東部における凸帯文土器の変遷と展開」『考古学研究』第61巻第1号、考古学研究会、32～51頁
高橋徹、1980、「大分県考古学の諸問題Ⅰ―刻目突帯文土器の出現とその展開について―」『大分県地方史』第98号、大分県地方史研究会、43～52頁
高橋徹、1983、「東九州における凸帯文土器とその周辺」『古文化談叢』第12集、九州古文化研究会、63～75頁
高橋徹、2000、「下域式土器の周辺」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、273～297頁
立岡和人、2007、「『瀬戸タイプ』試論」『第8回関西縄文文化研究会　関西の突帯文土器 発表要旨集』、関西縄文文化研究会、77～87頁
丹治康明、2000、「突帯文期の地域間交流」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、793～803頁
坪井清足、1951、「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報』第1号、日本考古学協会、65～66頁
坪根伸也、2000、「東部九州における弥生前期土器の様相―「口縁下端凸状甕」と下域式甕―」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、255～271頁
出原恵三、1990、「「土佐型甕」の提唱とその意義」『遺跡』第32号、遺跡発行会、89～102頁
出原恵三、2000、「北高田遺跡出土の縄文晩期土器」『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集、92～95頁
出原恵三、2003、「「南四国型」甕の成立と背景」『続文化財学論集』、文化財学論集刊行会、77～86頁
出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相―田村タイプと居徳タイプ―」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間系の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁
出原恵三、2014、「無刻目突帯文土器の成立と展開―上ノ村式土器の提唱とその意義―」『古文化談叢』第72集、九州古文化研究会、1～20頁
外山和夫、1967、「西日本における縄文文化終末の時期」『物質文化』第9号、物質文化研究会、15～23頁
中西靖人、1984、「前期弥生ムラの2つのタイプ」『縄文から弥生へ、帝塚山考古学研究所、121～126頁
中村健二、1990、「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No.144、滋賀県文化財保護協会、1～4頁
中村健二、2000、「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、559～583頁
中村健二、2008a、「近畿地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、107～117頁
中村健二、2008b、「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」『総覧縄文土器』、アムプロモーション、798～805頁
中村大介、2006、「岡山平野の突帯文土器の系統と変遷」『津島岡大遺跡17―第23・24次調査―』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、114～123頁
中村豊、2008、「東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器―徳島地域を中心に―」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、99～106頁
中村豊、2016、「凸帯文土器と遠賀川式土器―東部瀬戸内地域の資料をもとに―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文集―』、豆谷和之さん追悼事業会、23～32頁
濱田竜彦、2008、「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、83～98頁
春成秀爾、1969、「中国・四国」『新版考古学講座第3巻　先史文化』、雄山閣、367～384頁
平井勝、1988、「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集、古代吉備研究会、9～34頁
平井勝、1992、「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究（上）』、山陽新聞社、19～50頁
平井泰男、2000、「中部瀬戸内地方における縄文後期末葉から晩期の土器編年試論」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、499～532頁
松尾信裕、1983、「長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』、大阪市文化財協会、193～200頁

松本安紀彦、2006、「高知平野の縄文時代晩期について―初頭を中心に・高知市鴨部遺跡の発掘調査成果から―」『高知市史研究』第4号、高知市史編さん室、14～25頁
松本安紀彦、2008、「高知県における縄文時代晩期の土器編年―前半を中心に―」『文化財学としての考古学』、泉拓良先生還暦記念事業会、173～190頁
豆谷和之、2000、「大和の凸帯文」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、651～675頁
豆谷和之、2008、「水走遺跡第8次調査におけるCピット貝塚(第28-2層)の土器群」『文化財としての考古学』、泉拓良先生還暦記念事業会、191～204頁
水ノ江和同、1997、「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から刻目突帯文土器の直前まで―」『縄文時代』第8号、縄文時代文化研究会、73～110頁
宮里修、2010、「韓半島青銅器の起源と展開」、社会評論(韓国語)
宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」「海南史学」第54号、高知海南史学会、1～20頁
宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する―高知県における縄文時代研究の現状と課題―」「中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集」、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁
宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」「中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集」、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
宮里修、2019、「東松木式土器の系統と編年的位置について―南四国最古の弥生土器―」「高知考古学研究」第3号、高知考古学研究会、1～28頁
宮里修、2020、「南四国における縄文時代後・晩期遺跡の消長について」「高知考古学研究」第4号、高知考古学研究会、1～17頁
宮地聡一郎、2008、「黒色磨研土器」「総覧縄文土器」、アムプロモーション、790～797頁
森下英治、2000、「讃岐地域の突帯文系土器」「突帯文と展望川」、土器持寄会論文集刊行会、401～430頁
家根祥多、1981、「晩期の土器　近畿地方の土器」「縄文文化の研究第4巻　縄文土器Ⅱ」、雄山閣、142～157頁
家根祥多、1982、「第2節　縄文時代」「長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ」、大阪市文化財協会、142～157頁
家根祥多、1984、「縄文土器から弥生土器へ」「縄文土器から弥生土器へ」、帝塚山考古学研究所、49～78頁
家根祥多、1994、「篠原式の提唱―神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討―」「縄紋晩期前葉－中葉の広域編年」平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果報告書、50～139頁
山内清男、1937、「縄紋土器型式の細別と大別」「先史考古学」第1巻第1号(『先史考古学論文集(2)』、示人社、1997年に所収)
山内清男、1952、「第2トレンチ」「吉胡貝塚」埋蔵文化財発掘調査報告第1、文化財保護委員会、93～124頁
山本悦世、1992、「縄文時代晩期の土器について」「津島岡大遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、148～163頁
若林邦彦、2002、「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」「環瀬戸内海の考古学　上巻」、古代吉備研究会、225～239頁

［報告書］

大分県教育委員会(高橋信武)編、1992、『下郡桑苗遺跡Ⅱ」大分県文化財調査報告書第89輯
大分県教育委員会(高橋信武他)編、1999、『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書(第3分冊)―方平遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡』大分県文化財調査報告書第103輯
岡山県教育委員会(岡田博他)編、1985、『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
岡山県古代吉備文化財センター（大橋雅也他)編、2002、『服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告162
岡山県古代吉備文化財センター（上椿武他)編、2010、『上東中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226
岡山縣高島遺蹟調査委員会、1955、『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』
香北町教育委員会(松本安紀彦他)編、2006、『仁井田遺跡』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
高知県文化財団埋蔵文化財センター編、1994、『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（松村信博他)編、1995、『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（久家隆芳他)編、1998、『八田神母谷遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（江戸秀輝他）編、1999、『八田奈呂遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2000、『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行他）編、2001、『居徳遺跡群Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集（1B・1C・1D区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集（1A・1C・1DN・1F区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2003a、『居徳遺跡群Ⅳ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集（1E・2A・3B・4C区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群Ⅴ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集（4A・4B区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行）編、2004、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集（5A・3A・1C・4D区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2011、『上ノ村遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集
高知市教育委員会（田上浩他）編、2002、『鴨部遺跡』高知市文化財調査報告書第23集
湖西線関係遺跡発掘調査団（田辺昭三）編、1973、『湖西線関係遺跡調査報告書』、真陽社
末永雅雄、1944、『宮瀧の遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査方向第15冊、桑名文星社
末永雅雄、1961、『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊、奈良県教育委員会
坪井清足、1956、『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』、岡山縣高島遺蹟調査委員會
徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（勝浦康守）編、1997、『三谷遺跡』
土佐市教育委員会（池田研）編、2015、『居徳遺跡群』土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
葉山村教育委員会編、1984、『姫野々上町・新土居宇津ヶ藪・永野遺跡』
東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会編、1998、『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告書』、東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会
日生町教育委員会編、1965、『鹿久居島の歴史』日生町文化財資料第2輯、日生町教育委員会
南方前池遺跡発掘調査団（近藤義郎）編、1995、『南方前池遺跡：纒文時代木の実貯蔵穴の発掘』、岡山県山陽町教育委員会
六甲山麓遺跡調査会・伊丹市文化財調査団（浅岡俊夫他）編、2000、『口酒井遺跡：第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要』

［挿図出典］

第Ⅳ①－1～5図：地区・番号のみの表示はすべて居徳遺跡出土資料（高知埋文 2001・2002・2003a・b・2004）。第3・5図では資料を実見の上で一部について断面図の傾きを修正した。
第Ⅳ①－1図：「上ノ村～」は高知埋文（2011）の遺物番号に対応。
第Ⅳ①－4図：「市～」は土佐市教育委員会（2015）の遺物番号に対応。
第Ⅳ①－6図：「前池」は南方前池遺跡発掘調査団（1995）の第18図11。「沢田～」は岡山県教育委員会（1985）の遺物番号に対応。「上東中鵜」は岡山県古代吉備文化財センター（2010）の第15図32。5・6は筆者実測。「一方平」は大分県教育委員会（1999：第3分冊）の第20図3。「下郡桑苗」は大分県教育委員会（1992）の遺物番号に対応。
＊「高知埋文」は高知県文化財団埋蔵文化財センターの略

② 南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年

はじめに

西日本の縄文土器は、後期以降器種組成における精粗の分化が進み、晩期には精製の磨研鉢[1]と粗製の深鉢という組合せが一般化した。うち磨研鉢は、西日本の広い範囲でおよそ同一形態のものが共通してみられることから広域編年の資料としての有用性が認められ(泉 1990)、また壺・甕・高坏を主要器種とする弥生土器に継承されないことから、縄文文化伝統の遺存度をはかる指標ともされた。筆者は旧稿(宮里 2016)で、刻目突帯文土器の出現前後で分断されがちだった縄文晩期の磨研鉢について通時的変遷を把握すべく研究に取り組んだ。その際、磨研鉢の終焉にいたる最後段階を十分に整理することができなかった。筆者は現在、「農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究」(JSPS 科学研究費補助金 20K01075)を進めており、縄文文化伝統の継続性を課題として、まず煮炊具である深鉢の変遷を詳しく検討した(宮里 2022)。ここで縄文晩期深鉢が弥生土器と共存しながら型式変化をつづけ弥生中期の地域甕につながることを明らかにするとともに、深鉢による年代的枠組みを整備した。この成果を踏まえつつ、縄文晩期磨研浅鉢の展開と終焉を改めて詳説し、磨研鉢の体系を明らかとすることが本稿の目的である。研究の背景は旧稿(宮里 2016)の通りであり、以下に分類と編年の詳細を述べる。

1　磨研鉢の分類

旧稿では、口縁形態・胴部形態に基づき縄文晩期磨研鉢の変化階梯を第1～5段階に区分した。本稿では旧稿の成果を土台にさらに4つの段階を加え、第1～9段階の区分により磨研鉢の通時的変遷を示す。

以下にまず部分的に理解を改めた第1～5段階の内容を再整理する。つづけて、第5段階以降に出現した、波状口縁方形浅鉢、内折口頸鉢、浅鉢変容壺、浅鉢系無頸壺、波状口縁鉢、多頸鉢を磨研鉢の細別器種として設定し、それぞれの内容を詳述する。

(1) 口縁・胴部形態による第1～5段階

南四国の縄文晩期磨研鉢は、晩期初頭から刻目突帯文出現期にかけての第1～5段階においては、喇叭形・胴張り形・鈎口ボウル形を主要3器種として展開した。第1～5段階における3器種の割合は、時期によって違いがあるが、総じて喇叭形が7割近くを占め、胴張り形が2割、鈎口ボウル形が1割となる(宮里 2016)。3器種はそれぞれ独自の器形的特徴と変化をみせるが、口縁の特徴を同じくしており、口縁形態が器種間に共通する時期差の基準となる。

旧稿(宮里 2016)と同様に、時期差の基準となる口縁形態をa～g類に分類する(第Ⅳ②-1図)。旧稿では板状の口縁に2条の凹線をめぐらすa類を基点とする展開を示したが、その後の資料観察によりe類の位置づけを再考したため、改めて変化階梯を説明する(第1・5図)。

a類の板状口縁を粘土紐1段の積み上げで作出したのがb類であり、外面の線文は粘土紐接合に伴う凹帯に変わった(b1類)。外面の凹帯は文様化して沈線となり粘土紐積み上げによる肥厚も縮小する(b2類)。b2類はb1類の省略型であるが、粘土紐を斜め外方に積み上げたc類ではb1類の略化が内外面に微弱な凹帯を残す方向に進んだ。a類→b1類→b2類と進んだ変化は、さらにb2類の沈線・肥厚が失われる方向に進みd類へ至る。d類の口縁端部の上方への突出が、口唇内端の玉縁状の肥厚へと変化しf類となる。f類の肥厚が弱まり、片切彫りによる抉り段で痕跡的な玉縁を作出したのがe1

類である。e1 類はf類が痕跡化したものであるが、e1 類の抉抉り段はさｒない略化して沈線となる。e2類はe1 類の外面に１条の線文が加えられたものであり、線文の起源は不明であるがe1 類の派生型と理解しておく。g類はボウル形に通有の口縁形態として磨研鉢の当初から存在したが、f類からe1 類にかけて口縁の造形が縮小･略化される状況下で、主要３器種に共通する口縁形態として定型化した。

口縁形態におけるａ類→b1・b2類→ｄ類→ｆ類→e1 類の変化階梯にもとづき、喇叭形・胴張り形・鉤口ボウル形の磨研鉢を第１～５段階に区分する（第Ⅳ②-５図）。丸胴中心であった胴部形態が面胴（反り胴をふくむ）に変化するのは第４段階であり、また胴部における多段化（抉り段による装飾）と肩部形成（有文の胴部上半）は第５段階の特徴である。

口縁形態がe1 類中心となり、胴部に多段化・肩部形成が起こる第５段階を転換期として、磨研鉢の器種再編が始まる。新たに編成される器種は、波状口縁方形浅鉢、内折口頸鉢、浅鉢変容壺、浅鉢系無頸壺、波状口縁鉢、多頸口縁鉢である。これら器種の内容を詳説し、第５段階につづく第６～９段階を設定する。

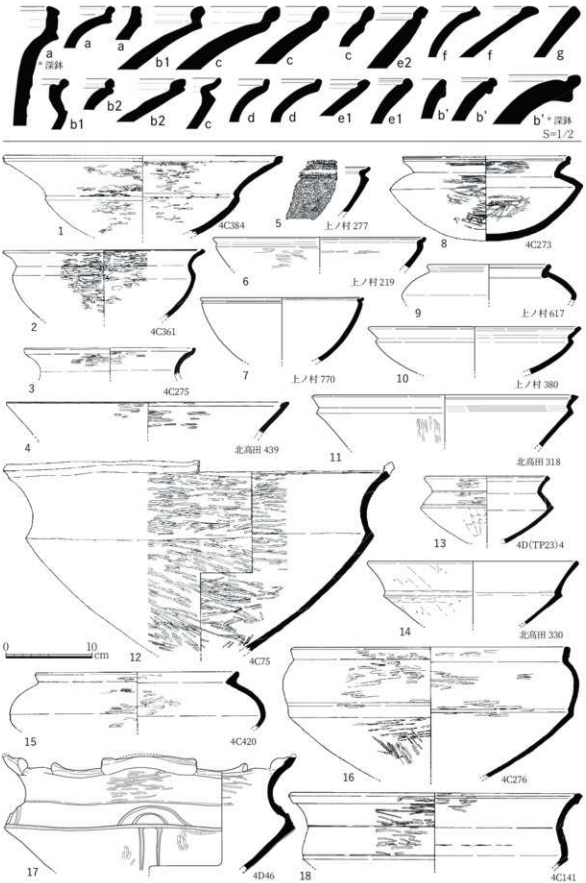
(2) 波状口縁方形浅鉢の分類

波状口縁方形浅鉢は、口縁が波状で上面観が方形を呈する磨研鉢である。記述の便宜のため「波方鉢」と表記する。喇叭形磨研鉢の系譜を引く器種であり、面胴から屈折して上方に立ちあがる口頸部が４頂の波状口縁となる。４頂の波状口縁であれば上面観はおよそ方形となるが、「方形」の印象を強めるのは胴屈折部の波形であるため、波方鉢は胴屈折部が口縁に応じて波状を呈するものとなる。波方鉢は縄文・弥生移行期にあって次第に減少・消滅すると捉えられ、出現期こそ編年の材料として注目されるが終焉までを視野に収めた型式学的検討は未だ十分でない。

波方鉢は、泉拓良（1990）が鍵形口頸部の微細な変化により波方鉢の出現過程と変化を詳説したことで、刻目突帯文土器出現期の様相を把握するための重要資料となった（坂口 1996）。泉は、中国・四国地方以東の凸帯文土器様式を第１・2a・2b様式に区分し、波方鉢については、鍵形口縁の変化にともない波方鉢が形成される段階（第１様式）、典型的な波方鉢の段階（第2a様式）、方形の形状が失われた段階（第2b様式）と３段階に区分した。泉が最後段階として図示した磨研鉢は内折鉢（後述）であり、波方鉢の組列外であるが、上面観を方形とする特徴の喪失が示唆された。また山崎純男は九州の第１～３様式に伴う波方鉢を図示し、説明を欠いているが器形における屈折の略化過程が示唆された（泉・山崎 1989）。森下英治（2000）による讃岐地域の検討では、突帯文期Ⅱｂ・ｃ期に波方鉢（A1 系譜）の口縁内面段が沈線化し胴部屈曲が略化するなどの変化が起こることや、弥生前期に波方鉢の製作が弥生土器の製法に転化することが指摘された。宮地聡一郎（2008）は、刻目凸帯文土器を５分期したうちのⅠｂ期・Ⅱａ期・Ⅱｂ期古について該当する磨研鉢を図示し、変化の過程における口縁部の短小化に言及した。小南裕一（2012）は、精製浅鉢Ｇとした波方鉢を、口頸が長いGa、口頸部がやや短小化したGb、口頸部がさらに短小化し波状単位が増加したGcに分類し、さらにGcを屈曲が明瞭なGc①と屈曲が痕跡化したGc②に細分し、波方鉢の連続した変化を示した。

先行研究の成果を参照すると、さらなる型式学的検討の余地があるが、波方鉢には口頸部の違いにより区分される３種類があると分かる。南四国の波方鉢も同様の傾向があり、口頸部の違いを主とし胴部形態や細部の特徴を加味した3区分が可能である。波方鉢Ａ型･Ｂ型･Ｃ型とし、以下に内容を示す。

波方鉢Ａ型（第Ⅳ②-２図１・２）は、面胴から屈折して立ち上がる口頸部が上方に長く延びるものである。口縁と胴屈折部の湾曲は相対的に小さい。胴屈折部の湾曲をのぞけば喇叭形磨研鉢との類似度が高く、波方鉢が喇叭形磨研鉢からの派生型であることを窺わせる。類例は少なく居徳遺跡の２点にとどまる。口縁形態はｇ類（第Ⅳ②-２図１）と抉り段のe1 類（第Ⅳ②-２図２）であり、後者は口唇に刻みがあり、外面には口縁に沿った波状の刻目突帯が加わる。



第Ⅳ②－1図　磨研鉢(1～5段階)と口縁分類
(喇叭形:1～4・12・14・17・18、胴張り形:8・9・13・15・16、鉢口ﾛｳﾙ形:5～7・10・11)

波方鉢B型(第Ⅳ②-2図3・4)は、面胴から屈折して立ち上がる口頸部が外方に短く延びるものである。口縁と胴屈折部の湾曲は大きい。類例は9点で居徳遺跡に8点、上ノ村遺跡に1点がある。口縁部はe1類(第Ⅳ②-2図4)とg類が多く、f類(第Ⅳ②-2図3)も肥厚が弱くむしろ抉り段のe1類に近い。波頂の口唇部に刺突による一対の珠文(第Ⅳ②-2図3)をもつものが2点ある。

波方鉢C型(第Ⅳ②-2図5~7)は、胴が膨らみをもった丸胴に変わり、痕跡化した胴屈折部が段や凹帯となったものである。口頸部は僅かに外折するか(第Ⅳ②-2図5・7)、丸胴の屈曲に沿って上方に延びる(第Ⅳ②-2図6)。波状口縁鉢(後述)への連続を考えれば、上方に延びる後者が新相と考えられる。類例は24点で居徳遺跡に23点、上ノ村遺跡に1点がある。口縁部はe1類が主体で少量のg類が加わる。e1類は抉り段(第Ⅳ②-2図5)に加え、沈線(第Ⅳ②-2図6・7)が半数程度を占める。胴屈折部の内面に沈線がめぐるもの(第Ⅳ②-2図6・7)もあり、口縁・胴部ともに造形上の特徴が沈線に置き換わって文様化している。また波頂の口唇部に一対の珠文をもつもの(第Ⅳ②-2図5)が4点ある。

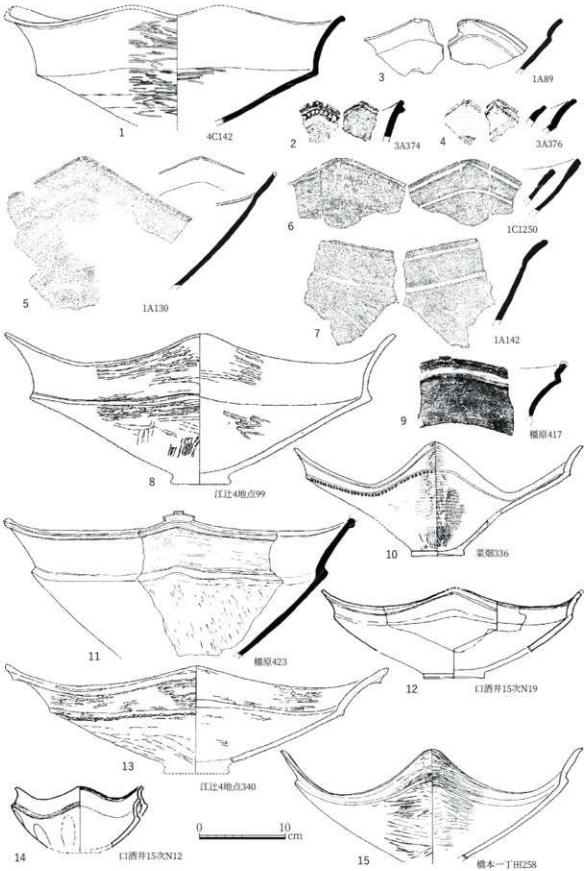
波方鉢の3型式は、形態的特徴が略化する方向で変化する。器形は、口頸部が面胴から屈折して長く上方に延びるA型から、口頸部が外方に短く延びるB型に変化し、丸胴化の進行とともに口頸部の屈折が痕跡化するC型に連なる。口縁部はA型からB型にかけては抉り段のe1類が中心となり、C型になるとe1類の抉り段は沈線に変わり、あわせて胴部内面の屈曲も文様化し沈線表現となる。

波方鉢は西日本の広い範囲で確認されるが、両極にあたる近畿と九州では口縁や胴部の形状に違いがある。九州は器形においては南四国と同様の分類が可能であり、A型(第Ⅳ②-2図8)、B型(第Ⅳ②-2図10・13)、C型(第Ⅳ②-2図15)に類する資料が確認できる。ただし口縁形態はg類相当が大部分であり、波方鉢C型の沈線文様も認められない。B型の胴屈折部に刻みを加えることも九州の特徴とみられる。一方の近畿は、泉(1990)が鬼塚遺跡、櫃原遺跡、口酒井遺跡の資料で示したように、鍵形口縁をもつ波方鉢からの連続的に変化する。九州や南四国との違いは胴部形態にあり、近畿の波方鉢は一貫して丸胴気味で深い傾向にある。口縁部はg類を主体とする。口頸部の形態にしたがってA型(第Ⅳ②-2図11)、B型(第Ⅳ②-2図12)、C型(第Ⅳ②-2図14)に類する資料を示すこともできるが、南四国とは特徴を異にする。南四国の波方鉢は大きくは九州の系統にあるが、口縁e1類の卓越に南四国の地域色があり、波方鉢C型においては南四国独自の地域型式となっている。香川県林・坊城遺跡(香川県埋蔵文化財調査センター編 1993)には波方鉢C型の類品(SR1流路A下層)があり、詳細は今後の検討課題であるが、刻目突帯文土器(服部型)と同様に備讃瀬戸地域と南四国の親縁性を示している。

(3) 内折口頸鉢の分類

内折口縁鉢は、逆く字形口頸部浅鉢(泉 1990)と呼ばれる、面胴から屈折する短い口頸部が内側につよく折れる器形の磨研鉢である。ひろく共有された名称であるが、本稿ではより簡素に内折口頸鉢と名付け、さらに記述の便宜のために「内折鉢」と表記する。南四国の内折鉢は居徳遺跡(第Ⅳ②-3図12)や庭ヶ渕遺跡、倉岡遺跡などに極少数があるのみで詳細な分析に堪えないが、西日本晩期磨研鉢の重要器種であるため内容を整理しておく。

内折鉢は刻目突帯文土器にともなう磨研鉢の代表的なもので、泉(1986・90)は、北部九州の山ノ寺式で磨研鉢の外反口縁部の縮小により出現した器種と評価し、近畿の口酒井式を設定する際にも基準資料とした。泉(1990)は内折鉢を2つの形態に区分し、A種を口縁外側が肥厚し、口縁下・口縁内面・胴屈折部に沈線を持つもの、B種を口頸部が長く沈線をもたないものとした。内折鉢の2分類はひろく共有され、岡田憲一(2011)は近畿の資料を対象に、内折鉢を凸帯文2期の基準資料として、2a期には口頸部が短く屈折して肩部と口縁部上端に沈線がめぐり、2b期には口縁部が大きく延びたものに変わると区分した。小南(2012)は瀬戸内の資料を対象に、浅鉢Fとした内折鉢を2分類し、Faは口縁端部が強く外反し沈線をもつもの、Fbは口縁が直立気味で沈線をもたないものとした。九州の内折鉢は、山崎純男(1980)が、底部を欠く場合に高坏との区別が困難と指摘したように、口頸部の立



第Ⅳ②－２図　波状口縁方形浅鉢

（鉤状口縁：3・9、波方鉢A：1・2・8・11、波方鉢B：3・4・10・12・13、波方鉢C：5～7・14・15）

ち上がりが内傾から上方へと変化し高坏に近づくが、瀬戸内や近畿のようには口縁が伸長しない。宮地(2007)が区分した、口頸部の端部のみを外反肥厚させるものと、口頸部全体を外反させるものの違いは内傾段階の内折鉢を細分したものである。

内折鉢の分類においては口頸部の長短と沈線の有無が基準とされてきたが、本稿では波方鉢や後続器種との関係を考慮し、口頸部立ち上がりの向きと胴部形態によりA型・B型の2型式に分類する。

内折鉢A型(第Ⅳ②-3図1～3・12)は、面胴から屈折する短い口頸部が内方に立ち上がるものである。宮地(2007)の第1段階(第Ⅳ②-3図1)・第2段階(第Ⅳ②-3図2)をふくみ細分の余地がある。

内折鉢B型(第Ⅳ②-3図4～6)は、丸胴から口頸部が上方に立ちあがるものである。丸胴化は瀬戸内・近畿に顕著であり、九州の資料は主に立ち上がりの方向により区分される。口頸部が著しく長いもの(第Ⅳ②-3図9)は変容壺(後述)に含めたが、内折鉢B型と変容壺の関係は深く、両者の境界は曖昧である。波状口縁の採用(第Ⅳ②-3図6)は後続する波口鉢との併行関係で問題となる。既往の研究で重視された沈線の省略は口縁部の現象であり、内折鉢B型の胴屈折部には沈線あるいは段が認められる。

宮地(2007)は内折鉢の起源を、口縁内面の沈線の欠如や器種組成の違いから、九州に求めている。口縁内沈線の有無に差異をもちつつ、器形の類似度が高い磨研鉢が九州を基点に近畿まで一斉に拡散し共有された状況となる。すると南四国における内折鉢の欠如が大きな意味をもち、変容壺と無頸壺(後述)を併せた事象の理解が必要となる。

(4) 浅鉢変容壺の分類

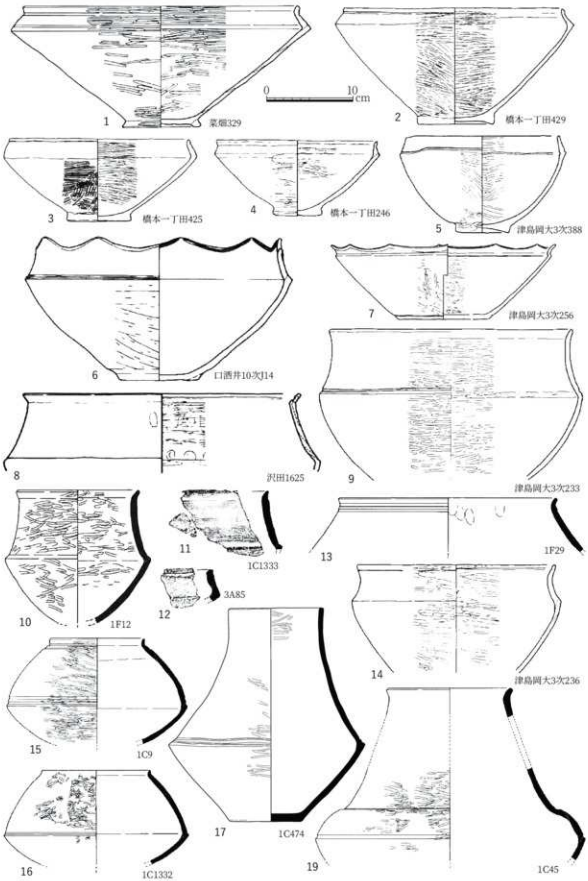
浅鉢変容壺は、藤尾慎一郎(1991)が縄文系壺形土器として問題化した「浅鉢変容型」の壺である。内折鉢の口頸部が伸び壺の頸部に転化したことで、内容物がこぼれにくい締まった頸部と内部の容量が確保される丸い胴部をもつ壺に変容した器種と評価された。変容壺は、備讃瀬戸北岸域における沢田式(平井 1988)では浅鉢型D類とされ、内折鉢に短い外反口縁が加わった器形を特徴とし、口縁内面の段(第Ⅳ②-3図8)の有無が細分の基準とされた。藤尾(1991)は、変容壺の口縁内面の段を瀬戸内の土器製作伝統と評価し、遠賀川式の壺へ継承される要素と考えた。山本悦世(1992)が示した津島岡大資料では変容壺(Ⅰ Aa類)と内折鉢B型(Ⅲ Ba類)に相当する資料が同時期となり、内折鉢がA型からB型に変化する過程で壺の影響を受けた変容壺が派生したと理解することができる。

南四国の変容壺(第Ⅳ②-3図10・11・13・17)は居徳遺跡を中心に上ノ村遺跡、栄エ田遺跡などで36点が確認される。短く外反する口縁はg類にあたる形態であり、外面屈折部に1～2条の凹線(第Ⅳ②-3図13)をめぐらすものが少数ある。口縁がe1類である栄エ田遺跡資料には口縁内面に沈線がめぐるが、いずれの資料にも瀬戸内の特徴とされた内面の段は認められる違いがある。頸部付け根については段(第Ⅳ②-3図10・11)をなすものが多く、一部は沈線をめぐらす。頸が長く伸びて壺との類似度が高まったもの(第Ⅳ②-3図17)があり、変容壺の壺化が進んだ新相にあたると考えられる。

(5) 浅鉢系無頸壺の分類

浅鉢系無頸壺(第Ⅳ②-3図15・16)は、胴張り形磨研鉢の後継となる南四国独自の器種として筆者が設定したものであるが[1](宮里 2018)[(2)]、器種の成立には変容壺と同じ背景がある。記述の便宜のため「無頸壺」と表記する。居徳遺跡からのみ出土し、32点がある。丸胴から屈折し内傾して立ち上がる胴部上半は張りをもち、窄まった先には上方に短く屈折する口縁部がつく。張りのある胴部上半は、変曲部凹線の類似により壺の肩部(第Ⅳ②-3図19)が移植され形成されたと考えられる。磨研鉢の系譜上にあって変容壺と同様のプロセスにより生成した器種であり、胴張り形との直接的な関係を示す資料が乏しいため、変容壺の地域的変異と考えるべきかもしれない。

口縁下端と胴屈折部の造形・文様に違いがあり、口縁部には1～2条の凹線を持つものと持たないもの、胴屈折部には1～2条の凹線を持つものと段をなすものの違いがある。層位で時期差が確認で



第Ⅳ②－3図　内折鉢・変容壺・浅鉢系無頸壺ほか関連資料
(内折鉢A：1～3・12、内折鉢B：4～6、変容壺：8～11・13・14・17、浅鉢系無頸壺：15・16)

きる居徳遺跡1C区では、下層(ⅣD層)に凹線があり(第Ⅳ②-3図15)、上層(ⅣB層)は段をなすため(第Ⅳ②-3図16)、前者を無頸壺の古相、後者を新相と区分できる。

(6) 波状口縁鉢の特徴

波状口縁鉢は、南四国では全形が分かる資料に乏しいが、口酒井遺跡(第Ⅳ②-4図11)や三谷遺跡(第Ⅳ②-4図12)、居徳遺跡の類品(第Ⅳ②-4図10)を参考にすると、器形は平底のボウル形で口縁が主に4頂の波形となり、口縁内面に波状の湾曲に沿った複数条の重弧線が端部を連接させながらめぐるものとなる。記述の便宜のため「波口鉢」と表記する。波口鉢の胎土はチャートの粗粒を多く含み、器面調整はミガキであるが仕上げが粗く、全体に粗製である。泉(1990)が「口縁内面に2条の沈線をもつもの」として自身の刻目突帯文土器Ⅱb期新に位置づけ、岡田(2011)が「皿形で口縁部内面に2条ないし1条の沈線をほどこす」ものとして自身の凸帯文3b期に位置づけるなど、各地で存在が認識されてきた磨研鉢である。南四国の類例は29点で、八田神母谷遺跡に1点ある他はいずれも居徳遺跡の出土品である。

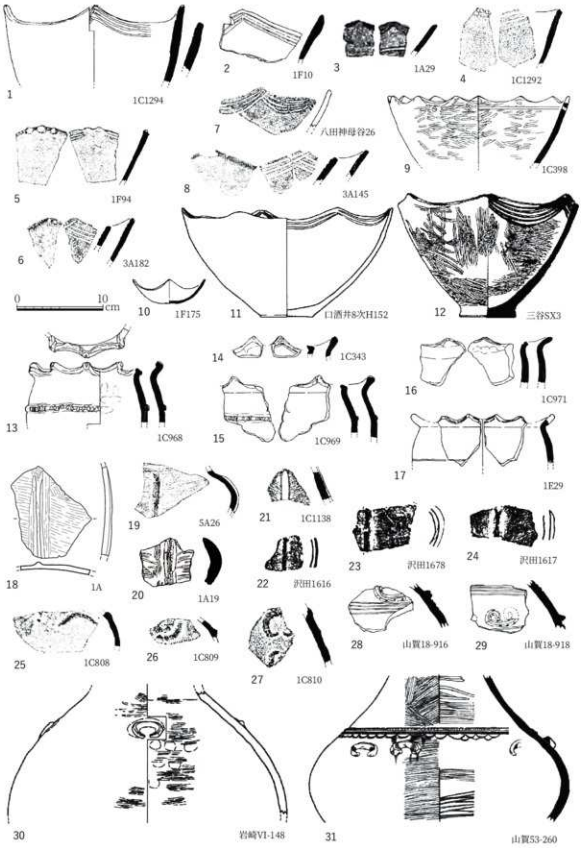
波口鉢は幾つかの特徴により波方鉢から変化したものと考えられる。器形は三谷遺跡の資料(第Ⅳ②-4図12)に近い、腰の張りが弱いボウル形に復元できるが、口縁には僅かな外反(第Ⅳ②-4図4)や外側の肥厚(第Ⅳ②-4図2)があり、波方鉢C型(第Ⅳ②-2図5~7)の痕跡と認められる。また、口唇波頂部には一対の珠文(第Ⅳ②-4図6)や刺突文(第Ⅳ②-4図1)、ユビオサエによる1~3個の刻込み(第Ⅳ②-4図5・7)があり、波方鉢の口唇珠文が継承され、粗略化が進んだものと考えられる。すると口縁内面の重弧文は、波方鉢の口縁および胴部内面の沈線が、胴屈折部の消滅にともない、口縁内面の線文として編成されたものと理解できる。胴部内面沈線が名残として残るものもあるが(第Ⅳ②-4図3)直線化している。南四国の波口鉢の口縁内面重弧文は2条から4条までがあるが、波方鉢C型の口縁・胴部沈線に相当する2条が当初のもので、多条化が進んだと考えられる。南四国の波口鉢は4頂であるが、三谷遺跡の波口鉢は6頂に復元され、内面重弧文も5条である。八田神母谷遺跡の資料(第Ⅳ②-4図7)は6頂の可能性があり内面重弧文も3条であるから、波状口縁の多頂化と内面重弧文の多条化を波口鉢の変化の方向と考えることができる。備讃瀬戸地域や近畿では鈎口ボウル形(第Ⅳ②-3図7)や内折鉢B型(第Ⅳ②-3図6)など他器種でも多頂化現象が認められる。鈎口ボウル形の例は12頂で口縁はe1類相当で、内折鉢B型の例は9頂で口縁内面に波口鉢と同様の2条の重弧線がめぐる。波状口縁の内折鉢B型(第Ⅳ②-3図6)は波口鉢の影響を受けたものと考えられ内折鉢B型の下限を考慮する資料となる。

(7) 多頂口縁鉢の特徴

多頂口縁鉢(第Ⅳ②-4図13~17)は、全形が窺える資料を欠くが、樽形の器形が想定され、強く屈折し外反する口縁部は小突起が連なる波状を呈し、残りの良い資料(第Ⅳ②-4図13)を参考にすると波頂は10頂以上となる。記述の便宜のため「多頂鉢」と表記する。多頂鉢の口縁端部は内外に肥厚し、とくに内側の肥厚がつよい。幅のある口唇部には浅い沈線が加えられる。波頂部口唇の刺突と口縁内面をめぐる2条の重弧文(第Ⅳ②-4図16・17)は波口鉢と関連するもので、多頂鉢が波口鉢の後継であることを示す。一方で胴部にめぐる突帯(第Ⅳ②-4図13・15)は遠賀川式甕と同様の造形である。チャート粒を含む胎土、明るい発色の桃成、器面のハケメ調整は弥生土器の製法であり、土器の製作環境に大きな変化があったことを示す。出土事例は居徳遺跡に限られ10点がある。

(8) その他

その他の関連資料として、縦隆帯とC字突帯を取り上げる。いずれも壺形土器の胴部装飾と考えられる。縦隆帯(第Ⅳ②-4図18~21)は、丸く張った胴部に加えられた縦方向の隆帯である。居徳遺跡に4点



第Ⅳ②－４図　波状口縁鉢・多頭口縁鉢ほか
（波口鉢：1～12、多頭鉢：13～17、縦隆帯：18～24、C字突帯：25～31）

がある[3]。隆帯は幅1cm程度、高さ5mm程度で、断面には隅丸台形(第Ⅳ②-4図18・19・21)とアーチ形(第Ⅳ②-4図20)がある。丹彩の痕跡も認められる(第Ⅳ②-4図18・21)。器面の湾曲が弱い器形(第Ⅳ②-4図18・21)や縦隆帯が太いもの(第Ⅳ②-4図20)など形態差がある。黒色磨研(第Ⅳ②-4図20)もあるが、地の色調はにぶい褐色で、長石・石英・雲母を含む胎土は在地のものと異なる。類例は百間川沢田遺跡(第Ⅳ②-4図22~24)にあり、備讃瀬戸地域からの搬入品と考えられる。文様をもつもの(第Ⅳ②-4図21)はやや異質で、隆帯が低く、隆帯に沿うミガキは範囲が狭く粗雑で、器面には略化した木葉文とみられる斜方向の集線が粗く施文される。胎土は弥生土器と同類であり、在地化の一様態と考えられる。

C字突帯(第Ⅳ②-4図25~27)は、壺の肩部に貼付されたC字形の浮文である。居徳遺跡に3点がある。複数のC字突帯が一定間隔で肩部に配置されたと考えられるが、2つが向かい合うもの(第Ⅳ②-4図25)もある。いずれも弥生土器の胎土であり、つくりがやや粗雑である。大阪府山賀遺跡や愛媛県岩崎遺跡に類例がある。いずれも遠賀川式の壺に加えられた装飾である。山賀遺跡の資料(第Ⅳ②-4図28・29)には4条の集線文があり、岩崎遺跡の資料(第Ⅳ②-4図30)は頸部の締まりが強いなど、弥生前期のうちでも新しい段階にあたる。

3　磨研鉢各器種の組列と関係

旧稿(宮里 2016)で第1~5段階に区分した磨研鉢主要3器種(喇叭形・胴張り形・鉤口ボウル形)の変遷を口縁類型の再検討により改めて提示し、さらに第5段階以降の変遷を体系化するため、波方鉢、内折鉢、変容壺、無頸壺、波口鉢、多頭鉢の各器種を設定し内容を詳説した。以下では、まず第1~5段階について深鉢編年との併行関係を整理し、つづく段階として設定する第6~9段階を構成する各器種相互の関係を検討する。

(1) 磨研鉢第1~5段階と深鉢の併行関係

縄文晩期の磨研鉢と深鉢(宮里 2022)は時期的関係を示す出土事例が乏しく、形態の類似や変化階梯の比較、僅かな共伴事例に拠って併行関係を見定めなければならない。

磨研鉢口縁のa類からb類への変化は、深鉢型式における上ノ村U型から上ノ村T型への変化、すなわち2条線をもつ板状口縁から素凸帯口縁への変化に対応する。よって磨研鉢第1段階(a類)と上ノ村U型、第2段階(b類)と上ノ村T型に接点を見出すことができる。

倉岡型深鉢のうち、新相の屈曲タイプが居徳遺跡4C区SK1で、口縁e1類の喇叭形磨研鉢、口縁g類の胴張り形磨研鉢と共伴した。喇叭形磨研鉢(第Ⅳ②-1図12)の口縁e1類はf類からの移行形態であり、また張りのある面胴がミガキ仕上げであるなど、第4段階と第5段階の中間的な様相を示す。よって倉岡型の多くがf類を中心とする第4段階と併行する蓋然性が高く、同様に口縁e1類および多段化・肩部形成を特徴とする第5段階と倉岡型に後続する刻凸短頸型深鉢に変更関係を認めることができる。すると、上ノ村T型と倉岡型の間に位置する先倉岡型と、口縁b類とf類の間に位置するd類の併行関係を想定することができる。

明確な層位・共伴の事例が不足しているが、磨研鉢第1~5段階と深鉢型式は第Ⅳ②-5図のように対応関係を整理することができる。

(2) 波方鉢から波口鉢へ

波方鉢A型は、第4段階で面胴化した喇叭形磨研鉢が、肩部形成・多段化・有文化(第Ⅳ②-1図17・18)など多様化するなかで派生したもので、喇叭形の胴屈折部を波状口縁にあわせて湾曲させることで成立した新器種である。口縁形態がe1類・g類であるため第5段階に位置づけられる。第5段階は

備讃瀬戸北岸域の前池式に併行する刻凸短頸型深鉢(宮里 2022)に併行し、波方鉢が刻目突帯文土器と共に登場したと分かる。登場期の波方鉢は僅少で全体に占める割合はごく僅かであったがB型・C型と変化するにつれ数量が増加することが特徴的で、時期とともに磨研鉢の数量が減じていく西日本全体とは傾向が異なる。

波方鉢B型に相当する近畿や九州の磨研鉢は、口酒井遺跡や菜畑遺跡で内折鉢A型と併存する。広域編年の成果によれば、口酒井式・津島岡大式・夜臼Ⅱa式(宮地の刻目突帯文Ⅱa期)にあたる。つづく波方鉢C型は、後続型式・時期である船橋式・沢田式・夜臼Ⅱb式に比定される。沢田式に併行する南四国の深鉢は刻凸喇叭型であるから、波方鉢C型は刻凸喇叭型と併行し、先行する波方鉢B型は刻凸短頸型と刻凸喇叭型の移行期へと位置づけられる。

(3) 内折鉢から変容壺・無頸壺へ

内折鉢は、刻目突帯文期を代表する磨研鉢で九州から近畿にいたる広い地域に共通してみられる器種であるが、南四国には極端に少ない。内折鉢はA型の特徴である口頸部の屈折と面胴が鈍化して、ボウル形に近いB型へと変化するが、この変化の過程で備讃瀬戸地域では壺の影響が加わった変容壺が生成した。南四国では内折鉢を受容しないが変容壺の受入れは積極的で、さらには変容壺と類似した造形の無頸壺が生み出された。

内折鉢A型は口酒井式、津島岡大式、夜臼Ⅱa式を特徴づける器種であり、つづく内折鉢B型は後続型式である船橋式、沢田式、夜臼Ⅱb式の構成要素である。変容壺は沢田式にともなう器種であり、内折鉢がA型からB型へ変化する過程で派生し成立したと考えることができる。

無頸壺は、在地における胴張り形磨研鉢の系譜が想定され、変容壺と同様の背景において、壺形土器の肩部を移植することで成立した。変曲点に凹線をもつ古相(第Ⅳ②-3図15)と凹線を欠く新相(第Ⅳ②-3図16)に分かれる。居徳遺跡1C区層序によれば、無頸壺古相は下層のⅣD層、新相は上層のⅣB層に対応する。同層から出土する深鉢型式と対照すると、無頸壺古相は刻凸喇叭型、無頸壺新相は刻凸長頸型と併存する。変容壺の新相(第Ⅳ②-3図17)もⅣB層出土であり、無頸壺と変容壺が沢田式期に出現し、型式変化しながらつづく時期まで遺存したと分かる。

また内折鉢B型に波口鉢の特徴(第Ⅳ②-3図6)がみられることから、波方鉢C型が波口鉢へ変化する過程で内折鉢B型との間にも影響関係があったと分かり、内折鉢B型の遺存を示唆するが南四国の型式組列とは関わりが薄い。

(5) 波口鉢から多頭鉢へ

波口鉢は、口唇珠文の共通性などにより波方鉢が型式変化して成立したものと分かる。よって波方鉢A型・B型・C型・波口鉢は連続した型式組列をなし、時期差の基準となる。波方鉢C型が沢田式併行であるため波口鉢は後続の服部型と接点をもつと想定されるが、居徳遺跡1C区の層序によれば、波口鉢は上層のⅣB層に集中するため刻凸長頸型および服部型との併行関係を認めることができる。三谷遺跡の波口鉢(第Ⅳ②-4図12)は刻凸長頸型に相当する下位突帯の深鉢が出土するSX3に集中しており、やはり相対的に新しい時期の器種と分かる。

多頭鉢は、波頂部の珠文や口縁内面の重弧文により波口鉢の延長線上に生成したと分かるが、胎土や焼成、ハケメ調整など遠賀川式の製法によって製作されており、製作環境の大きな変化を示す。多頭鉢の造形や器面調整は甕形土器に通じるが、胴部の刻目突帯(第Ⅳ②-4図13・15)や1条の沈線(第Ⅳ②-4図17)は西見当1式に類する特徴である。深鉢の型式組列でいえば居徳型の古相と接点をもつであろう。

4　磨研鉢の9つの段階

口縁形態のa類からe1 類にいたる変化階梯および波方鉢から波口鉢をへて多頭鉢にいたる型式組列から、磨研鉢に第1～9段階を設定することができる(第Ⅳ②-5図)。各段階は一定の時間幅をもって推移すると考えられるため「時期」と読み替えてもよいが、時期の措定は遺跡における層位・共伴の事例をまってさらに検討したい。

第1段階

第1段階は、磨研鉢の口縁形態がa類の段階である。未だ類例が少なく、また先行型式が不在であるため不明な点が多い。全形は窺えないが、喇叭形およびボウル形と認定できる資料がある。深鉢は口縁形態の類似により上ノ村U型が対応する。磨研鉢および深鉢の資料は上ノ村遺跡に集中し、鴨部遺跡や姫野々上町遺跡に少数がある[4]。

第2段階

第2段階は、磨研鉢の口縁形態がb1類・b2類・c類の段階である。b1類を基点とするb2類・c類への変化があり一定の時間幅があると考えられる。喇叭形が多数を占め、鉤口ボウル形は少量で胴張り形は僅少である。変化階梯の対照によれば第2段階には深鉢の上ノ村T型が対応する。第2段階の磨研鉢は上ノ村遺跡、居徳遺跡、栄エ田遺跡、鴨部遺跡、新改小山田遺跡、姫野々上町遺跡などで前段階より遺跡数が増し分布範囲も拡がる。

第3段階

第3段階は、磨研鉢の口縁形態がd類の段階である。喇叭形が中心で鉤口ボウル形が僅かにある。変化階梯の対照によれば深鉢は先倉岡型が対応する。比較的時期が限定される北高田遺跡は深鉢が倉岡型、磨研鉢が口縁f類・e1類・g類の各器種から構成されるため、変化階梯においてこれらに先行する磨研鉢の口縁d類と先倉岡型を、第2段階から変化が進んだ、第4段階に先行する1つの段階として析出することができる。良好な資料を待っての検証が必要である。分布の傾向は第2段階と同様である。

第4段階

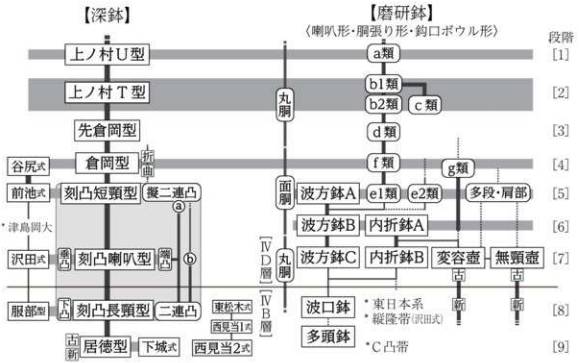
第4段階は、磨研鉢の口縁形態がf類の段階である。g類も一定の割合を占めるが、g類単独で時期を絞るのは困難である。f類の口縁は磨研鉢にもっとも多いもので、出土遺跡も居徳遺跡、上ノ村遺跡、北高田遺跡、栄エ田遺跡、新改小山田遺跡、林田シタノヂ遺跡、美良布遺跡と増加が著しくまた範囲もひろい。磨研鉢は依然として喇叭形がが中心であるが、胴張り形の割合が著しく高まり、鉤口ボウル形をしのぐ磨研鉢第2の器種となる。また磨研鉢は胴部の面胴化が顕著となり、数字では示しにくいが大型の個体も目立つようになる。器種組成・形態・サイズが大きく変化する段階であり、磨研鉢の変質が示唆される。

第5段階

第5段階は、口縁形態がe類の段階である。g類も一定割合を占める。器種組成・面胴形態・大型品などの特徴に加え、出土量や遺跡の分布も第4段階を継承する。第5段階の新しい特徴は、喇叭形・胴張り形における多段化と肩部形成であり、また数は少ないが波方鉢A型という新器種が登場する。第5段階は刻目突帯文深鉢の出現期であり、深鉢型式は刻凸短頸型が対応する。

第6段階

第6段階は、波方鉢B型の段階である。喇叭形や胴張り形、鉤口ボウル形が第6段階まで遺存するかは不詳で、遺存を示唆する型式変化も現状では認められない。刻目突帯文土器期を代表する内折鉢A



第Ⅳ②－5図　型式組列

型が併存する段階であるが、南四国では僅少である。深鉢は刻凸短頸型から刻凸喇叭型への移行段階であり、該当する型式を設定できていない。第6段階の遺跡は居徳遺跡、上ノ村遺跡があるのみで、第4・5段階に比べて急激に数が落ち込み、遺物の出土量も少ない。

第 7 段階

第7段階は、波方鉢C型、変容壺古相、無頸壺古相の段階である。出土遺跡は居徳遺跡、上ノ村遺跡、栄エ田遺跡などに限られるが、出土量の増加が顕著である。磨研鉢は胴部がふたたび丸胴傾向となり、各器種とも深みのある器形となるが、壺が担う貯蔵の機能を在来の器種で補うべく変容壺や無頸壺を生み出したことが、磨研鉢の造形を変化させたといえる。深鉢型式は刻凸喇叭型が対応する。刻凸喇叭型深鉢は松ノ木遺跡、上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡などから出土するが、出土資料の95%は居徳遺跡のものであり、磨研鉢とともに居徳遺跡への集中傾向が顕著である。

第 8 段階

第8段階は、波口鉢と変容壺新相、無頸壺新相の段階である。縦隆帯土器も、やや根拠は弱いが居徳遺跡1A区包含層におけるゆるやかな共伴関係により第8段階に位置づけられる。居徳遺跡1C区Ⅳ B 層の時間幅のうちの古段階にあたる。深鉢型式は刻凸長頸型が対応する。磨研鉢・深鉢とも、第7段階につづき居徳遺跡への集中傾向が顕著である。居徳遺跡から出土した東松木式最古形態(3A区294)や、1A区・1C区Ⅳ B 層から出土した東日本系土器は第8段階に伴うと考えられる。

第 9 段階

第9段階は、多頭鉢の段階である。居徳遺跡 1C区Ⅳ B 層の時間幅のうちの新段階にあたる。多頭鉢は弥生土器の体系に取り込まれており、縄文晩期伝統の磨研鉢はここに至って消滅する。壺形土器のC字突帯は第9段階に伴うであろう。深鉢は居徳型が対応し、弥生土器では西見当1～2式との併行関係が見込まれる。多頭鉢の出土は居徳遺跡に限定され、磨研鉢の製作伝統の痕跡が居徳遺跡にのみ遺存した状況である。

結び―居徳遺跡の時代―

以上、縄文晩期の初頭から弥生前期の後半にいたる磨研鉢の体系と段階を整理した。うち刻目突帯文土器出現後にあたる第5～9段階の磨研鉢は、既往の研究においては、縄文伝統が衰退・消滅する時期として遠賀川式の出現にくらべて軽視されてきた。しかし、南四国では、深鉢とあわせてみると一層顕著であるが、縄文伝統の土器がかえって多様に展開した。とくに第8段階を前後して、居徳遺跡は拠点化の様相を強め、精製土器や土偶など東日本系文物が集中して出土するなど、存在感を増している。本稿および深鉢の研究成果(宮里 2022)により、縄文晩期から弥生前期にかけての年代尺が整備され、遺跡の動態および社会変動を検討するための準備が整った。今後、居徳遺跡をめぐる謎として残る、東日本系文物の系統と出現過程を明らかにし、農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究を一層深めたい。

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

柴田昌児、谷若倫郎、出原恵三、中村豊、山崎孝盛

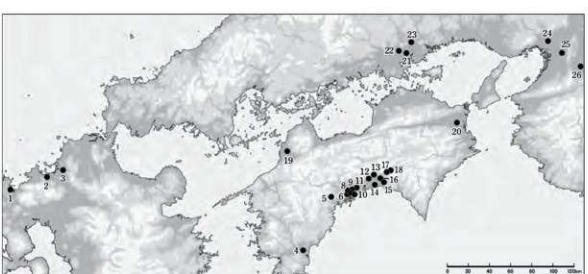
岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、香美市教育委員会、

高知県立埋蔵文化財センター、香南市文化財センター

註

(1)いわゆる「黒色磨研土器」を、前稿(宮里 2016)では黒色に限られないことから「磨研浅鉢」としたが、出現から消滅にいたる全過程を概観すると、浅鉢に限定されない広い意味での「鉢」として役割を担い続けたことが分かる。よって本稿では晩期に定型化した「磨研鉢」の系統として研究対象を捉えることにした。

(2)あわせて設定した「浅鉢系広口壺」については、その後、5段階において活性化した多段化をともなう肩部形成によって生じた器種と評価するにいたり、壺の影響が想定できなくなった。喇叭形磨研鉢の最後段階にあらわれるが、分類単位として独立させるべきかは今後の資料増加を待ち再考したい。



第Ⅳ②－6図　遺跡の位置

(1. 菜畑、2. 橋本一丁田、3. 江辻、4. 中村貝塚、5. 姫野々上町、6. 北高田、7. 倉岡、8. 居徳、9. 八田神母谷・奈呂、10. 上ノ村、11. 鴨部、12. 栄ヱ田、13. 新改小山田、14. 田村、15. 庭ヶ岡、16. 林田シタノヂ、17. 美良布、18. 仁井田、19. 岩崎、20. 三谷、21. 百間川沢田、22. 津島岡大、23. 南方前池、24. 口酒井、25. 山賀、26. 横原)

(3)第Ⅳ②-4図18は居徳遺跡1A区出土の未報告資料である。長さ10・5cm、厚さ5mmほどの破片で他の例にくらべ胴の湾曲が弱い。中央の縦隆帯は断面が隅丸台形で、幅1cm、高さ5mmである。隆帯は上端で低まって収束する。上端部分には丹彩の痕跡が残る。器面調整はやや右に下がる横ミガキで、隆帯の両側8mm幅は、隆帯の接合に付随する縦ミガキが横ミガキを切る。隆帯の上部右脇は斜めの指ナデにより若干くぼむ。内面はナデ調整である。胎土は長石・石英・金雲母・黒雲母を一定量含み、搬入品と考えられる。表面の色調はにぶい褐色となる。高知県立埋蔵文化財センターの許可を得て実測・掲載した。

(4)磨研鉢第1～5段階の組成や出土数は旧稿(宮里 2016)による。

文献

泉拓良、1989、「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』、小学館、311～314頁

泉拓良、1990、「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集、奈良大学文学部文化財学科、55～79頁

泉拓良・山崎純男、1989、「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』、小学館、347～352頁

岡田憲一、2011、「近畿地方縄文晩期土器編年と奈良県下基準資料」『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第11冊、奈良県立橿原考古学研究所、310～335頁

小南裕一、2012、「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集』、中村友博先生退任記念事業会、45～76頁

平井勝、1988、「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集、古代吉備研究会、9～34頁

藤尾慎一郎、1991、「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』、横山浩1先生退官記念事業会、187～270頁

水ノ江和同、1997、「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から刻目突帯文土器の直前まで―」『縄文時代』第8号、縄文時代文化研究会、73～110頁

宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」『海南史学』第54号、高知海南史学会、1～20頁

宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会鳥根大会実行委員会、33～52頁

宮里修、2022、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁

宮地聡一郎、2004、「刻目突帯文土器圏の成立(上・下)」『考古学雑誌』第88巻第1・2号、日本考古学会、1～32・38～52頁

宮地聡一郎、2007、「逆「く」字形浅鉢の成立と展開」『第8回関西縄文文化研究会　関西の突帯文土器 発表要旨集』、関西縄文文化研究会、127～134頁

宮地聡一郎、2008、「凸帯文系土器(九州地方)」『総覧縄文土器』、アムプロモーション、806～813頁

山崎純男、1980、「弥生文化成立期における土器の編年的研究―板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合―」『古文化論攷』、鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会、117～192頁

［報告書］

大阪文化財センター編、1984、『山賀(その3)』、大阪文化財センター

岡山県教育委員会(岡田博他)編、1985、『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（山本悦世)編、1992、『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊

香川県埋蔵文化財調査センター（宮崎哲治)編、1993、『林・坊城遺跡』、香川県教育委員会

柏屋町教育委員会(新宅信久)編、1998、『江辻遺跡第4地点』柏屋町文化財調査報告書第14集

唐津市教育委員会(中島直幸他)編、1982、『菜畑』唐津市文化財調査報告書第5集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他)編、2000、『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行他)編、2001、『居徳遺跡群Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集(1B・1C・1D区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他)編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集(1A・1C・1D N・1F区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他)編、2003a、『居徳遺跡群Ⅳ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集(1E・2A・3B・4C区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群Ⅴ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集（4A・4B区）
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（吉田昇他）編、1998、『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行）編、2004、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集（5A・3A・1C・4D区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2011、『上ノ村遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集
徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（勝浦康守）編、1997、『三谷遺跡』
福岡市教育委員会（池田祐２）編、1998、『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告５：福岡市西区橋本一丁田遺跡第２次調査・橋本遺跡第１次調査』福岡市教育委員会調査報告書第582集
松山市教育委員会（宮内慎一他）編、1999、『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書第71集、松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
六甲山麓遺跡調査会・伊丹市文化財調査団（浅岡俊夫他）編、2000、『口酒井遺跡：第１次～第10次・第12次～第16次調査の概要』

［挿図出典］

第Ⅳ②-１～４図：地区・番号のみの表示はすべて居徳遺跡出土資料（高知埋文 2001・2002・2003a・b・2004）。「上ノ村～」は高知埋文（2011）の遺物番号に対応。「北高田～」は高知埋文（2000）の遺物番号に対応。「櫃原～」は櫃原考古学研究所（2011）の遺物番号に対応。「江辻４地点～」は柏屋町教育委員会（1998）の遺物番号に対応。「口酒井15次～」は六甲山麓遺跡調査会他（2000）の遺物番号に対応。「橋本一丁田～」は福岡市教育委員会（1998）の遺物番号に対応。「津島岡大３次～」は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1992）の遺物番号に対応。「沢田～」は岡山県教育委員会（1985）の遺物番号に対応。「津島岡大3次～」は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1992）の遺物番号に対応。「三谷SX3」は徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（1997）の第42図38。「山賀」は大阪文化財センター（1984）の第53図260・第18図916・918、「岩崎」は松山市教育委員会（1999）の第214図Ⅵ148。第Ⅳ②-４図18は筆者実測。
第Ⅳ②-５・６図：筆者作成。
＊「高知埋文」は高知県文化財団埋蔵文化財センターの略

③ 南四国出土土偶の系譜

はじめに

縄文・弥生移行期の重要遺跡である居徳遺跡の調査・研究に取り組んでいる。居徳遺跡にまつわる重要課題には東日本系土器、大型土偶、木胎彩色漆器、木製鍬、受傷人骨がある。これまでに関連資料の提示(宮里 2017)、東日本系資料の素描(宮里 2018)を行い、2019 年度からは発掘調査を開始した。研究の過程で地域の時間軸を整備する必要を感じ、深鉢と磨研鉢について分類と編年を再検討した(宮里 2022a・b)。結果、縄文晩期系統の土器が9つの段階に分かれ、その型式組列は遠賀川式土器と共存しながら弥生前期後半までつづくことを明らかにした。南四国の縄文・弥生移行期研究において、遠賀川式土器や他地域との関係を考えるための枠組みが整理されたことは大きな成果であり、本稿はこの成果に基づき土偶の問題に取り組むものである。以下、対象とする土偶を南四国出土資料とし、居徳遺跡や田村遺跡の出土資料について系譜や背景を検討する。

1　南四国出土土偶の諸例

南四国出土土偶は8点が知られる。土佐市居徳遺跡に3点、南国市田村遺跡に4点があり、旧十和村広瀬遺跡にも1点がある。年代は広瀬遺跡が縄文時代後期、居徳遺跡が縄文時代晩期～弥生時代前期、田村遺跡が弥生時代前期～後期となる。居徳遺跡、田村遺跡を中心に資料の特徴を確認する。

(1) 居徳遺跡出土資料

居徳遺跡からは4D47土偶、3A583土偶、3A589土偶の3点が出土した[1]。

4D47土偶(第Ⅳ③-1図1)は大きな顔に特徴があり顔の下端は肩・腕によって縁取られる。胴は大部分が失われ残高18.2cm、残幅17.5cmとなる。仮に短脚であっても全長は20cmを超え土偶としては大型の部類となる。全体に立体的で厚みがあり、破損部分に厚さ4～6㎜の器壁が認められるなど大型土偶に通有の中空構造であったと考えられるが、内部に充填された焼成不良の粘土が流出した可能性もある(曽我他 2002)。頭部は山形に近い円盤状の基体の前後が膨張したような形状で、顔面の中央には長く筋の通った鼻が隆起し、鼻根付近の両側にはつり上がった長三角形の目が除刻される。眉毛の表現はない。耳に当たる位置にはナデによる縦長の窪みがある。後頭部の中央には3cm大の円丘状に隆起した部分があり結髪由来の表現とみられる。両耳の直下には肩に相当する大きな隆起があり、側方に張り出した先端は面取りされ平坦となる。両肩から胸部中央に向かって下降しつつ延びる隆起した腕は先細りの形状で、破損により確認できないが先端はほぼ接していたと考えられる。腕の造形は、結髪土偶における肩と乳房を連結した隆起帯が転化したものと考えられる。外面は橙色、内面は灰褐色で焼成はやや不良である。胎土には5～10㎜大のチャートを含み在地産とみられる。4D47土偶は居徳遺跡4D区の窪地に堆積した黒色泥炭質土層から出土した。層中の土器は縄文後期～弥生前期にわたり時期の絞り込みは困難であるが、遺跡における東日本系土器の帰属時期を参照すると刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階(第Ⅳ③-7図)に相当すると考えられる。

3A583土偶(第Ⅳ③-1図2)は土偶の頭部片で残高3.2cm、幅3.7cm、厚さ1.6cmの小型品である。頭部の形状は山形で、目尻の下がった楕円形の目が除刻される。眉・鼻の表現は認められない。後頭部の中央は粘土塊の貼付により隆起する。山形の頭部形状や後頭部の隆起に4D47土偶との共通点がある。色調は橙色で、胎土には長石・石英・角閃石を含み搬入品の可能性がある。出土層位は3A589土偶と同様である。

3A589土偶(第Ⅳ③-1図3)は台式土偶(長原タイプ)の胴部片である。四周を欠失し残高4.8㎝、残幅6.4㎝、厚さ1.4㎝となる。上端付近には円丘形の乳房一対(1㎝大、左側を欠失)が2㎝の間をおいて貼付される。乳房の裾には接合に伴うナデ凹帯が環状にめぐる。胴部中央には隆線による5本の正中線が施文される。器面全体はナデ仕上げであるが隆線上面にはミガキがかかる。5本の隆線のうち側方の各2本は上端が外方に曲がっており、隆線帯は全体として上開きの撥形となる。脇腹相当の位置には横方向のヘラ描き短線文が2本ずつ施文される。沈線内端と乳房の縦位置関係は左右均等である。左脇腹沈線の内端下位にあたる下縁には穿孔の痕跡が認められる。対となる逆側縁辺にも穿孔の痕跡が微かに残る。左右の脇腹沈線および穿孔上端は高さが不揃いで左脇側がやや高い。胴部は腹を凹ませるように上下左右が内反りとなり、台式土偶一般とは反りの向きが逆となる。胴部は、左半身の側縁が直線的に擦り落とされ本来の形状を窺い難いが、撥形の隆線帯や右脇腹付近の遺存状況によれば、肩に向かって上開きとなる形状であったと推測される。背面は凹凸がのこる粗いナデ仕上げで前面に比べてつくりが雑である。色調は褐灰色で正中線と左乳房が煤けて黒ずむ。胎土には白・灰色のチャート粒を含み在地産と考えられる。3A589土偶は居徳遺跡3A区の斜面部分に堆積する縄文晩期～弥生前期の包含層から出土した。伴出遺物による時期の絞り込みは困難であるが、長原タイプ土偶との比較から、刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階のうちのより新しい時期と考えられる。

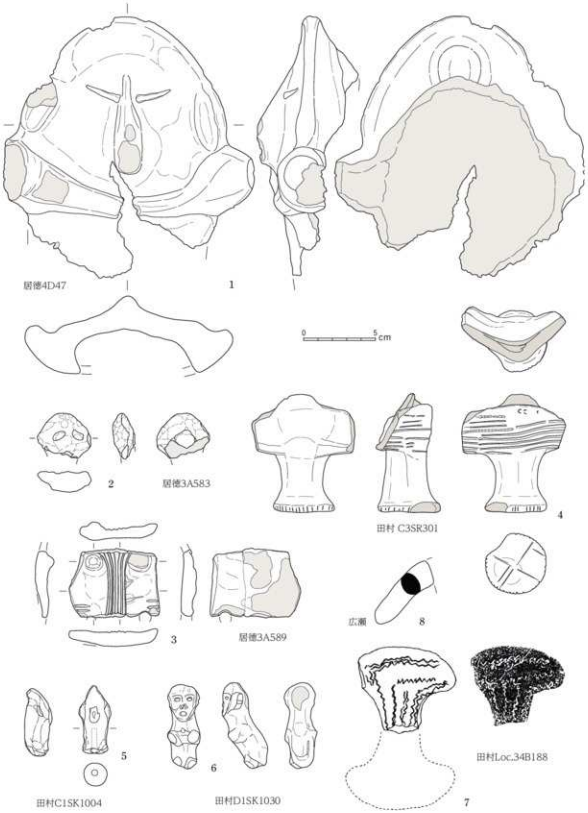
(2) 田村遺跡出土資料

田村遺跡からはC3SR301土偶、C1SK1004土偶、人面付土製品(D1SK1030)、分銅形土製品(Loc.34B188)が出土した[2]。前2者について詳述する。

C3SR301土偶(第Ⅳ③-1図4)は筒状の脚部に横長の板状部が載った奴凧形系列に類する土偶である。上部を欠失し残高8.2㎝、幅7.3㎝となる。板状部は広げた両腕を後ろにひき胸を張ったような形状で、文様のある正面側にやや前傾する。板状部正面には横方向の櫛描文が施文される。櫛描文は先端がやや丸い6歯ないし4歯のクシ状工具を右から左に動かし施文された。大部分は6歯で施文され、右肩一帯の上半部に4歯櫛描文が加えられる。右上半部の4歯櫛描文は蹴り彫りのように細かな刻みが連接する線刻となっている。上部中央には半裁竹管文のようなC字文が横に2つ並ぶ。板状部の背面には下縁に沿って幅5～7㎜、厚さ3㎜程度の顎状隆帯が加えられる。裾広がりの筒状脚部は断面円形で筒部径が2.9㎝、裾径が4.3㎝である。裾は正面側がやや張り出す。裾の外周には縦方向の細かい刻みが連なる。外底面にはヘラ描き沈線が十字形(一部複線)に施文される。色調は黄褐色～灰黄褐色で相対的に前面が白く背面が赤い。胎土にはチャート粒を含み在地産と考えられる。C3SR301は集落の北東を区切る大溝で、覆土には弥生前期から後期までの土器を含み時期を絞るのが困難であるが、土偶面に施文されたやや粗い櫛描文は弥生中期前葉(土佐Ⅱ様式、出原 2000)の土器と類似し時期比定の参考となる。

C1SK1004土偶(第Ⅳ③-1図5)は高さ4.8㎝の小型粗製品である。側面の隆起を耳とするか腕とするかで評価が変わるが、ここでは正面の隆起を鼻、側面の隆起を耳と考える。すると土偶の大部分は頭部で頭像状の形態となる。眉・目・口の表現はない。頭頂部から斜め後方に突出する部分は鶏冠状隆起の表現とみられ、本土偶を後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)の類例とする根拠となる。底面中央には消化器にあたる棒状の穿孔がある。色調は橙色で、胎土には砂粒を含み在地産と考えられる。C1SK1004は160㎝大の大型土坑で西見当2式の甕がまとまって出土している。弥生前期後半で居徳型深鉢・磨研鉢9段階に伴行する。

その他の分銅形土製品(第Ⅳ③-1図7)や人面付土製品(第Ⅳ③-1図6)は本稿の問題設定から外れるため検討対象から除外する。



第Ⅳ③－1図　南四国出土土偶

2　南四国出土土偶の系譜

各事例について特徴を比較検討した結果、居徳4D47土偶は結髪土偶、田村C3SR301土偶は奴凰形系列、居徳3A589土偶は台式土偶(長原タイプ)、田村C1SK1004土偶は後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)との関係が指摘できる。結髪土偶、奴凰形系列、台式土偶、後頭部結髪土偶について概要を述べ南四国出土土偶と比較する。

(1) 結髪土偶との関係

結髪土偶[3]は会田容弘(1979)が、亀ヶ岡文化の土偶が大きく変化する大洞A'式前後の資料群として位置づけた、結髪形土偶・刺突文土偶・終末期土偶のうちのひとつである。結髪土偶は13の特徴[4]により明確に定義され刺突文土偶と区分された。佐藤嘉広(1996)は東北地方の弥生土偶を検討するなかで、結髪形土偶を背面垂下文・背面横位文様帯・胸部隆帯の分類・組合せにより4分類し、結髪形土偶1～4期を設定した。分類属性のうち胸部の隆帯は変化の方向・階梯が明瞭で相対年代の手掛かりとされた。金子昭彦(2004・15)は佐藤の成果をもとに、結髪土偶・刺突文土偶について型式学的検討[5]を加えながら土器編年との対照をはかった。結果、各部位に生じる大きな変化は洞A2式から大洞A'式にかけて起こると整理された。

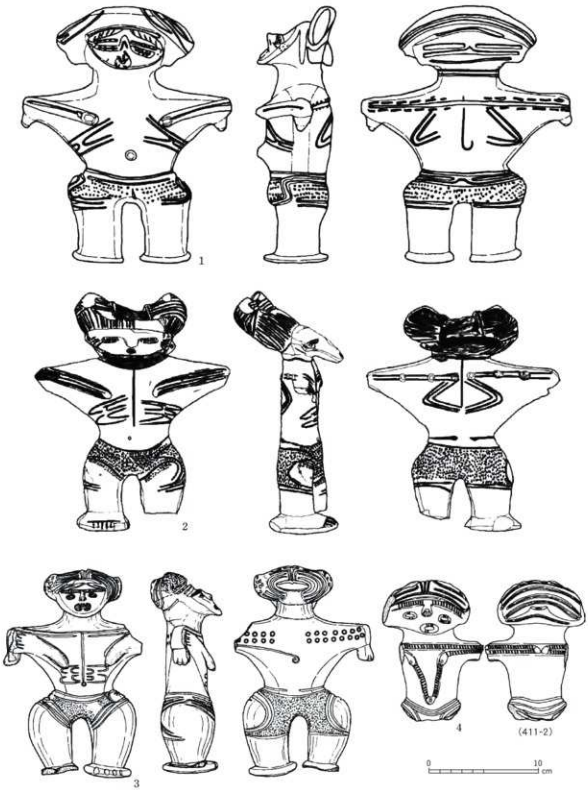
結髪土偶の胸の隆帯は肩と乳房を連結する装飾である。起源は不詳であるが、大洞A1式期の九年橋411-2土偶(第Ⅳ③-2図4)のような乳房や臍を連結する文様が転化したものと考えられる。佐藤(1996)の分類によれば隆帯の先端(乳房)が隆起するものに始まり、A：隆帯に刻みがあるもの、B：隆帯に刻みがないもの(沈線あり)、C:隆帯が付け根に向かって細まり収束するもの、D:添付粘土(乳房)から肩方向に僅かな隆帯が延びるもの、E：粘土粒(乳房)が添付されるもの、と順に変化する。

居徳4D47土偶の「腕」は、結髪土偶の本来の腕が小突起として痕跡化したこともあって、胸の隆帯が腕と認識され転化したものと考えられる。居徳4D47土偶の腕は乳房にあたる隆起を伴わず胸の前で腕の先端をあわせる形状となる。居徳4D47土偶では肩と腕の連結が明瞭であるため、起源となりうるのは佐藤のB段階であり、金子(2004)によれば大洞A2式期にあたる。しかし結髪土偶と居徳4D47土偶の類似度は全体として低く、一部要素を大きく変容させつつ取り入れた格好となる。居徳4D47土偶における、結髪土偶に認められない肩の強調は、東北地方に併存した刺突文土偶[6]の肩パッドに影響されたとも考えられる。

居徳4D47土偶の頭部は円盤形基体の前後が張り出す形状に特徴がある。鈴木正博(2004)は顔面の傾斜に注目して居徳4D47土偶を「斜顔結髪土偶」と分類し、類例に乾836土偶(第Ⅳ③-3図2)をあげた。乾836土偶は円盤状基体や後頭部の隆起に居徳4D47土偶との類似をみせるが、小型であることや、沈線・列点を加えた顎の表現、後頭部のレンズ状重弧文など差異点が少なくない。乾837土偶(第Ⅳ③-3図3)は省略形土偶であるが、頭部と体部のバランスは居徳4D47土偶の全体像を考える参考となる。顔を大きく作る事例に地方土偶(第Ⅳ③-3図1)がある。屈折像土偶の一種であるが、全体の半分をしめる頭部は、平板な顔面に上部が弧をなす結髪表現が加わる形状で結髪土偶に類似する。結髪土偶の頭部は上端が弧をなすものから両端が反り上がるものに変化するが(金子 2004)、弧をなす結髪は円盤状で背面に重弧文をもつ例が顕著であり(第Ⅳ③-2図1・4、第Ⅳ③-3図4)、乾836土偶は大洞A2式期の結髪土偶が変容したものと評価できる。顔面を過度に強調する稀少例とあわせて、居徳4D47土偶を構成する要素は東北から北陸にかけての各地域で個別に散見される状況である。

(2) 奴凰形系列との関係

奴凰形土偶は、当初は結髪形・刺突文土偶以外の終末期土偶として一括されたが(会田 1979)、砂沢遺跡の報告(弘前市教育委員会 1991)にいたって全体が奴凰に似る「奴凰形土偶」と分類された[7]。佐藤

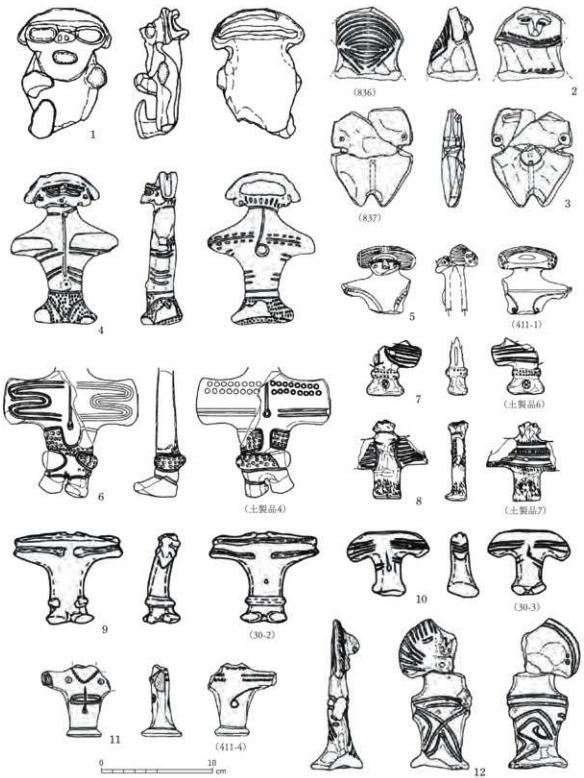


第Ⅳ③－2図　結髪土偶
(1. 山形県釜淵C、2. 秋田県鐙田、3. 岩手県宮沢、4. 岩手県九年橋)

(1996)は会田が終末期土偶としたものをa類～f類に細分したが[8]、このうちc類が奴凧形土偶で、2本の結土紐を合わせて肩部をつくり扁平な腕が横にひろがるものと定義した。頭部に省略傾向があること、結髪形・刺突文土偶の双方から系譜をひくことがあわせて指摘された。金子(2015)は上半部が板状に造形される土偶を、結髪土偶、刺突文土偶のそれぞれから派生する諸系統に区分し、結髪土偶の系統には奴凧系列、T字形系列、台式土偶、台式・屈折像系列を設け、刺突文土偶の系統には刺

突文・奴凰系列を設定した。金子の分類は細分と系統の整理を目指すものとして有意義であるが、本稿ではより大きな範疇での比較が適当であるため、上半部の板状化と脚部の台状化が生じた1群を奴凰形系列として一括する。

奴凰形系列への指向は結髪土偶のうちにみられる。九年橋411-1土偶(第Ⅳ③-3図5)では胸の隆帯を維持するが上半身に板状化傾向がみられる。砂沢4土偶(第Ⅳ③-3図6)は上半部が板状となるが結

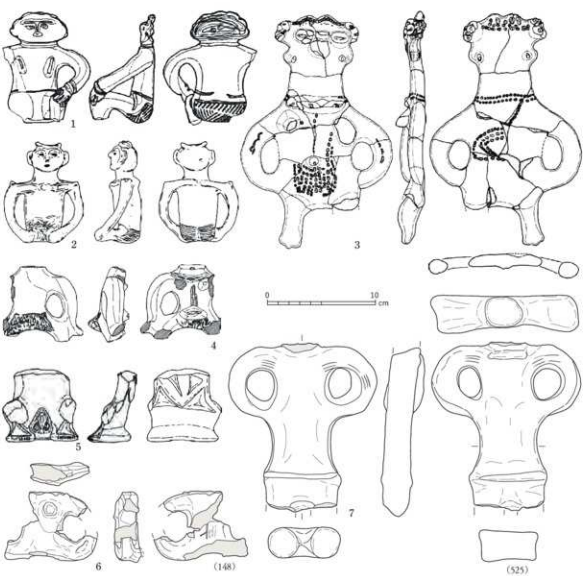


第Ⅳ③-3図　奴凰形系列関連資料

(1. 秋田県地方、2·3. 石川県乾、4. 岩手県芦渡、5·11. 岩手県九年橋、6~8. 青森県砂沢、9·10. 岩手県谷起島、12. 群馬県沖Ⅱ)

髪土偶に通有の文様をもち、脚は顕著に短くなるが辛うじて脚の形状をとどめる。腰回りには新たな要素として隆帯がめぐる。芦渡土偶(第Ⅳ③-3図4)は全体として結髪土偶の形態をとるが、体部は板状で、脚は痕跡的となり台状に近づく。九年橋411-4土偶(第Ⅳ③-3図11)は板状化傾向の上半部に結髪土偶に通有の文様をもつが脚は完全に台状となる。芦渡土偶は大洞A2式期、九年橋411-4土偶は大洞A'式古期、砂沢4土偶は大洞A'式古期とされ(金子 2014)、奴凧形系列は大洞A2式から大洞A'式にかけて顕在化すると分かる。弥生前期末を前後する頃には、脚部の痕跡化、小型化、文様の簡略化(第Ⅳ③-3図7～10)が連動して進行するという(金子 2014)。

田村C3SR301土偶は上半部の反りが大きく下半が筒状であるなど、奴凧形系列との形態差は大きい。説明に窮するが、現状では脚部の円柱化については北関東・中部高地における黥面中実台式土偶(第Ⅳ③-3図12)から土偶形容器にいたる変化過程(設楽 2017)のなかで理解しておく。横板状部分の反りは台式土偶にみられる肩を後に引く形状と関わり、関連する資料に愛知県東光寺土偶(第Ⅳ③-4図7)がある。東光寺土偶は環状腕により台式土偶と関連づけて理解されるが全体的には奴凧形系列との類似度が高い。断面台形の胴部と別づくりの円柱状の脚は、脚間に除部表現をもつが、砂沢4土偶(第Ⅳ③-3図6)のような短脚と推測され、腰をめぐる隆帯とあわせてみると全形は谷起島30-2土



第Ⅳ③-4図　屈折像土偶ほか

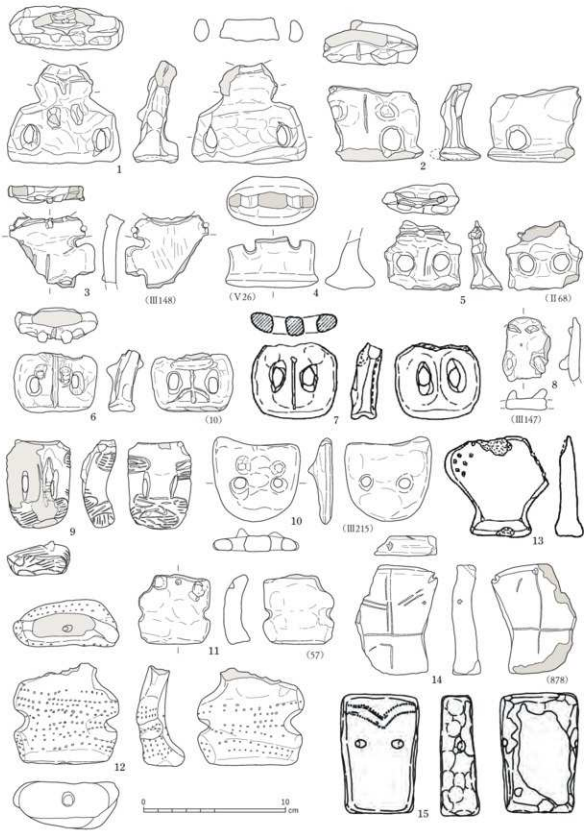
(1. 宮城県願行寺、2. 青森県二枚橋、3. 青森県今津、4. 岩手県河崎の欅、5. 滋賀県赤野井浜、6. 愛知県伊川津、7. 愛知県東光寺)

偶(第Ⅳ③-3図9)に近い。東光寺土偶の環状腕は背面が側方に向かって厚みを増す形状であり広げた両腕を後に引いたような造形となる。台式土偶に通有の造形が、台式土偶と奴凰形系列の要素を併せ持つ東光寺土偶に取り込まれたのであり、中間の資料を欠くが、その延長線上に田村C3SR301土偶を位置づけることができる。櫛描文については東北の弥生前期末を前後する奴凰形土偶(第3図7～10)にみられる文様の単純平行線化に関わるとも考えられるが、いずれの問題も時間・空間の懸隔を埋めがたく、さらなる資料・説明を必要とする。

(3) 台式土偶との関係

台式土偶は当初不明土製品とされていたが、近畿地方の土偶を網羅的に検討した片岡肇(1983)によってまず土偶としての位置づけが与えられた。田中清美(1992)の復元をもとに、鈴木正博(1993)は関連資料を「中実台式土器」として検討し、両腕系列→双孔系列→統長原系列となる変遷観を示した。鈴木はさらに青森県今津土偶(第Ⅳ③-4図3)を候補とする起源論にも言及し、台式土偶に関わる主要な論点を提示した。1997年の「土偶とその情報」研究会の成果をもとに大野薫(1999)は台式土偶(長原タイプ)の各資料を詳細に検討しながら4つの段階を設定した。大野による、胴と腕が別づくり(第Ⅰ段階)、板状の胴に双孔を穿つ(第Ⅱ段階)、小型化し台部が縮小(第Ⅲ段階)、台部がほぼ消失(第Ⅳ段階)という4段階は台式土偶の変遷を的確に捉えている[9]。大野(2000)はさらに近畿の終末期土偶を人形土偶・台式土偶・後頭部結髪土偶と整理するなかで、台式土偶については側縁に抉りをもつ鬼塚タイプ(第Ⅳ③-5図11・12)を独立させ、長原タイプと併存させた。秋山浩三(2002)は大野の集成・分類をもとに近畿終末期土偶について共伴遺物による時期の絞り込みをおこなった。包含層資料が多い土偶に対し大別4期細別6期[10]を設定し検討した結果、台式土偶の登場は船橋式以後で、とくに長原式を主体とする時期に集中することが確認された。大野の分類に対照すると宮ノ下土偶[9](第Ⅳ③-5図1)や鬼塚土偶(第Ⅳ③-5図12)が相対的に古く(船橋式～長原式)、雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)や長原Ⅲ215土偶(第Ⅳ③-5図10)が新しいなど(長原式主体で遠賀川系を伴う)、想定された変遷に一定度対応している。田井中土偶(第Ⅳ③-5図7)のように遠賀川系主体(長原式を伴う)の時期となるものもあるが、台式土偶はおよそ長原式前後に収まることが検証された。また、台式土偶の終焉に関わる問題として分銅形土製品との関係がある。台式土偶関連資料を分銅形土製品の起源とする考えは丁・柳ヶ瀬土偶(第Ⅳ③-5図13)をもって石川日出志(1987)により示唆されていたが、小林青樹は岡山県真壁遺跡の資料を基点として台式土偶から分銅形土製品への連続性を検討した。類似点の網羅的な指摘をもとに(小林2002)、台式土偶の最後段階とした雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)から真壁土偶、阿方土偶(第Ⅳ③-6図14)、龍川五条土偶(第Ⅳ③-5図15)を経て弥生中期中葉の分銅形土製品へと連なる過程を示した(小林2007)。他方、長原タイプ土偶の起源については、東北地方を示唆した鈴木正博(1993)以後積極的な議論はなかったが、近年は寺前直人(2015・17)が屈折像土偶との関係について検討を進めている。寺前は西日本における屈折像土偶の事例を検討するなかで、滋賀県赤野井浜土偶(第Ⅳ③-4図5)を東北地方の屈折像土偶と長原タイプ土偶をつなぐ資料と位置づけ、願行寺土偶(第Ⅳ③-4図1)、二枚橋土偶(第Ⅳ③-4図2)、河崎の柵疑定地土偶(第Ⅳ③-4図4)から赤野井浜土偶を経て宮ノ下土偶(第Ⅳ③-5図1)へいたる変化階梯を示した。西日本と東北の土偶に密接な関わりがあることを示す重要な見解であったが、金子昭彦(2019)が批判したように資料の帰属時期に対する注意が十分でなく再検討が必要となっている。成立過程は保留となるが、台式土偶は近畿地方で長原式を前後する期間に出現・展開し、分銅形銅製品との関係までが射程に入る資料となっている。

居徳3A589土偶は長原タイプ土偶の最末期に位置づけられる。居徳3A589土偶の乳房と双孔の位置関係をみると比較対象となるのは大野(1999・2000)の第Ⅳ段階にあたる長原Ⅲ215土偶(第Ⅳ③-5図10)である。長原Ⅲ215土偶は、西ノ辻土偶(第Ⅳ③-5図2)から田井中土偶(第Ⅳ③-5図7)へと胴・乳



第Ⅳ③－5図　台式土偶・分銅形土製品関連資料

(1. 大阪府宮ノ下、2. 大阪府西ノ辻、3･4･5･8･10. 大阪府長原、6･11. 愛知県麻生田大橋、7. 大阪府田井中、 9. 兵庫県雲井、12. 鬼塚、13. 兵庫県丁・柳ヶ瀬、14. 愛媛県阿方、15. 香川県龍川五条)

房・脇・腕の位置関係が失われていく変化の延長線上に位置づけられる資料で、双孔も小型・円形に変化している。第Ⅳ段階の長原Ⅲ215土偶や雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)は第Ⅲ段階の麻生田大橋10土偶(第Ⅳ③-5図6)や田井中土偶に比べて縦長で上開きの傾向があるが、居徳3A589土偶にみられる、乳房から双孔までの距離が長く、上開きの撥形と推定される形状は第Ⅳ段階に生じた変化の延長線上に位置づけられ、分銅形土製品の祖型(第Ⅳ③-5図14・15)により接近する。居徳3A589土偶にみられる脇腹の文様は結髪土偶との関連が想定される。結髪土偶の脇腹文様が2~3条の平行線となるのは大洞A'式期からの特徴である(金子 2004)。正中線の隆線表現は居徳遺跡出土の東日本系土器にみられる特徴でもあり影響関係が認められる(宮里 2017・18)。正中線が5本となるのは稀有な特徴であるが加飾化の傾向は雲井土偶にも認められる。雲井土偶は肩と腰にあたる位置に楕円形の囲み内を短線で充填する文様をもつ。同箇所への囲み充填文様の事例には刺突文土偶があり、肩パッドが顕著となる大洞A'式以降の刺突文土偶と類似する(金子 2004)。居徳3A589土偶は長原タイプ土偶の系譜上にあって、結髪土偶の相対的に新しい特徴を取り込んだものと評価できる。

第Ⅳ③-6図　後頭部結髪土偶ほか

(1. 香川県鴨部川田、2. 兵庫県長田神社境内、3. 大阪府東奈良、4. 島根県西川津、5. 大阪府目垣、6・7. 愛知県麻生田大橋、 8. 長野県)

(4) 後頭部結髪土偶・鼈面土偶との関係

後頭部結髪土偶は大野(2000)が近畿の終末期土偶のひとつして分類した1群であり、頭頂部から後頭部にかけての鶏冠状もしくは髷状の隆帯に特徴がある。秋山(2002)によれば滋賀里Ⅳ式～船橋式期の長田神社境内土偶(第Ⅳ③-6図2)から弥生前期後半の東奈良土偶(第Ⅳ③-6図3)までの時期に確認される。中部・東海地方との関連が指摘されるが、鶏冠状の結髪は鼈面との結びつきが強く鼈面土偶の問題にも繋がっていく。後頭部結髪(形)土偶は元来、前田清彦(1988)が有髯(鼈面)土偶のうちの1群を仮称した用語であり、立体的に張り出した後頭部の先端を結った造形の土偶(第Ⅳ③-6図6)を対象とした。前田(2000)は後頭部の表現が微弱な近畿の資料を後頭部結髪土偶の1類型として東奈良タイプと分類した。近畿との比較が中心となる本稿では大野の用語にしたがって近畿の東奈良タイプを後頭部結髪土偶と呼称するが、東奈良タイプは典型とされる古沢町タイプに先行して出現し、むしろ頭頂部の鶏冠状隆起は東奈良タイプから古沢町タイプへの移植である可能性が指摘される(前田 2000)。設楽博己(1999・2021)は弥生前期の島根県西川津土偶(第Ⅳ③-6図4)が非鼈面であることに注目して鶏冠状隆起の起源を農耕儀礼に関わる鳥装に求めたが、当否は判断しがたい。設楽(2021)が「鳥が飛ぶ空を意識した」とする西川津土偶の斜顔はやはり縄文土偶伝統の特徴であり鼈面と同様に継承されたものであろう。後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)は大部分が頭部のみの出土であるため全形は不詳であるが、麻生田大橋38土偶(第Ⅳ③-6図6)は肩と腰が隆起する扁平中実の胴部をもち、また鼈面土偶である長野県出土土偶(第Ⅳ③-6図8)にも肩パッドをもつ扁平な胴部が確認されるなど、胴部が伴うのであれば刺突文土偶に淵源をもつ形態が想定される。

田村C1SK1004土偶(第Ⅳ③-1図5)は極度に簡略化された後頭部結髪土偶で目の表現を欠きイレズミをもたない。消化器にあたる穿孔をもち土偶の系譜をひくが、弥生前期後半(西見当2式)の田村遺跡は弥生社会のネットワークにあり、同じく弥生前期後半の弥生集落から出土した鴨部川田土偶(第Ⅳ③-6図1)と併せてみるとむしろ弥生文化の構成要素といえよう。田村C1SK1004土偶は頭部のみで完結するが、仮に鴨部川田土偶を人頭立像とする見解(設楽 1999)が妥当であるなら類品となる。また近年には香南市北地遺跡から鼈面土偶の出土が伝えられた。小型の頭部片で、顎を突き出す斜顔には目・鼻・口が作出され、眼下には鴨部川田土偶に似た重弧文によるイレズミ表現がある。頭頂部は丸く結髪を欠く。弥生中期の事例となりそうであるが報告書が未刊であるため本格的な検討は今後に期したい。

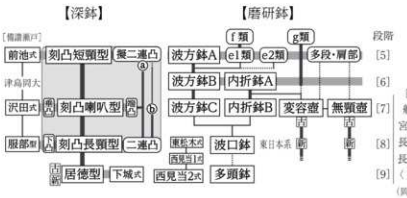
3 時期と背景

(1) 時期と地域間関係

関連資料を加えた南四国出土土偶の年代的位置は次のように整理できる。

大型装飾壺(連子窓文壺)[大洞A1式期]
居徳4D47土偶 [長竹式(新)-大洞A2式期]
居徳3A589土偶[長原式・遠賀川系(主体)-大洞A'式期]
田村C1SK1004土偶 [弥生前期後半(西見当2式)]
田村C3SR301土偶 [弥生時代中期前葉(土佐Ⅱ様式)]
田村Loc.34B188分銅形土製品 [弥生時代中期]
田村D1SK1030人面付土製品 [弥生時代後期]

南四国の編年(第Ⅳ③-7図、宮里 2022a・b)に照らすと、居徳4D47土偶は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」にあたり、居徳3A589土偶は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」から「居徳型深鉢・磨研鉢9段階」までを見込んだ時期となる。田村C1SK1004土偶は、弥生土器との併行関係が厳密でないがおよそ「居



第Ⅳ③－7図　地域間の併行関係

徳型深鉢・磨研鉢9段階」に対応する。南四国の縄文晩期系土器は、深鉢においては備讃瀬戸との関係が深く、磨研鉢においては九州との類似をみせつつ展開した。他方、居徳遺跡に突如貫入する東日本系文物は包含層において刻目突帯文土器と共伴する。東日本系土器は、居徳遺跡 1C区において下部のⅣD層(刻凸喇叭型深鉢・磨研鉢7段階)と区別して遺物を収拾したⅣB層から集中的に出土した。ⅣB層の時期幅は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」から「居徳型深鉢・磨研鉢9段階」にわたりほぼ弥生前期に対応する。「刻凸喇叭型深鉢・磨研鉢7段階」の新しい時期を含む可能性があるが、居徳4D47土偶に始まる土偶の出現および東日本系土器の顕在化は、およそ大洞A2式-遠賀川式出現に対応する時期となる。

居徳遺跡には50点を超える東日本系土器がある(宮里 2017)。故地が確かなのは大洞A1式の大型装飾壺(連子窓文壺)であるが、関根達人(2002)は胎土分析の成果を踏まえ、東北中部の工人により中部高地(もしくは西南関東)で製作されたものが北陸経由で居徳遺跡に搬入されたと考えた。鈴木正博(2003・04・07)は大洞A1式(居徳遺跡)からA2式(乾遺跡)にわたる資料を一連の現象と括って居徳遺跡と北陸の乾式を関連づけたが、筆者はこれを参考に、鉢形土器(1C1286・1C1379)や蓋や鉢にみられる、三角抉込みで作出された楕円形区画内に線文数条を充填する文様(1A75・1C1336・3A107)を北陸系土器として提示した(宮里 2018)。しかし湯尻修平(2022)が再考を促したように存外類品は乏しく、北陸が故地であったとしても土偶と同様に相当の変容を見込まねばならない。他方、中部高地との関わりを示す資料に浮線文土器がある(出原 2010：図10-141)。図によれば口縁が上方に立ちあがる鉢形土器の破片で、突出する口唇外端には眼鏡状隆起に類した文様があり、幅の狭い無文の頸部をはさんだ胴部には眼鏡状隆起に類する浮線文が認められる。出原(2010)は氷Ⅰ式に先行するタイプ、関根(2022)は女鳥羽川式としたが、筆者は離山式と氷Ⅰ式古段階の中間的な特徴を示す資料と考える[11]。西日本には50点を超える浮線文土器が知られるが(小林編 1999)、近畿を中心とする大部分の地域は氷Ⅰ式中段階であり(石川 2000)やや先行する事例となる。

以上を総合すると、東北-中部高地-北陸からの東日本系文化の影響は中間の近畿圏に先だって南四国に及んでいる。根拠資料に乏しいが、大型装飾壺・居徳4D47土偶・木胎彩色漆器など大洞A式期の東日本系文物は、三田谷文様(岡田 2000)に北陸との関係が指摘される山除地方や、南四国との関係が深い備讃瀬戸を経由してもたらされた可能性がある。居徳4D47土偶と類似点をもつ、花崗岩地帯で製作された居徳3A583土偶もあるいは備讃瀬戸からの搬入品といえようか。居徳3A589土偶の大洞A'式期になると近畿を中心とする台式土偶の影響圏に入り、東北からの影響は部分的なものとなる。居徳3A589土偶は後代に瀬戸内中心の分布圏を形成する分銅形土製品への接近を示しており、四国に生じた新たな時流の反映である。後頭部結髪土偶の弥生前期後半には、出土地が居徳から田村に移るなど土偶のネットワークが縄文系から弥生系に切り替わった様相を示す。鴨部川田土偶と北地土偶の類似は南四国と備讃瀬戸南岸域との関わりを示し、その関係性は分銅形土製品への傾斜を示

す居徳3A589土偶にも通じる。奴凰形系列に淵源をもつ田村C3SR301土偶は弥生中期であるが、稀少な類例である愛知県東光寺土偶(大洞A2式～A'式期)とは時期・地域・形態ともに懸隔が大きく、間をつなぐ類例を期待する状況である。いずれのケースにおいても型式組列間の対応関係は厳密でなく広域編年のさらなる整備が求められる。

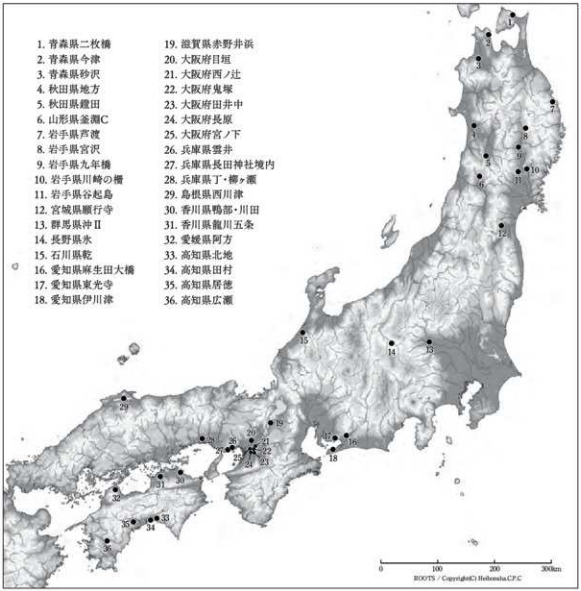
(2) 土偶の製作環境

南四国と関連地域の土偶を検討してきたが、全体を通じて得られる印象は「多様」である。近畿の終末期土偶は台式土偶を中心に相対的に定型化傾向が認められるが、それでも土器1型式内の型式変化は目まぐるしい。多様さの要因は要素のランダムな組合せや誇張にある。居徳4D47土偶や居徳3A589土偶に顕著であるが、同様の現象は三河地域の資料群にも認められる。麻生田大橋遺跡(愛知県埋蔵文化財センター1991、豊川市教育委員会1993)からは84点の土偶が出土している。包含層出土資料が多く厳密な時期の特定は困難であるが、およそ五貫森式から樫王式(大洞A式～A'式)の間に収まる(前田1993)。中実で立体感があり腰が張った大洞系の土偶(豊川市教育委員会1993：図版142-3)、近畿系の台式土偶(第Ⅳ③-5図6)、刺突文土偶系の腰と肩が張った後頭部結髪土偶(第Ⅳ③-6図6・7)を顕著な例として、頭部・胴部に各種のバラエティがみられる(前田1993)。顕著な3者がおよそ時期差であれば、系統が目まぐるしく変わるなかで、部分の表現に様々な選択肢をもち、型の規範が緩い製作環境にあったといえる。五貫森式期の田原市伊川津土偶(第Ⅳ③-4図6)は台式土偶と同様のプロセスで河崎の柵疑定地土偶(第Ⅳ③-4図4)や今津土偶(第Ⅳ③-4図3)の環状腕を取り込んだ形態をもち、独自性が際立つ。同様の環状腕をもつ豊川市東光寺土偶(第Ⅳ③-4図7)は長い胴部と腰部隆帯、想定される短脚と腕が側方に張り出す形状から、奴凰形系列に含めて考えることができる。大型でありサイズ感はむしろ結髪土偶に近い。胴部の断面は台形で、厚みに違いがあるが、第Ⅰ段階の台式土偶に類似する。環状腕は伊川津土偶の造形が地域で継承され奴凰形系列の腕部に移植されたと考えられる。背面の頸根にみられる横方向の隆帯は麻生田大橋の台式土偶(第Ⅳ③-5図6)にも認められ製作環境の連帯を窺わせる。伊川津土偶の肩が後方にやや反ることや東光寺土偶の環状腕の背面が側方に向かって厚みを増すことは、台式土偶一般に通じる特徴である。東北に根を持つ近畿や東海の土偶が、いくつかの共通理解のもとで諸要素を様々にアレンジし組み換えながら製作された状況を示す事象であり、南四国でも同様に居徳遺跡や田村遺跡において、時期とともに系統を違えながら規範の緩い型にしたがって諸要素を組合せつつ、地域固有の土偶を製作したと考えることができる。

結び

居徳遺跡にまつわる主要課題のうち土偶について南四国出土資料の枠組みで系譜を追求した。論拠となる資料は十分でないが、南四国の各土偶は、系統が順次入れ替わるなか、諸要素の任意の組合せ・アレンジが許容される、定型化にいたらない製作環境において生み出されたものと結論づけた。通常ならば他人の空似と断じられる遠方資料との比較が成り立つのは、東日本系文物が西日本の各地で多数確認されている背景に基づく。居徳遺跡の大洞式大型装飾壺には東北の工人・中部高地の材料・北陸経由といった来歴が示されたが、本稿が対象とした土偶や、木胎彩色漆器の理解を深めるためには未だ故地が比定できない東日本系土器に対する広域・詳細な比較研究が必要となる。継続して取り組みたい。

本稿をなすにあたり下記の機関からご助力を賜りました。記して感謝申し上げます。
愛知県埋蔵文化財センター、愛媛県教育委員会、愛媛県埋蔵文化財センター、大阪市文化財協会、
香川県埋蔵文化財センター、高知県立埋蔵文化財センター、神戸市埋蔵文化財センター、
香南市文化財センター、豊川市桜ヶ丘ミュージアム、田原市博物館、東大阪市立郷土博物館、
東大阪市立埋蔵文化財センター



第Ⅳ③－8図　遺跡の位置

註

(1)居徳遺跡出土土偶については調査区および報告書遺物番号により呼称する。

(2)田村遺跡出土土偶については調査区および出土遺構により呼称する。その他遺跡の資料については必要に応じて報告書の掲載番号を加える。

(3)金子(2014)が従来の「結髪形土偶」に対し、より簡素な「結髪土偶」の名称を提案した。本稿はこれに準じる。

(4)会田が列挙した特徴は次のとおりである。①頭髪部表現はアーチ状、②顔は45度上を向く、③乳房と肩は突起として連結される、④胸部に工字文や平行沈線文(連結)をもつ、⑤正中線があり下端には臍の表現(突起・刺突など)を伴う、⑥刺突文が充填されたバンツ状文様帯をもつ、⑦中空である、⑧赤彩もある、⑨背部に左右対称の文様(沈線・破線・円文)をもつ、⑩施文は沈線・キザミ・破線・円形竹管・刺突による、⑪顔表現は写実的でそれぞれに個性がある、⑫胴は全体に逆三角形で腕の表現は明確でない、⑬大洞A'式前後の土器を伴う。

(5)金子は結髪土偶の型式変化が明瞭な部分として、結髪の輪廓(弧状→逆反り)、腰部のバンツ状区画(水平→斜め)、プロポーション(腕の形骸化、細腰化)をあげた。また変化の傾向をしめす部分として、口周りの沈線文(顕在化)、正面肩の沈線文(顕在化)、胸の隆帯(大型品に限り略化)、正面脇腹の文様(<・⊂→2～3条の平行沈線)、背面文様(左右連続→左右分割)をあげた。いずれも大洞A2式から大洞A'式にかけて生じる変化とした。

(6)会田(1979)は、刺突文土偶の特徴を①頭髪部に冠状の突起をもつ(貫通孔あり)、②肩部にパッド状の隆起がある、③顔は上を向く、④体部に刺突または縄文が充填される、と整理した。金子(2004)によれば、肩パッドは大洞A'式古期に発達する。

(7)砂沢遺跡の報告では、C形態として、C1：脚が2本に分かれるもの、C2：脚の間に貫通孔があるもの、C3：両脚が密着するもの、に分類された。

(8)奴凧形土偶のほかは、a類：結髪形・刺突文融合類型の系譜をひく中空土偶、b類：結髪形の系譜をひく中実板状土偶、d類：扁平板状のヒトデ形、e類：脚部台状、f類：土版形の土偶、とされた。b類のうちにも奴凧形に類するものがある。

(9)資料を実見した結果、長原タイプ土偶初現期の様相を示すのは宮ノ下土偶(第Ⅳ③-5図1、東大阪市教委1996)であると考える。宮ノ下土偶は断面台形で肩に向かって撥形に開く体部に断面楕円形の腕が加えられた形態である。両側穿孔により腕部を作出することで胴部断面が扁六角形となる西ノ辻土偶(第Ⅳ③-5図2)とは顕著に対比される。大野が第Ⅰ段階とした長原Ⅲ148土偶(第Ⅳ③-5図3)は宮ノ下土偶と同様に胴部断面が腹側に狭まる台形であるが、胴および全形が直線的で、これに応じてか腕の内面が平坦となる。京大構内158(京大理文1997)の腕断面も同様である。第Ⅰ段階のなかでも宮ノ下土偶がより古式であろう。

(10)秋山は次の時期区分を設けた。A期：滋賀里Ⅳ式～船橋式(A1：滋賀里Ⅳ式、A2：船橋式)、B期：長原式(弥生土器を伴わない)、C期：長原式・弥生土器共伴期(C1：長原式主体、C2：遠賀川系主体)、D期：弥生前期(長原式など伴わない)。

(11)外面には漆が厚く塗布されるという(出原 2010)。出原恵三氏に写真・拓本を提供いただいた。記して感謝いたします。

文献

会田容弘、1979、「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第3巻第2号、山形考古友の会、27～43頁

秋山浩三、2002、「弥生開始期における土偶の意味」『大阪文化財論集Ⅱ』、大阪府文化財センター(秋山 2007に補訂収録)

秋山浩三、2007、「弥生大形農耕集落の研究」、青木書店

石川日出志、1987、「人面付土器」『季刊考古学』第19号、雄山閣、70～74頁

石川日出志、2000、「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、1221～1240頁

磯前順一、1987、「「屈折像土偶」について」『考古学雑誌』第72巻第3号、日本考古学会、1～29頁

磯前順一、1992、「関東以西の屈折像土偶—地域性への覚書—」「国立歴史民俗博物館研究報告」第37集、国立歴史民俗博物館、35～48頁

伊藤正人、2005、「顔の輪廻—土偶と土面の西東—」『古代学研究』第168号、古代学研究会、19～39頁

大坂拓、2009、「大洞A2式土器の再検討」『考古学集刊』Vol.5、明治大学文学部考古学研究室、39～74頁

大野薫、1999、「長原タイプ終末期土偶試論」「大阪市文化財協会研究紀要」第2号、11～29頁

大野薫、2000、「近畿地方の終末期土偶」「土偶研究の地平：「土偶とその情報」研究論集4」、勉誠出版、215～245頁

岡田憲一、2000、「三田谷Ⅰ遺跡出土土器文様をめぐる問題」「三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3」、島根県教育委員会他、81～84頁

岡田憲一、2016、「「凸帯文」と「遠賀川」の連接—奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価—」「魂の考古学—豆谷和之さん追悼論文集—」、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁

岡本健児、1963、「高知県広瀬縄文遺跡の調査」「高知県文化財調査報告書」第13集、高知県教育委員会、28～53頁

片岡肇、1983、「近畿地方の土偶について」「古代学叢論」、角田文衛先生古稀記念事業会、55～76頁

金子昭彦、2004、「結髪土偶と刺突文土偶の編年—東北地方北部における縄文時代晩期後葉の大形土偶—」『古代』第114号、早稲田大学考古学会、21～50頁

金子昭彦、2015、「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第2号、考古学研究会、56～77頁

金子昭彦、2019、「長原タイプ土偶の系譜」『考古学研究』第66巻第3号、考古学研究会、108～117頁

小林青樹、2000、「東日本系土器からみた縄文・弥生移行期の広域交流序論」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、1221～1238頁

小林青樹、2002、「分銅形土製品の起源—岡山県総社市真壁遺跡出土の分銅形土製品からの出発—」『環瀬戸内海の考古学　下巻』、古代吉備研究会、19～31頁
小林青樹、2007、「縄文—弥生移行期における祭祀と変化」『縄文時代の考古学11　心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』、同成社、257～273頁
小林青樹編、1999、『考古学資料集9　縄文・弥生移行期の東日本系土器』、国立歴史民俗博物館春成研究室
佐藤嘉広、1996、「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第81巻第2号、日本考古学会、31～60頁
佐藤嘉広、2004、「東北祭祀遺物の特殊性」『季刊考古学』第86号、雄山閣、44～48頁
設楽博己、1998、『鴈面の系譜』『長野県小諸市 氷遺跡発掘調査資料図譜 第3冊—縄文時代晩期終末期の土器群の研究—』、同刊行会、153～164頁
設楽博己、1999、「土偶の末裔」『新 弥生紀行—北の森から南の海へ—』、朝日新聞社、160～161頁
設楽博己、2004、「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集合併号、島根考古学会、189～209頁
設楽博己、2008 、「イレズミの起源」『縄文時代の考古学 10　人と社会—人骨情報と社会組織—』、同成社、207～218頁
設楽博己、2009、「東日本系土器の西方への影響」『弥生時代の考古学2　弥生文化誕生』、同成社、188～203頁
設楽博己、2017、「土偶形容器考」『弥生時代人物造形品の研究』、同成社、43～50頁
設楽博己、2021、『歴史文化ライブラリー514　顔の考古学：異形の精神史』、吉川弘文館
設楽博己・石川岳彦、2017、『弥生時代人物造形品の研究』、同成社
鈴木正博、1985、「「荒海式」生成論序説」『古代探叢』Ⅱ、早稲田大学出版部、83～135頁
鈴木正博、1987、「続大洞A2式考」「古代」第84号、早稲田大学考古学会、110～133頁
鈴木正博、1993、「荒海貝塚研究と大阪湾、「スティング」風に」『利根川』14、利根川同人、42～57頁
鈴木正博、2004、「大きな顔の居徳—弥生式初期におけるリスクマネジメントとしての「縄紋式イデオロギー」—」『利根川』26、利根川同人、16～26頁
鈴木正博、2007 、「「亀ヶ岡式」分布の南下と西日本の漆工芸—「彩色漆文様帯」による弥生式文化形成の視点の確立—」「環境史と人間」第1冊、明治大学学術フロンティア、63～91頁
須藤隆、1998、『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文から弥生へ—』、慕修堂
関根達人・柴正敏、2022 、「居徳遺跡出土の大洞A1式装飾壺の製作地と製作者」『高知県立歴史民俗資料館紀要』第26号、高知県立歴史民俗資料館、1～12頁
曽我貴行・佐竹寛、2002、「四国の低湿地遺跡—居徳遺跡群の諸様相—」『季刊考古学』第73号、雄山閣、49～52頁
田中清美、1992、「長原遺跡の土偶」「萃火」38号、大阪市文化財協会、6～7頁
出原恵三、2000、「土佐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』、木耳社、370～435頁
出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相：田村タイプと居徳タイプ」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁
寺前直人、2015、「屈折像土偶から長原タイプ土偶へ」『駒沢考古』第40号、駒澤大学考古学研究室、29～43頁
寺前直人、2017、『歴史文化ライブラリー449　文明に抗した弥生の人びと』、吉川弘文館
中村大介、2003、「祭祀遺物にみる縄文時代から弥生時代への変化とその意義(上・下)」「古代学研究」162・163、古代学研究会、22～37頁・21～33頁
中村良幸、1979、「岩手県宮沢遺跡発見の縄文時代終末期の土偶」「考古学ジャーナル」No.168、ニューサイエンス社、17～19頁
濱野俊一、1994 、「東奈良(HN-D-6-N・0)出土の弥生前期の土偶と調査概要」「大阪府下埋蔵文化財研究会(第29回)資料」、大阪文化財センター、33～40頁
藤井太郎・丸杉俊一郎、2000、「長田神社境内遺跡　第10次調査」「平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報」、神戸市教育委員会文化財課、171～178頁
前田清彦、1988、「縄文晩期終末期における土偶の変容—容器形土偶成立前夜の土偶の様相—」「三河考古」創刊号、三河考古刊行会、9～23頁
前田清彦、2000、「後頭部結髪状土偶とその周辺」「土偶研究の地平：「土偶とその情報」研究論集4」、勉誠出版、145～168頁
宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する—高知県における縄文時代研究の現状と課題—」『中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集』、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁

宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
宮里修、2022a、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
宮里修、2022b、「南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年」『海南史学』第60号、高知海南史学会、1～22頁
森田孝一、2003、「分銅形土製品私考」『山口大学考古学論集』、近藤喬一先生退官記念事業会、93～108頁
山内清男編、1964、『日本原始美術1』、講談社
湯尻修平、2022、「乾式土器について」『石川考古学研究会会誌』第65号、石川考古学研究会、1～16頁

報告書

愛知県埋蔵文化財センター（安井俊則）編、1991、『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
愛知県埋蔵文化財センター（加藤安信他）編、1993、『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集
青森県教育委員会（岡田康弘他）編、1986、『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第95集
秋田県教育庁社会教育課（山下孫継他）編、1974、『鎧田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集、秋田県教育委員会
秋田市教育委員会（石郷岡誠一）編、1987、「地方遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』、秋田市教育委員会
石川県埋蔵文化財センター（岡本恭一）編、2001、『松任市乾遺跡発掘調査報告書Ａ・Ｃ区下層編』、石川県埋蔵文化財センター
一関市教育委員会（工藤武）編、1982、『第4次谷起島遺跡発掘調査概報』、一関市教育委員会
茨木市教育委員会編、1999、『平成9･10年度発掘調査事業報告 付.目垣遺跡（第91－1次・第98－1次）発掘調査略報』、茨木市教育委員会
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（羽柴直人他）編、2006、『河崎の柵疑定地発掘調査報告書（第3分冊縄文時代編）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書474集
愛媛県埋蔵文化財センター（真鍋昭文他）編、2000、『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書84、愛媛県埋蔵文化財センター
大阪市文化財協会（永島暉臣慎）編、1982、『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大阪市文化財協会
大阪市文化財協会（永島暉臣慎）編、1988、『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告Ⅲ―（仮称）大阪市立第8養護学校建設に伴う発掘調査報告書―』、大阪市文化財協会
大阪市文化財協会（田中清美他）編、1992、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅴ―市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書―後編』、大阪市文化財協会
大阪府教育委員会（亀島重則）編、1994、『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』、大阪府教育委員会
大畑町教育委員会（橘善光）編、2001、『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集
北上市教育委員会（藤村東男）編、1987、『九年橋遺跡第10次調査報告書』北上市文化財調査報告第44集、北上市教育委員会
香川県埋蔵文化財調査センター（宮崎哲治）編、1996、『龍川五条遺跡Ⅰ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
香川県埋蔵文化財調査センター（森下友子）編、2002、『鴨部・川田遺跡Ⅲ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
京都大学埋蔵文化財研究センター編、1997、『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
高知県教育委員会編、1986、『田村遺跡群 第4分冊』、高知県教育委員会
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行他）編、2001a、『居徳遺跡群Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集(1B・1C・1D区)
高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2001b、『居徳遺跡群Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第66集(写真編)
高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集(1A・1C・1DN・1F区)
高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2003a、『居徳遺跡群Ⅳ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集(1E・2A・3B・4C区)

高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群Ⅴ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集(4A・4B区)
高知県埋蔵文化財センター（吉成承三）編、2004a、『田村遺跡群Ⅱ 第2分冊』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行）編、2004b、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集(5A・3A・1C・4D区)
神戸市教育委員会(丹治康明)編、1991、『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』、神戸市教育委員会
滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会(木戸雅寿他)編、2009、『赤野井浜遺跡第2分冊』
「土偶とその情報」研究会編、1996、『土偶シンポジウム5　宮城大会　東北・北海道の土偶Ⅱ』
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（岩橋孝典他)編、2001、『西川津遺跡Ⅷ』、島根県教育委員会
田原市教育委員会(増山禎之・鷲坂有吾)編、2015、『伊川津貝塚・平野貝塚調査概要報告書』田原市埋蔵文化財調査報告書第8集
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（手塚達弥)編、2001、『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第197集、栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団
豊川市教育委員会(林弘之・前田清彦)編、1993、『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』、豊川市教育委員会
東大阪市遺跡保護調査会(芋本隆裕)編、1975、「鬼塚遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ」、東大阪市遺跡保護調査会、1～19頁
東大阪市教育委員会(下村晴文)編、1996、『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書―第1分冊―』、東大阪市教育委員会他
兵庫県教育委員会(岡崎正雄他)編、1985、『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書30、兵庫県教育委員会
弘前市教育委員会編、1991、『砂沢遺跡発掘調査報告書―本文編・図版編―』、弘前市教育委員会
藤岡市教育委員会(荒巻実他)編、1986、『C11沖Ⅱ遺跡』、藤岡市教育委員会
真室川町教育委員会編、1986、『釜淵C遺跡 発掘調査報告書』山形県最上郡真室川町文化財調査報告書第1集、真室川町教育委員会

挿図出典

第Ⅳ③-1図　1・3・4・6：筆者実測(高知県立埋蔵文化財センター所蔵)、2：高知埋文(2004b)をトレース、5：高知埋文(2004a)をトレース、7：高知県教委(1986)、8：岡本健児(1963)をトレース
第Ⅳ③-2図　1：真室川町教委(1986)、2：秋田県教育庁社会教育課(1974)、3：中村(1979)、4：北上市教委(1987)
第Ⅳ③-3図　1：秋田県教委(1987)、2・3：石川県埋文(2001)、4：「土偶とその情報」研究会編(1996：岩手74-3)、5・11：北上市教委(1987)、6～8：弘前市教委(1991)、9・10：一関市教委(1982)、12：藤岡市教委(1986)
第Ⅳ③-4図　1：「土偶とその情報」研究会編(1996：宮城11-14)、2：大畑町教委(2001)、3：青森県教委(1986)、4.：岩手県埋文(2006)、5：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課他(2009)、6：筆者実測(田原市博物館所蔵)、7：筆者実測(愛知県埋蔵文化財センター所蔵)、
第Ⅳ③-5図　1・12：筆者実測(東大阪市立郷土博物館所蔵)、2：筆者実測(東大阪市立埋蔵文化財センター所蔵)、3～5・8・10：筆者実測(大阪市文化財協会所蔵)、6・11：筆者実測(豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)、7：大阪府教委(1994)、9：筆者実測(神戸市埋蔵文化財センター所蔵)、13：石川(1987)、14：筆者実測(愛媛県教育委員会所蔵)、15：香川県埋文(1996)
第Ⅳ③-6図　1：香川県埋文(2002)、2：筆者実測(神戸市埋蔵文化財センター所蔵)、3：濱野(1994)、4：島根県教育庁埋文(2001)、5：茨木市教委(1999)、6・7：豊川市教委(1993)、8：設楽・石川(2017)、9・11・13：高知埋文(2002)、10・12：高知埋文(2001a)
第Ⅳ③-7図　筆者作成　　第Ⅳ③-8図　筆者作成
※教育委員会は「教委」、埋蔵文化財センターは「埋文」とする。

④ 縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について

はじめに：居徳遺跡出土異系統土器の議論

居徳遺跡が提起する縄文・弥生移行期の問題に継続して取り組んでいる（宮里 2016・17・18・22a・22b・23）。居徳遺跡についての基本的な論点を示し（宮里 2017・18）、深鉢および磨研鉢の分類・編年により南四国の時間軸と他地域との併行関係を整理した上で（宮里 2022a・b）、系統が入り組んだ南四国の土偶を検討し（宮里 2023）、居徳遺跡の器物に現れる諸系統は東北・北陸・山陰・中部高地・東海・近畿・東九州を射程に考察されるべき主題であることを示した。この積み重ねを土台として、本稿では所謂「東日本系土器」の問題に改めて取り組む。

居徳遺跡をめぐる「東日本系土器」の研究は、出原恵三（2010）の取り組みを基に筆者（宮里 2017）が列挙・整理した後、次のように進展した。湯尻修平（2022）は乾式を細分する論考において、筆者が北陸系とした資料について他地域に類例を求めるべきとの考えを示した。関連する資料を実見する機会を得て、筆者自身も意匠や精巧さの違いから変容に重心を移した比較が必要と考えるようになったが、南四国出土土偶の系譜を検討するなかで複数系統の要素を束ね再構成された居徳4D47土偶において折衷の実態を把握した（宮里 2023）。また関根達人（2021・22）は「大洞系A1式装飾壺」[1]の来歴を胎土分析（火山ガラス組成）・集成資料により検討し「東北中部の本場の大洞式土器の製作に長けた人物によって中部高地か西南関東地方で製作され、北陸経由で居徳遺跡に搬入された」（関根 2022：11頁）と具体的な道筋を示した。さらに関根（2023）は「北陸系・中部高地系土器」について乾式・吉岡式・糞置式など関連する系統を具体化し、違和感・折衷・装飾性の高まりといった見解にもとづいて、北陸系土器の多くは「北陸西部出身者によって近畿以西で製作された」（関根 2023：16頁）と考えた。

以上のように居徳遺跡の「東日本系土器」は多系統・折衷・変様・変容といった概念をもって広域の資料を対象に比較すべき資料群であり、東日本に限らない「異系統土器」（今村 2011）として主題化するのがよいだろう。全容解明にいたる道のりは遠いが、本稿では新たに得られた知見をもとに居徳遺跡の異系統土器とその背景について考える。

1　異系統土器の諸例と系譜

主たる対象は香炉形土器、口唇部杯状突起、環状浮文、隆帯十字区画の各資料である。また新たな位置づけを得た木葉文小壺にも言及し、関連する問題について考える。

(1) 香炉形土器

香炉形土器として取り上げるのは居徳遺跡1A74（第Ⅳ④-1図1）・1C198（第Ⅳ④-1図2）・1A304（第Ⅳ④-1図3）である。報告時は器種不詳であり、1A74・1A304は「壺または注口土器の一部か」、1C198は「壺・胴部片と考えられるが、複雑な湾曲を呈しており、天地・左右とも明らかでない。…外面の重弧状の沈線4条を描き、重弧の内側に木葉文状の区画文を沈線により陽刻する。…搬入品の可能性がある」とされた。鈴木正博（2007）は、1A74が隆線による工字文が小型化・略化し浮線文化した特殊壺、1A304を沈線文で三叉文を構成した特殊壺とし、両者を「沈線文－隆線文系土器群」とまとめた。また関根達人（2023）は「非在地系土器」を検討するなかで、1A74・1A304について三叉文・内面調整・器壁厚の特徴を指摘しながら「特殊壺のような異形の袋物もしくは土製品」の可能性をあげ、系譜を不明とした。

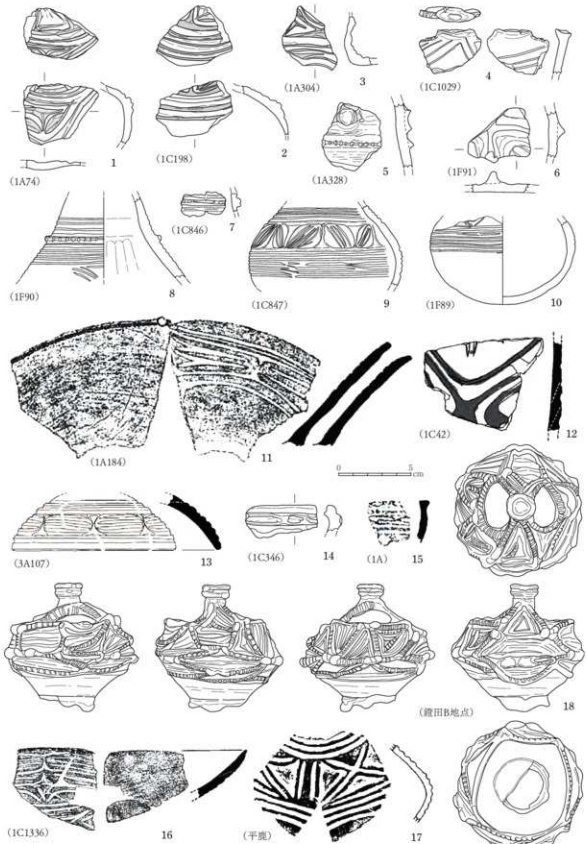
1A74・1C198・1A304は、黒色磨研仕上げ、長石・石英粒をふくむ肌理の細かい胎土(搬入品)、器壁の厚みや丁寧な内面ナデ、反りのある三角形パネルを接いだような屈折の強い器形、ミガキ隆帯による三叉文意匠などの共通性により、同一個体ないしは同型・同類の土器と評価できる。1A304には沈線表現も認められるが内折部位への施文であり、隆線基調における不徹底箇所とみられる。1C198が1C区Ⅳ B層出土であり、他の異系統土器と併せて考えれば筆者の第8段階(第Ⅳ④-5図)となろう。1A74・1C198はおよそ同一部位で、1A304は部位が異なる。1A74は三角形パネルの底辺を直角に近い角度で接合した形状である。下方は曲率が小さく面状で、上方は横方向に湾曲して内くぼみの形状となる。1C198も同様であるが下方については外膨らみで壺胴部のような形状となる。1A304は三角形パネルが谷折りに接合された形状で、上方はやや内反り、わずかに遺存する下方には横方向に連ねたパネルの接ぎ目らしき縦方向の隆起がみられる。3点いずれも器壁の厚みが一定せず2～5㎜の振幅がある。厚みの違いは横方向に顕著で粘土紐積上げとは異なる複雑な造形を思わせる。文様は中心の(Y字形に類する)三叉文意匠を隆線表現の三角形が囲む、一種の重三角文を基調とする。1C198の下方は横走2条隆線であり部位により文様構成が異なる。

これら3点を香炉形土器と考えるのは鐙田遺跡出土資料(第Ⅳ④-1図18)による。鐙田遺跡(秋田県教育庁社会教育課編 1974、根岸編 2021)は秋田県湯沢市に所在する低湿地遺跡で、1974年に圃場整備事業に伴う発掘調査が実施された。A地点出土の結髪土偶により居徳遺跡との関わりを指摘した遺跡であるが(宮里 2023)、香炉形土器はA地点の東30mにあたるB地点から出土した。B地点には詳細な報告がなく共伴遺物は不明である。香炉形土器は器高8.6㎝、胴径8.8㎝の小型品で、算盤玉状の胴部に端部が隆起する中実の筒状部と高台状の底部がつく。胴部は、刻目隆帯に縁取られた三角形・台形・方形・杏仁形の区画がパズルのように組み合って造形される。胴最大径から下方にかけては杏仁形区画が上下二段で交互に連接され(下段)、最大径から上方にかけての内傾部分には方形や台形を間に挟みながら三角形区画が交互に連接される(中段)。中段上端には、対角位置に三角形区画が強い屈折をもって連接され頂角が筒状部につながる(上段)。連結のない両側は楕円形の透孔で香炉の口となる。刻目隆帯の各所には、連結点を中心に一対または単独の槌状隆起が加えられる。区画内には任意の辺に平行する凹線を連ねて重三角文や集線文を描出する。文様部をふくめ外面はミガキ仕上げであるが細部は粗い。色調は褐灰色で黒色磨研にはいたらない。内面は完形のゆえ十分な観察ができず厚みの振幅は確認できなかったが、丁寧なナデ仕上げであり下位にはコゲも認められた。

居徳遺跡の3点が鐙田の香炉形土器と同形であるなら、1A74・1C198は中段から上段にいたる屈折部分、1A304は上段の筒状部に近い箇所と推定できる。3点が同一個体であるなら1A304と1A74がつながる可能性があり、1A304の右上斜辺は透孔に沿った部位となろう。居徳と鐙田を比較すると、居徳は鐙田よりサイズが大きく倍近くとなる。また居徳には刻目隆帯がみられず、区画内の文様も平行線基調の鐙田に対し居徳は三叉文が中心となる。類例に乏しい現時点では両者の類似性を強調したいが、土偶ほどではなくともやはり重要な差異があり、いずれ経由地での変容に焦点が移るだろう。一方で鐙田の香炉形土器自体も型式や時期が未決でありさらなる検討を要する。

(2) 口唇部杯状突起

口唇部杯状突起として検討するのは居徳遺跡1C1029である(第Ⅳ④-1図4)。報告では「深鉢～甕…波状口縁」とされた。「東日本系」とはやや性格が異なるが異系統土器の議論に与する資料である。鉢形土器の口縁とみられ、器壁の厚みは5㎜程度、やや外傾しながら上方に立ちあがる器形である。口縁は緩い波状であり波頭部の口唇に突起をもつ。口唇部の突起は上面が楕円形、正面が方形で、上面は浅く凹む。突起は内外に張り出すが内方の張出しがより強い。突起をのぞく口唇部はナデで面取りされ細かい刻みが連続する。器面の内外にはヘラ描きの重弧文が施される。外面は突起の下位で連接



第Ⅳ④－1図　居徳遺跡出土異系統土器(1～16)と関連資料(17・18)

する2～3条の重弧文であり、内面は突起位置を斜めに横切る3条の重弧文である。外面については規則的な重弧文を想定できるが、内面は文様の展開を予想し難しい。外面の下端には隆起部が僅かに遺存し、浮文や隆帯があったと考えられる。色調は鈍い黄褐色で胎土にはチャート粒を含み、全体には在地産弥生土器の印象をあたえる。

1C1029は在来土器のなかでは波状口縁鉢(宮里 2022b)に近い。波状口縁鉢は波状口縁の内面をめぐる2～3条の重弧文が特徴で、波状口縁方形浅鉢および内折口径鉢から変化した第8段階の磨研鉢である(第Ⅳ④-5図)。両者の類似点は内面の重弧文のみでむしろ差異点が際立ち、口唇部杯状突起、口唇部刻み、外面重弧文については他の系統に類例を求める必要がある。

口唇部刻みについては適当な事例を欠くが、例えば居徳1A184(第Ⅳ④-1図11)のような北陸系浅鉢の口唇部に細かな刻みがあり、また突帯文深鉢の刻みが細密化する時期でもあるため要素自体は在地にもある。

波状口縁鉢の内面重弧文は2条に始まり多条化すると考えたが(宮里 2022b)、内面に複数条の重弧文をもつ鉢は北陸にもあり、関根達人(2023)は糞置式や乾式の鉢(第Ⅳ④-3図5・6)との関わりを示唆した。設楽博己(2004)は智頭枕田の資料(第Ⅳ④-2図22)に北陸と山陰の交流を読みとったが、三谷(第Ⅳ④-2図11)と智頭枕田(第Ⅳ④-2図23)は重弧文連接部に縦スリットを入れる点が共通しており、波状口縁鉢は北陸・山陰・四国の繋がりを考慮すべき資料ともなる。居徳1A184の外面重弧文は智頭枕田(第Ⅳ④-2図23)に類例がありやはり山陰との関係が射程に入る。

口唇部杯状突起は時期を問わなければ縄文土器にしばしばみられる特徴である。第8段階併行(大洞A式併行)で類例を求めると、東北地方の台付鉢(鎧田遺跡他)にみられる精巧なつくりの突起、その略化形態とみられる北陸(第Ⅳ④-3図13)・中部高地(第Ⅳ④-4図5)・東海(第Ⅳ④-4図11・17)の事例が挙がる。やや時期をひろげると山陰地域の原田遺跡1区(第Ⅳ④-2図16)に関連資料がある。縄文後期後半から晩期末までをふくむ包含層から出土したもので、全形は不明であるが磨研鉢の口縁部にあたる。器面調整はミガキに至らない丁寧なナデで、色調は橙色、口唇部は丸みのある面取りで、口縁形態は筆者分類(宮里 2016)のg類にあたる。口唇部の突起は居徳1C1029の突起が2つ連なったような形状で、上面が浅く凹み内側への張出しが強い。突起の正面形は両端が高く隆起しており、黒川式や篠原式に通有のリボン状突起から派生した形態と評価できる。第5～7段階(第Ⅳ④-5図)の刻目突帯文期のなかでもやや時期が下るとみられるが、居徳1C1029との間には時期差がある。山陰との関係を示唆する資料ではあるが、時期差と変様過程について検討の余地が残る。

(3) 環状浮文

居徳遺跡1A328(第Ⅳ④-1図5)は胴部突帯をもつ刻目突帯文深鉢で環状浮文の添付に特徴がある。突帯はやや低平だが稜が明瞭な垂下気味の断面三角突帯で、小さく浅いV字ないしD字形刻みが加えられる。外面調整は突帯を境界に上下で異なり、上部はナデ、下部は繊維束の擦痕で仕上げられる。刻目突帯の形状によれば第8段階(第Ⅳ④-5図)の資料となる。環状浮文は粗雑な五角形に近い形状で、突帯からやや間をおいた上部に縁辺を粗くナデつけるようにして添付される。

類似する環状浮文は山陰地域の深鉢(第Ⅳ④-2図17)にみられる。同類の資料については幸泉満夫(2019・20a)による谷尻系の成立に関連した位置づけがある。幸泉によれば、環状浮文のルーツは東日本の瘤付文系にあって、日本海沿岸で継承されたものが谷尻式にまで遺存するのであり、居徳1A328の類例は谷尻式成立前後に集中する。山陰で環状浮文をもつ該期の深鉢はしばしば口唇部に突起をもち、杯状のもの(第Ⅳ④-2図17)も認められる。上述の口唇部杯状突起の類例ともなり得るが時期差が大きい。強いてひろく類例を求めると東海(第Ⅳ④-4図11)や北陸(第Ⅳ④-3図22)に関連資料がみられるが、時期差や変容の問題を解決せねばならない。

(4) 隆帯十字区画

居徳遺跡 1F91 は「縄文／壺／胴体部」と報告されたが器種同定は困難である。ケズリないし繊維束で粗く仕上げられた内面は黒く煤ており壺のような袋状の器形が想定されるが、横方向は曲率が小さく板状であり全形を窺いがたい。際立った特徴は外面の十字に交叉する隆帯である。十字の隆帯は裾幅 1cm、高さは5～8mmの断面隅丸台形で刻目などはなく素文である。縦の隆帯は交差部分を境に下方が高く、器形が内傾する上方に向かって次第に高さを減じる。隆帯に区画された各面には、隆帯裾に沿った彫去凹帯により隅丸パネル状の浮出しが作出される。浮出しには２条の平行沈線があり先端が楕円をなすように収束する。外面はミガキ仕上げで、色調は赤みを帯びた橙色、胎土はチャート粒が多く黒雲母を僅かに含む。在地産でもよいがやや違和感がある。層位では限定できないが、装飾手法の共通性により「東日本系」の範疇に入る。

居徳遺跡には隆帯装飾の類品に「縦隆帯」土器(宮里 2022b)があるが、横隆帯や浮出しがなくやや類似度が低い。十字区画およびパネル状の浮出しにおいては 1C42 や 1A308 が類品となる。1A42 (第Ⅳ④-1 図 12)は板状の土器片で、内外面ともに黒褐色のミガキ仕上げである。外面は十字形の彫去により器面が分割され、各区には凹線や弧状の彫去により浮出しが作出される。凹部には丹彩が認められる。浮出しには２条の平行沈線があり先端は直線的に収まる。やや離れた位置に方向の異なる沈線の端部が認められ、全体には叉状の意匠であった可能性がある。1A308 もほぼ同様の構成であるが器壁が厚くつくりも粗い。隆帯と彫去の違いを措けば意匠の類似度は高い。ただし 1C42 は 1C 区Ⅳ D 層出土であるため他の東日本系に先行する第７段階(第Ⅳ④-5図)となり時期差が問題となる。

隆帯に区画されたパネル状の浮出しには三谷遺跡の事例(第Ⅳ④-2 図 8)がある。頸が窄まる壺形の器形で、低平な刻目突帯で上縁を区切った胴部に、同じ刻目突帯で縁取った隅丸方形区画を上下二段で横方向に配置する。隣り合う隅丸方形区画の間は上端が三叉形、中位は十字形となる。区画内には凹線による隅丸方形の浮出しが作出され、内部には重圏文や重弧文が充填される。色調は橙色で全体につくりが粗く弥生土器の様相を呈する。居徳 1F91 とは器形が大きく異なり意匠のみの類似となる。

さらに広く類例をもとめると長野県一津遺跡に隆帯を縦横に配する鉢(第Ⅳ④-4 図 9)がある。縦隆帯の位置に波頭部をもつ波状口縁の鉢とみられる。下半部は浮線(上半)と隆線(下半)が混在する集線帯で、上半部には大振りな隆帯が縦横に付せられる。縦隆帯は幅 1cm、高さ 1cmで、集線帯と接する下端から上方に向かって高さを増し、最大径位置をピークに口縁に向かって低まる。縦隆帯のやや下寄り位置では大振りな眼鏡状隆帯が交叉し、やや上位には横方向の大振りな口唇状突起が、縦隆帯からやや間をおいた均等位置に付せられる。隆帯は区画帯というよりは主たる装飾要素であり居徳 1F91 とはやや異なる。参考資料としておく。

(5) 木葉文小壺

木葉文小壺も「東日本系」ではないが異系統問題の重要資料である。近年、春成秀爾(2021・2023a・b)により新たな位置づけが示された。該当資料は居徳遺跡 1C846・1C847・1F89・1F90 (第Ⅳ④-1 図7～10)である。4 点は多条のミガキ沈線、チャートを主に黒色ガラス質岩粒を含む胎土、色調・調整の共通性などにより同類・同型の資料と判断できる。1C846・1C847 は 1C Ⅳ B 層出土で第８段階(第Ⅳ④-5図)相当となる。1C847・1F89 は同一個体とみられるが接合部はない。1F90 は器壁が厚くまた復元径も大きいため、1C847・1C848 とは別個体となる。1C846 は略化した眼鏡状隆帯がめぐる小形で、春成(2021)の復原のように頸部突帯の可能性があるが接合部はない。1C847・1F89 は最大径 10.5cmの小型壺で、頸部は径 6cm程度まで窄まる。胴部の上下に配されたミガキ沈線による集線は上が５条、下が６条で中間に木葉文意匠の文様帯を挟む。木葉文帯は、上下交互に配される三叉形彫去により作出された、一方の対角が隅丸となる平行四辺形様(木葉形)の浮出しに、４本前後の沈線を三叉形先端の凹点

を結ぶ方向に充填する。両端が束状となる平行沈線は全体が紡錘形を呈する。1F90では木葉文帯の上に5条集線、刻目突帯、4条集線、無文部つづく。刻目突帯が頸胴部境界となり頸部下端にも集線帯をおく構成が復元できる。

出原(2010)は1C847について、北陸の浮線文を木葉文の起源とする設楽(2004)の考えをもとに、北陸系土器の意匠から派生した最古の木葉文と位置づけた。1F89・1F90については胎土・色調により弥生土器化したものと評価した。春成秀爾(2021・23a・b)は木葉文をA～E式に分類し、遠賀川式最古の木葉文を析出した上で、木葉文の出現過程を櫂原式→三谷式→居徳式とした。窄口形鉢(第Ⅳ④-2図3)の三谷を居徳に先行させ、櫂原式と居徳式の間におく理路は説得力があるが、文様においてはむしろ櫂原式と居徳式の類似度が高く、中間の三谷式は迂回する印象である。春成(2021)が例示した鹿児島県仁田川付近採集の石棒(藤森 1942)は居徳の木葉文と酷似しており、櫂原式文様にかかわる一連の議論(深澤 1989、設楽 2009、宮地 2017など)にしたがって別素材に継承された意匠の環流を考慮する必要がある。いずれにせよ、篦描き木葉文の発生地を備讃地域とした春成(2023a・b)の指摘は大きな意味があり、後述のように三谷と居徳の木葉文に関わる系統問題は山陰と四国の繋がりから検討すべき課題となる。

2　異系統土器の背景

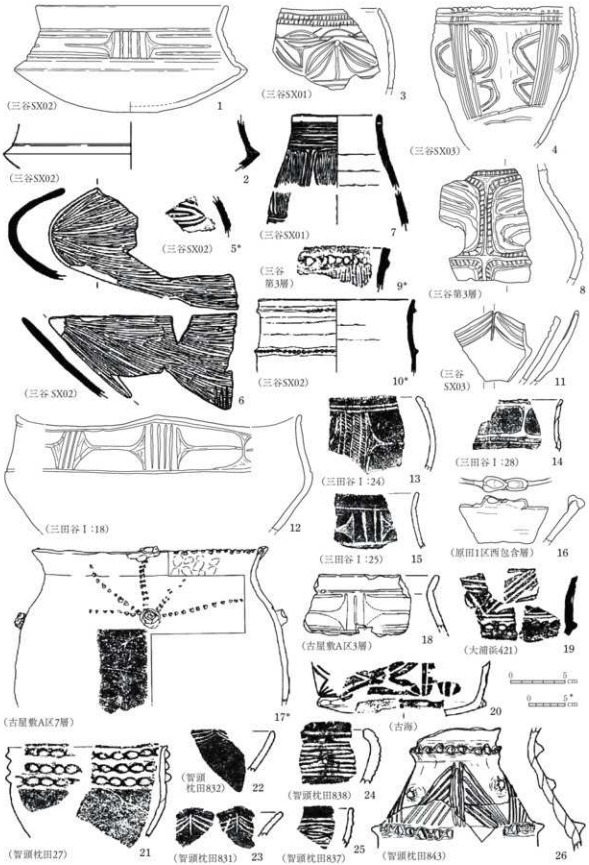
居徳遺跡出土の異系統土器について新たな知見を加え検討した。土偶の系統(宮里 2023)を併せると関連する地域には東北・北陸・中部高地・東海・近畿・山陰が挙がり、これら地域との関係をより具体化することがさらなる課題となる。居徳遺跡に現れた異系統土器は、大洞式縦区画帯装飾壺をのぞけば、模倣・再現度の低い変容型や、一部要素のみの移植である。こうした考古学的事象を歴史事象として適切に問題化するために、いましばらくは関連資料の整理を積み上げねばならない。以下、いくつかの資料を概括し背景についての見通しを示す。

(1) 舟形土器と浮線文

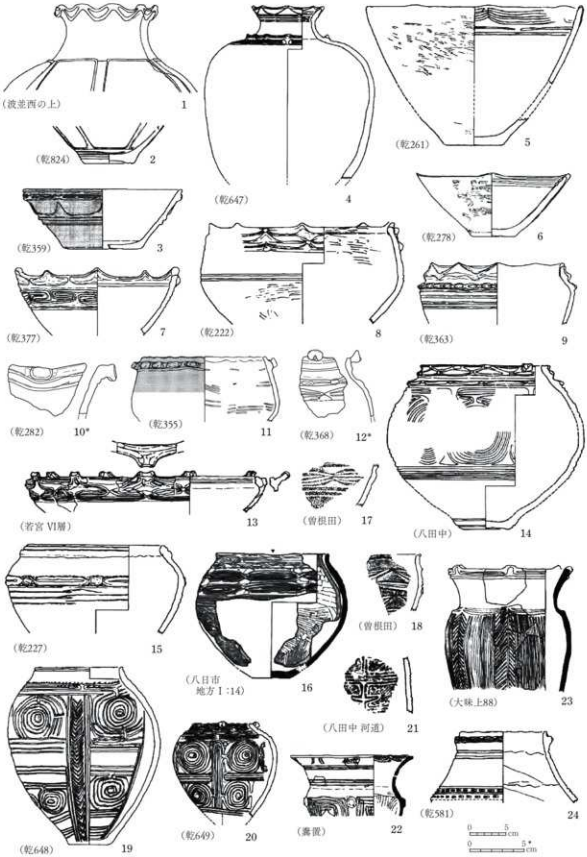
舟形土器は楕円形の底部から両端が軸状に立ち上がる器形が特徴で、しばしば側面および外底に文様が加えられる。楕円形の底部から上方に立ちあがる器形(富山県下老子笹川遺跡、香川県林・坊城遺跡など)もあるが、それらは筒形土器の類品と思える。舟形土器には長野県一津遺跡(第Ⅳ④-4図2)、大阪府池島・福万寺遺跡(第Ⅳ④-4図24)、徳島県三谷遺跡(第Ⅳ④-2図6)の類例があり、池島・福万寺の浮線文によれば中部高地を発信源に波及したとみられる。一津は隆線の工字文、池島・福万寺は網目の一部が交叉して二重となる浮線文であり、女鳥羽川式から氷Ⅰ式古段階にかけての資料となろう。三谷遺跡には舟形土器と共に浮線文土器(第Ⅳ④-2図5)があり、池島・福万寺の近傍では讃良郡条里遺跡から浮線文鉢(第Ⅳ④-4図23)が出土するなど、舟形土器は大洞A式期において浮線文土器と結びついて波及した希少品と考えることができる。居徳遺跡には浮線文土器が少ないが、女鳥羽川式(第Ⅳ④-1図14)や離山～氷Ⅰ式古段階(第Ⅳ④-1図15)の鉢があり、該期の波及圏内にあったと分かる。

浮線文土器と舟形土器の西日本への波及については久田正弘(2013)の論考がある。久田は舟形土器の類例を胎土の特徴と併せて検討し、池島・福万寺の胎土が長野県域の資料と異なることを指摘しながら、舟形土器波及の背景にある大洞系土器－北陸の関係を示唆した。さらに該期の交流にかかわる資料として大洞系縦区画帯装飾壺、筒形容器、浮線渦巻文土器、柴山出村式土器などを挙げ、問題のひろがりを示した。

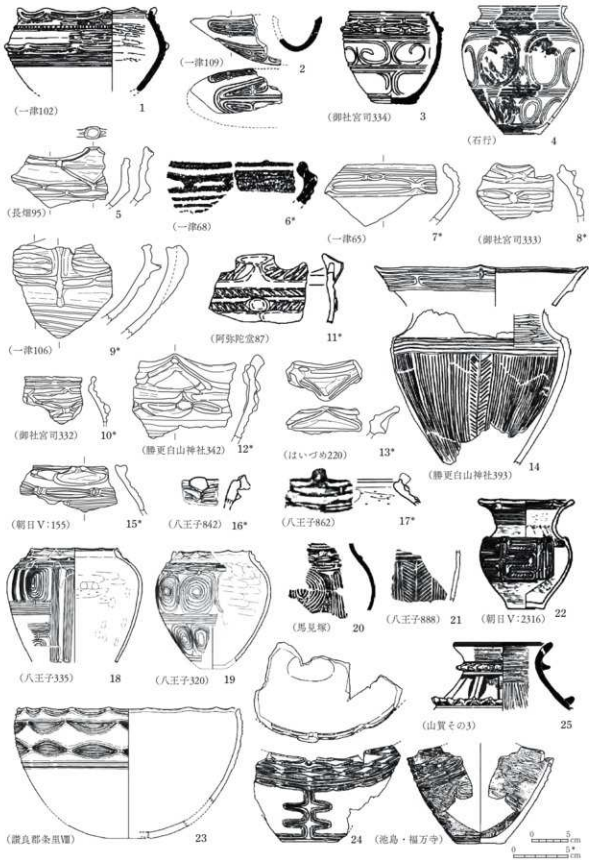
浮線文の波及については、設楽博己(2004)が木葉文の起源を浮線文に求める論考で言及しており注意される。問題とされたのは杉田型レンズ状浮線文(鈴木 1985)とされる陽刻の紡錘形意匠であり、三分岐浮線(第Ⅳ④-2図24、第Ⅳ④-4図7)がレンズ形・紡錘形に文様化したものと理解される。設楽



第Ⅳ④－2図　関連資料(徳島・島根・鳥取)



第IV④－３図　関連資料(石川・福井)



第Ⅳ④－4図　関連資料(長野・岐阜・愛知・大阪)

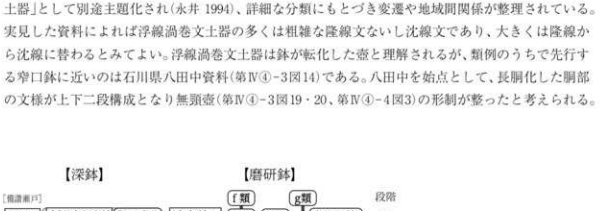
は八日市地方の浮線文鉢(第Ⅳ④-3図16など)を北陸特有の長竹式浮線文系土器と類型化し、北陸から山陰に及んだ浮線文が木葉文を成立させたと考えたが、紡錘形に文様化した浮線文は各地で確認されており(第Ⅳ④-2図5、第Ⅳ④-3図17、第Ⅳ④-4図23)、むしろ広域に波及する浮線文の時期的な特徴と思える。本稿の関心おいては、居徳遺跡に紡錘形の浮線文がみられず、派生形としての楕円形浮出しが顕著である点が重要となる。

(2) 突起と隆帯、浮線渦巻文土器の展開

東北や中部高地、北陸を発信源として壺や鉢などの精製器種が西日本に波及する時代状況であるが、北陸・東海からの発信を考慮すべき器物に浮線渦巻文土器がある。浮線渦巻文土器は製品自体ではなく要素や傾向の波及を検討すべき資料であり、具体的には角状の突起や隆帯の強調が論点となる。

角状の突起は大洞系縦区画帯装飾壺の口縁に顕著であり、頂角が鋭め上方に突出する立体的な三角形が横繋ぎで口縁をめぐり突起帯を構成する(第Ⅳ④-3図4など)。角状突起帯は鉢に転用され北陸や飛騨地方を中心に多様な展開をみせる(第Ⅳ④-3図7・9、第Ⅳ④-4図12・13)。突起の造形は眼鏡状隆帯にもおよび、連接部を突出させた角状突起帯が大洞系縦区画帯装飾壺の口縁(第Ⅳ④-3図1)や鉢形土器の口縁および文様帯縁辺(第Ⅳ④-4図1)を飾る。また対向三角文帯の連接部が小さく突出したり(第Ⅳ④-3図14)、眼鏡状隆帯の連接部が環状に隆起したり(第Ⅳ④-3図15)、杯状に類する突起が突起帯となって口縁をめぐったり(第Ⅳ④-3図11)、眼鏡状隆帯が高く隆起する(第Ⅳ④-3図9・24)など、該期の土器は様々な様態で「突起・隆起傾向」を強める。こうした角状突起帯・眼鏡状隆帯は北陸・飛騨・中部高地を中心に、特徴的な窄口形の鉢形器種を構成する(第Ⅳ④-3図8・9・15、第Ⅳ④-4図1・8・12)。これら突起・隆起傾向が顕著な窄口形鉢形土器を基体に産み出されたのが浮線渦巻文土器である。

浮線渦巻文土器は杉原荘介(1949)が西志賀遺跡出土資料のうちに見出した特異な器種であり、久田正弘(1988)、神村透(1988)らによる集成・検討により、東海・北陸・中部高地にかけて分布する、所謂「大地型壺」(江崎 1965)につながる器種として内容が整理・把握された。浮線渦巻文土器をふくむ型式変化は紅村弘(1956)、石川日出志(1981)により3段階(無頸→短頸→長頸)に整理され、久田(1988)が地域ごとの組列を示したことにより概況が把握された。相対的に新しい長頸の資料群は「沈線紋系土器」として別途主題化され(永井 1994)、詳細な分類にもとづき変遷や地域間関係が整理されている。実見した資料によれば浮線渦巻文土器の多くは粗雑な隆線文ないし沈線文であり、大きくは隆線から沈線に替わるとみてよい。浮線渦巻文土器は鉢が転化した壺と理解されるが、類例のうちで先行する窄口鉢に近いのは石川県八田中資料(第Ⅳ④-3図14)である。八田中を始点として、長胴化した胴部の文様が上下二段構成となり無頸壺(第Ⅳ④-3図19・20、第Ⅳ④-4図3)の形制が整ったと考えられる。



第Ⅳ④-5図　地域間の併行関係

縄文・弥生移行期における在来器種の壺化という点において、浅鉢変容壺、深鉢変容壺、南四国の浅鉢系無頸壺と同類であり、「白山・御嶽環状ネットワーク」(永井 1994)において生じた、縄文系弥生文化の一種と考えることができる。浮線渦巻文土器の系統は被熱痕の顕著な壺であり[2](永井 1994)、壺文化受容の特異な一様態として主題化されるべき資料である。沈線紋系土器の段階にいたっても同型の壺(第Ⅳ④-3図21・22・23、第Ⅳ④-4図14・22)が北陸から東海にかけて共通してみられ、特異な壺文化が持続的に分布圏を形成したと評価できる。

突起・隆起装飾帯をもつ窄口形鉢から浮線渦巻文土器、沈線紋系土器にいたる一連の資料のなかには、杯状に類する突起(第Ⅳ④-3図10・11・20、第Ⅳ④-4図16・17)や環状浮文(第Ⅳ④-3図15・22)が散見される。要素・傾向の波及を議論する土台となるが、関連する事象に豆谷和之(1995・2002)が「指づくね貼付突帯」とした遠賀川式壺に現れる特徴的な突起帯がある。指づくね貼付突帯をもつ壺(第Ⅳ④-4図25)は近畿を中心に分布し、豆谷はこの突帯の淵源を大洞C2式～A式(古)の浅鉢に特徴的な眼鏡状隆帯に求め、馬見塚式や下野式、浮線渦巻文土器を加えて関係性を検討した。豆谷(2002)は問題となる時期差を解消するため、木製品など別素材に移植された意匠の環流を想定したが、筆者は要素・傾向の波及という観点から、指づくね貼付突帯を近畿で生じた「突起・隆起傾向」の派生態と考える。関連する事例に鳥取県智頭枕田遺跡の壺(第Ⅳ④-2図26)がある。智頭枕田の壺は、頸部の上下境界につよいユビオサエで連続的に作出した突起帯をめぐらし、頸部には上向き三角形の中心に分割線をひき両側に斜辺に平行する集線を充填した文様モチーフを4単位おく。三角文のあいだの無文部には乳突起が加えられる。図では欠けているが外反する口縁は端部がやや肥厚し、口唇部はナデにより浅く凹む。指づくね貼付突帯壺は特殊文様に特異性があるが[3](豆谷 1995)、智頭枕田にはさらなる変容が認められる。智頭枕田の指づくね貼付突帯壺は筆者の第9段階(第Ⅳ④-5図)併行とみられるが、これに先行する雌山式浮線文鉢(第Ⅳ④-2図24・25)の時期には、眼鏡状隆帯に類する突帯を3条めぐらした深鉢(第Ⅳ④-2図21)があり、「突起・隆起傾向」の影響が持続的に及んだともいえる。

(3) 居徳、三谷と山陰・北陸との関係

三谷遺跡には前述のように中部高地(第Ⅳ④-2図5・6)との繋がりがみられるが、窄口形鉢(第Ⅳ④-2図4)の重弧文が長竹式に類似し、短頸壺(第Ⅳ④-2図7)の縦区画帯が北陸経由で受容した大洞式縦区画帯装飾壺の意匠と考えられるなど、北陸との関係も認められる。他に内面重弧文の鉢(第Ⅳ④-2図11)は北陸-山陰との関係を示唆しており系統は多岐にわたるが、三谷の系統をより具体的に示す資料として「三田谷文様」があがる。岡田憲一(2000)によれば、三田谷文様は三角刺込文を横位・縦位において文様を構成した北陸系文様のうち晩期終末に現れたものを指す。島根県三田谷Ⅰ遺跡の資料が典型であり、他に島根県古屋敷遺跡や鳥取県古海遺跡など山陰地域に類例がある。三谷遺跡の関連資料(第Ⅳ④-2図1)は、T字形三叉文と器形において三田谷文様鉢との類似度が高く、両者の直接的な関係を窺わせる。岡田は「横位三角刺込文の断絶」や「縦位連結三角形刺込文の退縮」の方向で変化(第Ⅳ④-2図12→15)した先に三谷資料を位置づけた。三谷資料は、浅鉢変容壺(第Ⅳ④-2図14)に連動する壺化の進んだ器形(鈴木 2000)をもち、文様においては三叉形彫去による浮出しがなく文様帯区画はヘラミガキ沈線による上下界線のみとなる。山陰の資料では古屋敷(第Ⅳ④-2図18)に類似し、三田谷文様鉢の最新段階に相当すると分かる。三谷遺跡の木葉文をもつ窄口形鉢は相対的に古相を示す資料であるが、三田谷遺跡(第Ⅳ④-2図13)には三田谷文様をもつ同形の資料がある。三田谷遺跡においても窄口形鉢は古く位置づけられるので、両地域に一定期間の持続的な交流があったと分かる。また、三田谷文様と木葉文をふくむ、中国山地を越えた南北交流の資料に鳥取県古海遺跡および香川県大浦浜遺跡から出土した鉢形土器(第Ⅳ④-2図19・20)がある。いずれも全形は不明であるが、眼鏡状隆帯に類する突帯を変曲点として上方に立ちあがる器形が共通し、古海資料(第Ⅳ④-2図20)

には第2段階(第Ⅳ④-2図15)にあたる三田谷文様が、大浦浜資料(第Ⅳ④-2図19)には木葉文が施される。これら一連の資料により山陰と四国のあいだの交流が一定期間、三田谷文様と木葉文をもちつつ展開したと分かる。なお、三田谷文様は八日市新保式との類似から、櫃原式文様と同様の問題を抱えつつ、北陸と山陰の結びつきを示す資料と理解されるが(設楽 2009など)、古海遺跡(第Ⅳ④-2図20)の三叉形彫去文と秋田県平鹿遺跡(第Ⅳ④-1図17)の三角形彫去文を関連づけるなら、三田谷文様が、鈴木正博(2000)がT字形三叉文の関連資料として示した大洞C2式～大洞A1式土器の影響を受けて出現した可能性が考慮される。

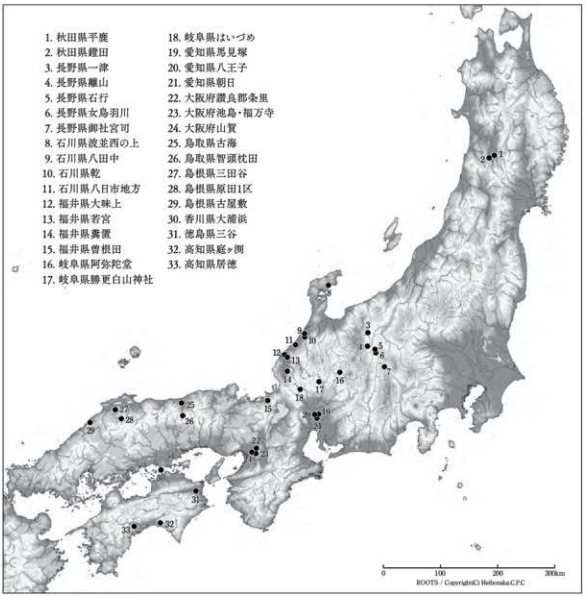
居徳と山陰の繋がりについては、口唇部杯状突起や環状浮文において可能性を指摘したが、三谷遺跡に比べれば結びつきは弱い。他方、居徳と山陰には対向する三叉形彫去により隅丸台形の浮出しの作出する点に共通性がある(第Ⅳ④-1図11、第Ⅳ④-2図12)。ただし浮出しに施文される三叉文には違いがあり、三田谷ではT字形三叉文(第Ⅳ④-2図12)を1単位、居徳ではY字形三叉文(第Ⅳ④-1図11)を2単位加える。このY字形三叉文および類した三叉文(第Ⅳ④-1図1)は居徳に特有で、山陰あるいは北陸とも異なる地域的な特徴といえる。また居徳の三叉形彫去による浮出しは楕円形が顕著である(第Ⅳ④-1図13・16)。楕円形の浮出しは併行期の資料を対照すると紡錘形に文様化した浮線文から派生したと考えられるが(石川 1985、鈴木 1985、設楽 2004)、楕円形の浮出しは殊の外他地域に少なく、とくに居徳で好まれた意匠といえる。

蓋は、筒形土器と共に北陸と居徳をつなぐ主要要素と考えられたが(鈴木 2007)、関根(2002)は起源と目される北陸地方に該当する器種がなく、また居徳遺跡に蓋と組み合う壺形土器が認められないことから、全てを浅鉢と考えた(第Ⅳ④-1図13他)。確かに北陸地域において蓋が消失する時期にあたり道理であるが、一方で木胎彩色漆器が蓋として現れたことが気に掛かる。強いて蓋に対応する器種を居徳遺跡に求めると、麥容壺の一種である浅鉢系無頸壺(宮里 2022b)がある。浅鉢系無頸壺は口径12cmほどで蓋に対応するともいえるが説明に窮する難点は残る。

むすび

新たな知見を加え居徳遺跡の異系統土器を再論した。香炉形土器は、東北に起源し大型化や細部の変様を伴う搬入品としてもたらされた。口唇部杯状突起・環状浮文については、山陰の可能性を考慮しつつ「突起・隆起傾向」を背景とする現象と考え、北陸・東海・中部地域において浮線渦巻文土器を産み出す流れをひとつの発信力と認めた。隆帯十字区画については大きな変容を伴う要素の波及と考え、木葉文については山陰と四国の交流にふくまれる要素と捉えつつ鉢から壺へと施文対象が替わる状況を確認した。また居徳遺跡と三谷遺跡は北陸系統に共通点があるが、大洞式縦区画帯装飾壺や結髪土偶、香炉形土器など東北起源の器物に特徴がある居徳に対して、三谷は浮線文系の舟形土器や山陰の三田谷文様を特徴とするなど、両者の方向性の違いが浮彫となった。こうした縄文・弥生移行期の入り組んだ状況を整理するために、居徳遺跡においては未定資料に対する系統関係をさらに追求し、くわえて木胎彩色漆器の系譜問題(鈴木 2000、設楽・小林 2007、宮地 2017)にも取り組みたいが、また一方で該期の小さな地域圏を把握することも重要と感じる。

居徳遺跡の第8段階にあたる深鉢は刻凸長頸型(宮里 2022a)であり、備讃瀬戸の服部型(宮里 2002a)の類縁である。三谷遺跡では器体が緩いS字形をなし口縁突帯の位置が低い深鉢(第Ⅳ④-2図10、勝浦 2000)を中心とし、今宿型(丹治 2000)や水走型(岡田 2016)など播磨灘・大阪湾対岸域に通じる。また三谷遺跡には服部型(第Ⅳ④-2図9)が少数ふくまれており瀬戸内との交流も認められる。こうした粗製深鉢の小さな地域性(阿部 1999、大塚 2008)は広域を対象とする異系統問題の基盤となるのであり、関係地域における粗製深鉢の型式と分布圏が明示されることで(幸泉 2020b)、「経由」や「変容」の内容はより具体的なものとなろう。道のりは長いが継続して進めたい。



第Ⅳ④－6図　遺跡の位置

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。

久田正弘、馬場伸一郎、根岸洋、あいち朝日遺跡ミュージアム、秋田県立博物館、石川県埋蔵文化財センター、一宮市博物館、大阪府文化財センター、大町市文化財センター、岐阜県文化財保護センター、高知県埋蔵文化財センター、島根県教育庁埋蔵文化財センター、智頭町教育委員会、尖石縄文考古館、徳島市立考古資料館、福井県教育庁埋蔵文化財センター、湯沢市教育委員会

註

(1)報告では「大洞式土器」（高知県埋蔵文化財センター編 2002）とされ、鈴木正博（2007）は「特殊壺」、設楽博己（2009）、久田正弘（2013）は「隆線連子文」とし、関根達人（2022）は「大洞A1式装飾壺」「（大洞A1式）連子窓文壺」、関連資料を「（大洞A1 式）縦区画文壺」と呼称した。本稿では、胴部に縦長の長方形区画を横繋ぎにした文様帯をもち、口縁部に角状突起帯や隆帯を加え、ときに漆塗りされる装飾土器として、便宜的に「（大洞式または大洞系）縦区画帯装飾壺」とする。

(2)北陸における浮線渦巻文土器の顕著な被熱痕については久田正弘氏から教示を受けた。

文献

阿部芳郎、1999、「精製土器と粗製土器―学史的検討と土器型式による地域認識の問題―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集、帝京大学山梨文化財研究所、265～284頁

石川日出志、1981、「三河・尾張における弥生文化の成立―水神平式土器の成立過程について―」『駿台史学』第52号、駿台史学会、39～72頁

石川日出志、1985、「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号、信濃史学会、152～169頁

今村啓爾、2011、「異系統土器の出会い―土器研究の可能性を求めて―」『異系統土器の出会い』、同成社、1～26頁

江崎武、1965、「所謂「大地式土器」の再検討」『いちのみや考古』第6号、一宮考古学会、35～39頁

大塚達朗、2008、「精製土器と粗製土器」『縄文時代の考古学7　土器を読み取る―縄文土器の情報―』、同成社、312～322頁

岡田憲一、2000、「三田谷Ⅰ遺跡出土土器文様をめぐる問題」『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』、島根県教育委員会、81～84頁

岡田憲一、2016、「「凸帯文」と「遠賀川」の連接―奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文集―』、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁

勝浦康守、2000、「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器―三谷遺跡・名東遺跡資料の検討―」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、453～470頁

神村透、1988、「浮線渦巻文土器」「(条痕文系土器)文化をめぐる諸問題―縄文から弥生―　資料編Ⅱ・研究編」、愛知考古学談話会、83～90頁

幸泉満夫、2019・20a、「谷尻系土器群の研究(上・下)」「縄文時代」第30・31号、縄文時代文化研究会、111～128頁／79～101頁

幸泉満夫、2020b、「縄文文化解体期をめぐる土器資料群の研究3―丹後～北陸西部域における"文様のない粗製深鉢群"の再検証―」『古文化談叢』第85集、九州古文化研究会、1～66頁

紅村弘、1956、「愛知県における前期彌生式土器と終末期縄文式土器との関係―土器型式の分類とその編年―」『古代学研究』第13号、古代學研究会、1～9頁

設楽博己、2004、「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集、島根考古学会、189～209頁

設楽博己、2009、「東日本系土器の西方への影響」『弥生時代の考古学2　弥生文化誕生』、同成社、188～203頁

設楽博己・小林青樹、2007、「板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」『新弥生時代のはじまり第2巻　縄文時代から弥生時代へ』、雄山閣、66～107頁

杉原荘介、1949、「尾張西志賀遺跡調査概報」『考古学集刊』第3冊、東京考古学会、11～21頁

鈴木正博、1985、「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』、早稲田大学出版部、83～135頁

鈴木正博、2000、「土器型式」の眼差しと「細別」の手触り―大洞A1式「縁辺文化」の成立と西部弥生式における位相―」『埼玉考古』第35号、埼玉考古学会、3'31頁

鈴木正博、2006、「三河・尾張に於ける浮線文系土器群の編年的位置について」『いちのみや考古』No.20、一宮考古学会、51～82頁

鈴木正博、2007、「「亀ヶ岡式」分布の南下と西日本の漆工芸―「彩色漆文様帯」による弥生式文化形成視点の確立―」「環境史と人間」第一冊、明治大学学術フロンティア、63～91頁

関根達人、2021、「西日本出土の大洞A1土器の製作地と製作者」『特別展図録　近畿最初の弥生人』、大阪府立弥生文化博物館、60～69頁

関根達人・柴正敏、2022、「居徳遺跡出土の大洞A1式装飾壺の製作地と製作者」『高知県立歴史民俗資料館紀要』第26号、高知県立歴史民俗資料館、1～12頁

関根達人・柴正敏・佐藤由羽人、2023、「居徳遺跡出土の北陸系・中部高地系土器」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第27号、高知県立歴史民俗資料館、1～17頁

丹治康明、2000、「突帯文期の地域間交流」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、793～803頁

出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相：田村タイプと居徳タイプ」「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁

永井宏幸、1994、「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総論編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集、363～376頁

春成秀爾、2021、「木葉文土器の意義」『明石の歴史』第4号、明石市、13～44頁

春成秀爾、2023、「木葉文と農耕祭祀」『弥生文化博物館研究報告』8、弥生文化博物館、207～222頁

春成秀爾、2023、「四国の木葉文土器」『季刊考古学・別冊31　四国考古学の最前線』、雄山閣、29～32頁
久田正弘、1988、「八田中遺跡出土土器の考察」「八田中遺跡」、石川県立埋蔵文化財センター、72～90頁
久田正弘、2013、「西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及」『石川県埋蔵文化財情報』第30号、石川県埋蔵文化財センター、25～34頁
深澤芳樹、1989、「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号、考古学研究会、39～66頁
藤森栄一、1942、「七宝繋状文の石刀―薩摩仁田川の新資料―」『古代文化』第13巻第4号、日本古代文化研究会、36～39頁
豆谷和之、1995、「前期弥生土器出現」『古代』第99号、早稲田大学考古学会、48～73頁
豆谷和之、2002、「眼鏡状浮文から指づくね貼付突帯へ」「環瀬戸内海の考古学 上巻」、古代吉備研究会、253～266頁
宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」「海南史学」第54号、高知海南史学会、1～20頁
宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する―高知県における縄文時代研究の現状と課題―」「中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集」、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁
宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」「中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集」、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
宮里修、2022a、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」「高知考古学研究」第6号、高知考古学研究会、1～26頁
宮里修、2022b、「南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年」「海南史学」第60号、高知海南史学会、1～22頁
宮里修、2023、「南四国出土土偶の系譜」「高知考古学研究」第7号、高知考古学研究会、1～21頁
宮地聡一郎、2017、「西日本縄文晩期土器文様保存論―九州地方の有文土器からの問題提起―」「考古学雑誌」第99巻第2号、1～50頁
湯尻修平、1983、「柴山出村式土器について」『石川考古学研究会々誌第26号別冊　北陸の考古学』、石川考古学研究会、233～255頁
湯尻修平、2011、「浮線渦巻文土器について」「石川考古学研究会々誌」第54号、石川考古学研究会、11～30頁
湯尻修平、2020、「乾式土器について(その1)」「石川考古学研究会々誌」第63号、石川考古学研究会、19～36頁
湯尻修平、2022、「乾式土器について(その2)」「石川考古学研究会々誌」第65号、石川考古学研究会、1～16頁

報告書

愛知県埋蔵文化財センター（石黒立人他）編、1994、『朝日遺跡Ⅴ(土器編・総集編・図版編・索引編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集
愛知県埋蔵文化財センター（樋上昇）編、2002、『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集
秋田県教育委員会(小玉準)編、1983、『平鹿遺跡』、秋田県教育委員会
秋田県教育庁社会教育課(山下孫継他)編、1974、『鎧田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集、秋田県教育委員会
石川県教育委員会(高堀勝喜他)編、1976、『能都町・波並西の上遺跡発掘調査報告書』、石川県教育委員会
石川県立埋蔵文化財センター（久田正弘他）編、1988、『八田中遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター
石川県埋蔵文化財センター（岡本恭一）編、2001、『松任市乾遺跡発掘調査報告書Ａ・Ｃ区下層編』、石川県埋蔵文化財センター
一宮市(澄田正一)編、1967、『新編 一宮市史 資料編二 弥生時代』、一宮市
大阪文化財センター編、1984、「山賀(その3)」、大阪文化財センター
大阪府文化財センター（田中龍男他）編、2008、『池島・福万寺遺跡5』大阪府文化財センター調査報告書第179集、大阪府文化財センター
大阪府文化財センター（中尾智之他）編、2009、『讃良郡条里遺跡Ⅷ』大阪府文化財センター調査報告書187、大阪府文化財センター
大町市教育委員会(篠崎健一郎他)編、1990、『一津』大町市埋蔵文化財調査報告書第16集、大町市教育委員会
香川県教育委員会編、1988、『大浦浜遺跡』、香川県教育委員会
岐阜県教育委員会編、1989、『はいづめ遺跡』、岐阜県教育委員会
岐阜県文化財保護センター（藤田英博他）編、1994、『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第18集
岐阜県文化財保護センター(長屋幸二)編、1995、『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第22集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集（1A・1C・1DN・1F区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行）編、2004、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集（5A・3A・1C・4D区）
小松市教育委員会（福海貴子他）編、2003、『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会
島根県教育委員会（島谷芳雄）編、2000、『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』、島根県教育委員会他
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（西尾克己他）編、2004、『家ノ脇Ⅱ遺跡　原田遺跡1区　前田遺跡Ⅳ区』、島根県教育委員会他
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（伊藤智他）編、2017、『古屋敷遺跡（A・E区）』、島根県教育委員会
智頭町教育委員会（酒井雅代他）編、2014、『智頭枕田遺跡』智頭町埋蔵文化財調査報告書12、智頭町教育委員会
徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（勝浦康守）編、1997、『三谷遺跡』、徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
鳥取市教育委員会（平川誠）編、1981、『古海遺跡発掘調査概報』
長野県教育委員会（小林秀夫）編、1982、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書昭和52・53年度：茅野市その5』、長野県教育委員会他
根岸洋編、2021、『紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス』平成30年度～令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（18K12557）、国際教養大学アジア地域研究連携機構
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（本多達哉）編、1999、『大味地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第43集、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（鈴木篤英）編、2006、『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第90集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（山本孝一他）編、2012、『若宮遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第127集、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（清水孝之）編、2014、『曽根田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第150集
松本市教育委員会編、1987、『松本市赤域山遺跡群Ⅱ』松本市文化財調査報告№47、松本市教育委員会他

挿図出典

第Ⅳ④－1図　1～10・14：筆者実測（高知県立埋蔵文化財センター所蔵）、15：出原（2010：図10）、11～13・16：高知県埋文（2002：Fig.53・113・118）を一部改変、17：秋田県教委（1983：242頁）、18：筆者実測（湯沢市教育委員会所蔵）

第Ⅳ④－2図　1・3・4・8・11：筆者実測（徳島市教育委員会所蔵）、2・5・6・7・9・10：徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会編（1997：第25・32・36・37）を一部改変、12・16：筆者実測（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵）、13～15：島根県埋文（2000：第2図）、17：島根県埋文（2017：第70図4）、18：島根県埋文（2017：第36図）、19：香川県教委（1988：第137図）を一部改変、20：鳥取市教委（1981：第20図）、21～26：智頭町教委（2014：第87・102図）を一部改変

第Ⅳ④－3図　1：石川県教委（1976：第10図）、2～9・11・15・19・20・24：石川県埋文（2001：第75・79・84・85・92・96・101図）、10・13：筆者実測（石川県埋蔵文化財センター所蔵）、13：福井県埋文（2012：第33図）、14・21：石川県埋文（1988：第25・53図）、22：福井県埋文（2006：第50図）、23：福井県埋文（1999：第23図）

第Ⅳ④－4図　1・2・6：大町市教委（1990：図75・77・78）を一部改変、3：長野県教委（1982：図52）、4：松本市教委（1987：第40図）、5・7・9：筆者実測（大町市文化財センター所蔵）、8・10：筆者実測（尖石縄文考古館所蔵）、11：岐阜県文化財保護センター（1994：第10図）、12・13：筆者実測（岐阜県文化財保護センター所蔵）、14：岐阜県文化財保護センター（1995：第30図）、15：筆者実測（あいち朝日遺跡ミュージアム所蔵）、16～19・21：愛知県埋文（2002：遺物図版16・20・67・68・69）を一部改変、20：一宮市（1967：第7図）、22：愛知県埋文（1994：第180図）、23：大阪府文化財センター（2009：図310）、24：大阪府文化財センター（2008：図51）を一部改変、25：大阪文化財センター（1984：第19図）

第Ⅳ④－5図　宮里（2023：第7図）

第6図　筆者作成

※教育委員会は「教委」、埋蔵文化財センターは「埋文」とする。

農耕文化の波及に際する伝統文化の
保持についての考古学的研究

2020～23年度科学研究費補助金
基盤研究(C)研究成果報告書
課題番号　20K01075

《研究代表者》
宮里 修(高知大学人文社会科学系・准教授)

2024（令和5）年3月31日

発行　高知大学人文社会科学系人文社会科学部門
高知市曙町2丁目15番1号
電話　088-844-8211